

第1章 調査の目的と経緯

第1節 調査の目的

西瓜ヶ谷やぐら群の最大の特徴は、やぐら内部の玄室奥壁や側壁に掘り込まれた五輪塔や板碑などの壁面彫刻が良好な状態で遺されていることにある。だが、こうした西瓜ヶ谷やぐら群の特徴を具体的に記録し、基礎的な情報を収集・分析することによりやぐらの築造年代を推定し、さらにはやぐらの改変等の変遷過程を解明するといった調査・研究はこれまで実施されてこなかった。

西瓜ヶ谷やぐら群と同様な壁面彫刻は鎌倉市内の百八やぐら群、瑞泉寺裏山やぐら群及び瓜ヶ谷やぐら群などに類例を見出すことができる。これらの遺跡はいずれも史跡覚園寺境内、史跡瑞泉寺境内及び史跡仮粧坂として国指定史跡に指定され保存が図られている。

平成17年度以降、鎌倉市教育委員会が西瓜ヶ谷やぐら群について実施してきた一連の調査は、当該やぐら群が上記に列記した史跡指定地内のやぐらと同等に評価できるかどうかを調査することを目的として実施したものである。同時にやぐらが鎌倉市内に多数存在しているなかで、西瓜ヶ谷やぐら群の学術的評価を行うことも調査の目的のひとつである。

第2節 調査に至る経緯

平成14年6月に遺跡の隣接地に居住する住民が鎌倉市教育委員会文化財課を訪れ、地元では近々、やぐらが存在する国有地が競売により売却される可能性があることが話題になっているとの情報がもたらされた。地元の住民は、売却後に当該地の土地利用が開始された場合、やぐら群のある丘陵全体に宅地造成等の開発行為が行われ遺跡が消滅の危機に瀕する可能性を念頭に、やぐらの保護について要望を述べた。

将来にわたってやぐらの保護を求める地元の住民は、平成14年12月18日付で鎌倉市議会12月定例会に「国有地の保全を求めるために関東財務局並びに政府関係機関への意見書の提出を求めることについての陳情」を提出し、この陳情提出を最初の具体的な行動として、これ以降、やぐらの保護に係る運動を展開することとなった。以下、住民等の主な動向を列記する。

1 平成16年度

平成16年11月11日 鎌倉市長石渡徳一（当時）がやぐらの現地視察を行う。市長はやぐらの学術的評価を鎌倉市文化財専門委員会会長に相談するよう指示。

平成16年11月12日 鎌倉市文化財専門委員会の大三輪龍彦会長（当時）に当該やぐらの学術的評価について相談をしたところ、会長からは「やぐらの壁面に五輪塔などを半肉彫りで表現する例は、山ノ内の瓜ヶ谷地区のやぐらに特徴的な傾向である。市指定史跡（当時）の瓜ヶ谷やぐら群とも共通する要素であり、同等の評価た。

平成17年2月18日 財務省関東財務局横浜財務事務所長が鎌倉市長宛に「国有地の取得要望について」を照会。

2 平成17年度

平成17年6月14日 地元住民等383名が鎌倉市議会議長に「国有地の保全を求めるために関東

財務局並びに政府関係機関への意見書の提出を求めることについての陳情」を提出。

- 平成 17 年 6 月 17 日 鎌倉市が財務省関東財務局横浜財務事務所長宛に 2 月 18 日付照会について回答。「やぐらの歴史的価値を調査した上で買取についての検討を行っていきたいと考える。当該地の取得要望については調査成果を踏まえ、改めて回答する。」という内容で回答。あわせて鎌倉市教育委員会は、財務省関東財務局横浜財務事務所長宛に当該国有地への立入り及び学術調査の実施を依頼。
- 平成 17 年 6 月 22 日 鎌倉市議会 6 月定例会建設常任委員会において、6 月 14 日に提出された陳情の取扱を協議。
- 平成 17 年 6 月 30 日 鎌倉市議会議員 7 名が市議会に「鎌倉市山ノ内 1100 番地ほか 9 筆の国有地の保全を求めることに関する意見書」を提出。審議の結果、地方自治法第 99 条の規定により鎌倉市議会から財務大臣及び国土交通大臣宛に意見書を提出（同意見書は 7 月 8 日に送付）。
- 平成 17 年 8 月 4 日 財務省関東財務局横浜財務事務所長が鎌倉市教育委員会教育長宛に国有地への立ち入り及び学術調査実施を承諾する旨を通知。
- 平成 17 年 11 月 21 日 鎌倉市議会文教常任委員会（当時）の委員が現地を視察。

平成 19 年度に鎌倉市教育委員会は、鎌倉市大町で宅地造成を内容とする開発行為により消滅の危機に瀕することとなった大町釈迦堂口遺跡の保護について緊急に取り組みを開始することとなった。この取り組みは、平成 20 年度に発掘調査及び報告書刊行に向けた資料整理作業を、平成 21 年度に国指定史跡の指定に関する意見具申を行い、平成 22 年 8 月 5 日付けで国指定史跡の指定を受け、平成 23 年度末（平成 24 年 3 月）に土地の公有地化が完了するまで、実質 5 年間の期間を要した。

この間、西瓜ヶ谷やぐら群の保護に関する取り組みは、ほぼ中断せざるを得ない状況になったが、平成 22 年 3 月 30 日及び平成 23 年 8 月 26 日の 2 回、神奈川県教育委員会文化遺産課と協議を行い、平成 24 年度以降の具体的な取り組みについて検討を行った。また平成 23 年度は、第 3 次鎌倉市総合計画の第 2 期基本計画後期実施計画（平成 24 ～ 27 年度）について見直しを行う年度であったことから、鎌倉市教育委員会では西瓜ヶ谷やぐら群の史跡指定の検討を実施計画事業として事業化し、平成 24 年度に詳細分布調査、平成 25 年度に重要遺跡確認調査、平成 26 年度に調査報告書の刊行をそれぞれ具体的な取り組みとして位置づけ、調査を実施することとなった。

第2章 遺跡の概観

第1節 地理的環境

本調査地点は、JR 横須賀線北鎌倉駅から主要地方道横浜鎌倉線（鎌倉街道）を大船方面に向かって100メートルほど北西に進み、十王堂橋の手前で道路がT字路となる地点から南に300mほど入った谷戸内に所在する。全長およそ800mの南北に細長いこの谷戸は、谷戸の東側から南側にかけて浄智寺の裏山、葛原岡神社を包括する標高80m前後の山稜に囲まれている。谷戸の西側は尾根を境に台、梶原地域が広がる。谷戸内にはおよそ6つの枝谷が存在し、各支谷を発した沢水は谷戸中央で西瓜川に合流し、鎌倉街道の十王堂橋の南側で明月谷を水源とする明月川と合流し、下流の小袋谷川へと流れ込んでいる。谷戸は現在、谷戸中央を南北に走り山ノ内と梶原方面をつなぐ市道を境として、それぞれ東瓜ヶ谷・西瓜ヶ谷の小字名で呼称されている。中世においては「瓜谷」という名で呼ばれていたことは、建武年間（1334～36）の成立と見られる『円覚寺境内絵図』に記載される「瓜谷路」の文字が示すところである。昭和40年代以降、周辺の宅地開発が増加したものの今も多くの自然が残る地域である。

第2節 歴史的環境

現在、山ノ内と呼ばれる地域は、古代においては尺度郷に属していた。古代末期、源頼義から鎌倉の地を相伝した嫡子義家は、家人である守藤（首藤）資通に当地を分け与え、資通の孫である俊通がここに住んだことにより荘園として確立し、山ノ内荘として発展していく。のちに首藤は山内首藤を名乗っている（註1）。以後、山ノ内荘は多くの史料にその名を見せており、当地の重要性を物語る。

『吾妻鏡』治承四年（1180）10月23日条では、頼朝が山内経俊からこの地を召し上げている。同じく治承四年（1180）12月22日条では、上野国新田荘下司新田義重が源頼朝の召しに応じて鎌倉に参向したが、遅参をとがめられて鎌倉に入ることを許されず当地に逗留したとある。また、養和元年（1181）12月11日条では、師公日恵が「山内辺」に葬られている。建保元年（1213）5月7日条には、当地が和田合戦の勲功賞として北条義時に与えられたとあり、以後、開発が進められていくこととなる。南北朝期の成立と推定される年月日未詳の「正統院雑掌申状事書案」に山内荘は得宗北条氏嫡流相伝の所領の一つであり直義がこれを治める、との記述があることから、鎌倉幕府滅亡まで得宗領となっていたと見られる（註2）。仁治元年（1240）10月10日、北条泰時亭で安東光成を奉行として「山内道路」を造る沙汰が行われたほか、翌二年（1241）12月30日には泰時が、「山内巨福礼別居」に入御したことが記されており、当地内に別宅を構えていたことがわかる。元仁元年（1224）12月26日には疫病が流行したため幕府は「四角四境鬼気祭」を行い、その四境として「東六浦、南小壺、西稲村、北山内」の記述がある。このことは「山内」が鎌倉の北の境であったことを示している。

ついで、建長二年（1250）6月3日に北条時頼が「山内并六浦等道路」の修理を命じており、北条氏が当地を重視していたことが窺える。建長五年（1253）11月25日、時頼は当地に建立した建長寺の落慶供養を行った。正嘉元（1257）年6月23日条には「相模太郎（北条時宗）山内泉亭」とあり、宗尊親王が度々時頼亭や時宗亭を訪れて、遊宴や遠笠懸・相撲・競馬などを行っていたことがわかる。弘安五年（1282）3月1日には、一遍が「山内」に至ったが鎌倉に入らず、夜は巨福呂坂辺で勤行したという（註3）。また当地には得宗被官の居宅もあったようで、史料には「山内ひとつのやつ」の尾

藤左衛門入道代々相伝の家地や（註4）、平頼綱の「山内屋形」などの名も見える（註5）。

弘安五年（1282）には北条時宗によって建長寺の西方に円覚寺が建立された。時をおかず浄智寺、東慶寺と建立が続く、諸寺の塔頭が並ぶ景観を呈していった。延慶二（1309）年1月14日の「建長寺直歳書下」には「建長寺門前地事、合廿四坪〈法円跡〉」（く）内は割註）のほか、「建長寺門前地事、合十二坪〈西得跡〉」とあり（註6）、高柳光寿氏は、山ノ内荘の中でも秋葉や岩瀬などの農村地域とは違い、建長寺と円覚寺の谷間といった場所に限定して坪の制を用いていることを理由に、山ノ内地区が旧市街地に取り込まれていった様相を想定している（註7）。

さて、そのような山ノ内地区の中で瓜ヶ谷はどう扱われているか。建武年間（1334～1336）に成立したとされる『円覚寺境内絵図』（以下『絵図』と表記する）では、「瓜谷路」と書かれた地域は絵図に引かれた朱線の外側に位置している（註8）。この地に屋敷を構えていたのが、「薩摩掃部入道大夫」と「飯嶋孫次郎入道」の二人で、『絵図』に記載がある。「飯嶋孫次郎入道」についての詳細は不明であるが、「薩摩掃部入道大夫」は、文保二年（1318）5月22日付けの「北条高時安堵書下」によって平成綱のことであることがわかる（註9）。この人物は『尊卑分脈』によれば頼朝に仕えて奥州合戦の時に戦功をあげた平桓平の子孫とあり、先の「北条高時安堵書下」で、「山内地〈昭西堂跡〉」が薩摩掃部大夫成綱に安堵されている。その後となる文安三年（1446）の年号をもつ「黄梅院文書」には、木足寺（目束寺・目足寺・無垢息寺とも）が花ヶ谷より「昭西堂跡」に移されたとある（註10）。『としよりのはなし』によれば「昭西堂跡」の場所は、山中稲荷の近くのおこり地蔵があった場所という（註11）。

また、南北朝期の「智真夢記」という史料がある（註12）。暦応元（1338）年、陸奥国国司北畠顕家が奥州からの上洛に際して鎌倉に立ち寄るが、顕家率いる軍勢の狼藉は甚だしく、円覚寺周辺の住民は被害を避けるため、門前にある菜園の山を切り崩して瓜谷から化粧坂へ迂回路を設けようと作事を開始したが、智真の夢に円覚寺の守護神が現れ作事の中止を求めたという。この路が『絵図』の中で現在の県道と違い湾曲して描かれている点について、松尾剛次氏は円覚寺側が自身の領地を示すために絵図の余白に収まるように曲げて書いたのだらうと解釈している（註13）。

他方、『としよりのはなし』によれば、東瓜ヶ谷には観蓮寺という寺院が存在したという（註14）。貫達人氏によれば、観蓮寺の寺伝に甘粕氏が開基との伝承があるという（註15）。『新編相模風土記稿』の多聞院の項には「山之内村瓜ヶ谷に観蓮寺屋鋪と唱ふる白田あり。当寺の持とす。観蓮は蓋当寺の旧号にや」とあり、観蓮寺がかつて所在した土地を多聞院が所有し、移設されたとの説明を裏付ける（註16）。なお同史料によると、多聞院は「晴明石」と呼ばれる境界の目印となる石を所有していたという（註17）。現在「晴明石」は八雲神社に所在するが、本来は県道の道路にあったものを戦後になって進駐軍が重機で掘り起こしてしまったといい、ひとまず天王屋敷に移された後、昭和44（1969）年になって八雲神社へ移設したのだという（註18）。『絵図』中の「瓜谷路」と「山内路」が交わる所にある「十王堂」や「簀屋」の存在は、この辺りが鎌倉の内と外の境界であったとしてしばしば議論に取りあげられる（註19）。

また、時代が下って昭和初期の記録であるが、「鎌倉一史蹟巡り会記録」に瓜ヶ谷の地蔵やぐらを訪れた際の報告がある（註20）。筵を垂らして中に人が住んでいるとの記述があり、今回調査の対象となったやぐらには近現代において人の手が加わっている可能性も指摘される。

山ノ内の瓜ヶ谷地区において、これまでに幾つかの地点で埋蔵文化財の発掘調査が実施され若干の考古学的知見が得られている。平成24年度に実施した詳細分布調査の対象範囲内ではG地区において1箇所、発掘調査が実施されている。昭和54年に宅地造成にともなって発掘調査が実施されている（報

告書未刊行)。調査時の写真を見ると、やぐらの壁面に五輪塔が彫刻されていた状況を確認することができる(第13図⑦及び写真図版11⑦)。

山ノ内字東瓜ヶ谷1294番4外所在の西瓜ヶ谷遺跡は、第3章第2節で後述する詳細分布調査のA地区の北方に位置する遺跡である。標高33m前後の丘陵部中腹の斜面を造成し、14世紀前半から15世紀中頃にかけての4時期にわたる遺構が造られていた状況が明らかになった。

山ノ内字東瓜ヶ谷1299番1外所在の円覚寺門前遺跡は、同じく詳細分布調査A地区の北方に位置する遺跡で、先述の東瓜ヶ谷1294番4外地点から約100m北方に位置する遺跡である。調査の結果、南北方向の軸線をもつ2条の溝跡が発見されており、その年代は14世紀代と報告されている。

山ノ内字藤源治928番1所在の西瓜ヶ谷遺跡は、詳細分布調査G地区の北方に位置する遺跡である。標高27m前後の丘陵部の南側裾の岩盤を削平し、水溜状の遺構を設けている。遺構の年代は15世紀代のものと考えられている。

国指定史跡仮粧坂の指定範囲にある(東)瓜ヶ谷やぐら群の北側の山稜部における調査では、やぐらの上部となる標高85m前後の丘陵の尾根上で合計7基の茶毘跡が発見されている。茶毘跡は14世紀後半から15世紀にかけての遺構である。やぐらと茶毘跡の遺構の年代は必ずしも一致するものではないが、両者が同一の丘陵に構築されている状況は中世の葬送を考えるうえで、非常に興味深いことである。

註

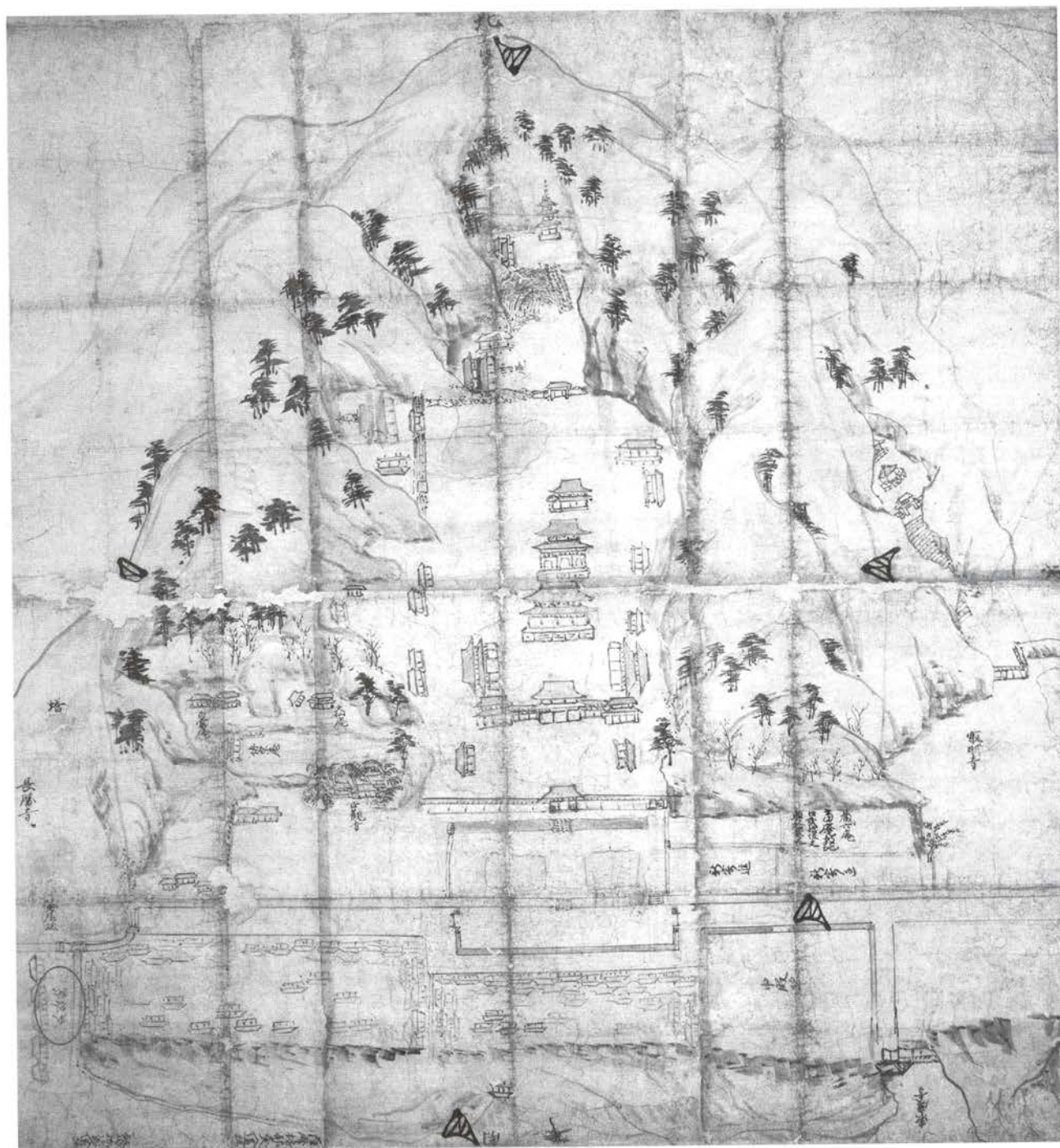
- (註1) 「山内首藤系図」(『続群書類従』巻149)「山内首藤氏系図」(『大日本古文書』家わけ15「山内家文書」)
- (註2) 『神奈川県史 資料編3上』(財団法人神奈川県弘済会、1970年)3438号文書
(「円覚寺文書／正統院雑掌申状事書案」)
- (註3) 「一遍聖絵第6」(『続群書類従』巻222。
- (註4) 『神奈川県史 資料編1』《中世編》504号文書(「田中文書／尾藤某寄進状案」)
- (註5) 『続日本随筆大成』(吉川弘文館、1979年)「建治三年日記」建治3年12月27日条
- (註6) 『神奈川県史 資料編2』1772・1773号文書(「円覚寺文書／円覚寺直歳充行状」)
- (註7) 『鎌倉市史 総説編』(吉川弘文館、1959年)354頁
- (註8) 重要文化財 書跡 紙本淡彩円覚寺境内絵図 縦97.6センチ、横90.9センチ、(所有者：円覚寺)。
- (註9) 『神奈川県史 資料編2』2129号文書(「円覚寺文書／北条高時安堵書下」)
- (註10) 『神奈川県史 資料編3下』6049号文書(「黄梅院文書／古教妙訓證文」)
- (註11) 『としよりのはなし』(鎌倉市教育委員会編、1971年)259、262頁を参照
- (註12) 『神奈川県史 資料編3上』3352号文書(「円覚寺文書／智真夢記」)
- (註13) 松尾剛次『中世都市鎌倉の風景』(吉川弘文館、1993年)109頁
- (註14) 『としよりのはなし』259頁
- (註15) 『鎌倉市史 社寺編』(吉川弘文館、1959年)184頁。
- (註16) 『新編相模風土記稿』612頁。
- (註17) 『新編相模風土記稿』281頁。
- (註18) 『としよりのはなし』265頁。

(註 19) 馬淵和雄「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐって—」(『網野善彦・石井進編『中世の風景を読む 2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社、1994) 37 頁

秋山哲雄「都市鎌倉 4 鎌倉の境界」(高橋慎一郎編『史跡で読む日本の歴史 6 鎌倉の世界』吉川弘文館、2010 年) 31 ~ 42 頁

高橋慎一郎「中世都市の境界」(竹田和夫編『古代中世の境界意識と文化交流』勉誠出版、2011 年) 137 ~ 141 頁、など。

(註 20) 『鎌倉—史蹟巡り会記録—』(鎌倉文化研究会、1972 年) 583 頁。「第 89 回 昭和 15 年 11 月 23 日〔千代塚を尋ねて〕」を参照。



第 2 図 円覚寺境内絵図 (絵図左下にある「瓜谷路」の文字を丸囲みで表示)



第3図 瓜ヶ谷周辺の歴史的環境 —明治15年迅速図— (S=1/15000)

第3章 調査の成果

第1節 平成17年度の調査（分布調査）

平成17年度の調査は、調査の範囲を財務省が所有する国有地の範囲内に限定して実施し、この範囲内に存在する遺構と認識できるもののすべてを記録し、当該遺跡の歴史的価値を明らかにするための基礎資料を作成することを目的として実施した。

その結果、具体的な対象として記録化を行った遺構は、やぐら5基、塚1基、人為的な掘削により作られた切岸状の遺構（＝岩盤の露頭）が大小合計で約40箇所である。

埋蔵文化財包蔵地台帳に記載されたやぐらの基数は、これまで7基とされてきたが、調査によってそれらの構築状況や改変後の現状を観察した結果から、改めてその基数を5基と確認するに至った。

1 1号やぐら

1号やぐらは5基ある西瓜ヶ谷やぐら群のなかで最大規模のやぐらで、現存最大幅（玄室奥壁）410cm、崩落した天井部分を除く高さが260cm、奥行き180cmを計測することができた。1号やぐらは唯一、東の方角に面して開口するやぐらである。遺構の実測図を作成する際、玄室の床面が堆積土に覆われて見えない状況で、高さの計測や平面図の作成が不可能であるため、床面を検出することを目的に部分的な発掘調査を実施した。堆積土を除去したところ、玄室の床面には方形の土坑が掘り込まれている状況が確認できた。土坑は縦130cm、横290cm、深さ30cmの規模である。玄室の手前部分、当初の羨道につながる部分については遺構の掘削を行わなかったため構造は不明であるが、土坑の縁が完結しておらず、何らかのかたちで羨道の方向に広がっていた様子がうかがわれた。土坑内には五輪塔・板碑等の石塔類、かわらけ、火葬骨が充填されていたが、今回の調査では年代の推定に参考となりそうなかかわらけ10点と板碑1点だけを取り上げ、石塔類をはじめとする全ての遺物は取り上げを行わず、発生土で埋め戻しを行い現状の回復を図った。第8図1～10はかわらけである。個々の出土遺物の法量については、表1の遺物観察表に記したとおりである。かわらけは図示したとおり器形にさまざまな型式のものが見られ、その年代にも大きな差がある。古い型式のかわらけはやぐらの造営当初の時期に、また新しい型式のかわらけはやぐらが改変（拡張）された時期に比定できればよいが、単純に2時期以上の年代をかわらけの型式が示す状況となっている。土坑からの出土状況も第7図に示したとおり、散漫な状況である。第8図11は板碑である石材は緑泥片岩で、基部の右側が一部が欠損している。表面は磨滅が著しく、記年銘をはじめとする文字部分は確認することができない。方形土坑はやぐらの造営当初に作られたものではなく、後にやぐらを改変した際に構築されたものと考えられる。その構築時期は、板碑の型式や出土したかわらけのうち、最も新しいと考えられるかわらけの年代から、おおむね15世紀以降と推定した。

1号やぐらの奥壁及び両側壁に半肉彫りで表現された16基の五輪塔は、すべてが同一時期（やぐらの構築当初）に彫られたものではなく、やぐらの玄室の拡張にあわせて順次、追刻されたものと考えられる。五輪塔の掘削順序については次節及び第4章第1節の考察に詳細を譲るが、1号やぐらは造営当初、玄室の幅が280cm程度で奥壁に7基の五輪塔が彫刻されていたものと推定される。その後、玄室は北側（向かって右側）に130cm程度拡張され、最終的に全体幅が410cmになったことが天井部の掘削痕等を根拠に推定できた。

2 2号やぐら

2号やぐらは西側に隣接する3号やぐらの造営後に構築されたやぐらで、南の方角に向かって開口している。遺存する玄室奥壁の幅125cm、高さ100cmを計測することができ、奥行きはわずかに40cmだけが遺存している。前庭部のみならず、玄室の手前側のほとんどが既に掘削を受けて消滅している。造営当初の玄室は幅、奥行ともに120cm程度の方形平面を呈する形態であったものと推定される。奥壁には板碑の彫刻が掘られていたようだが、現在は輪郭線だけを確認することができる。

3 3号やぐら

3号やぐらは2号やぐらと同様、小型のやぐらで南に向かって開口している。玄室の東側（向かって右側を）の一部を後から構築された2号やぐらによって壊されている。遺存する玄室奥壁の幅は110cm、高さは80cmで、奥行きは50cmだけが遺存している。前庭部のみならず、玄室のほとんどが掘削を受けて消滅している。当初の玄室規模は幅、奥行ともに100cm程度であったと推定される。3号やぐらの奥



第4図 平成17年度調査地点全体図 (S = 1/800)

壁には中央に五輪塔、東側（向かって右側）に板碑の彫刻が確認できる。板碑の頂部には二条線がはっきりと確認できる。板碑の彫刻は鎌倉市内のやぐらでも非常に少ない貴重な事例で、現在のところ西瓜ヶ谷やぐら群以外には瑞泉寺裏山やぐら群にのみ類例が確認されている（表3参照）。また、奥壁中央の五輪塔彫刻の西側（向かって左側）にもうっすらと輪郭線のみではあるが五輪塔の彫刻が掘られていることが確認できる。

4 4号やぐら

4号やぐらは現存する最大幅（玄室奥壁）220cm、高さ180cm、奥行き165cmを計測することができた。4号やぐらも南の方角に面して開口している。玄室の奥壁寄りには、玄室の床面より20cmほど高い段が設けられており、段の奥行きは75cm程となっている。西瓜ヶ谷やぐら群のなかでも最も小型のやぐらである。壁面に石塔の彫刻はまったく施されていない。

5 5号やぐら

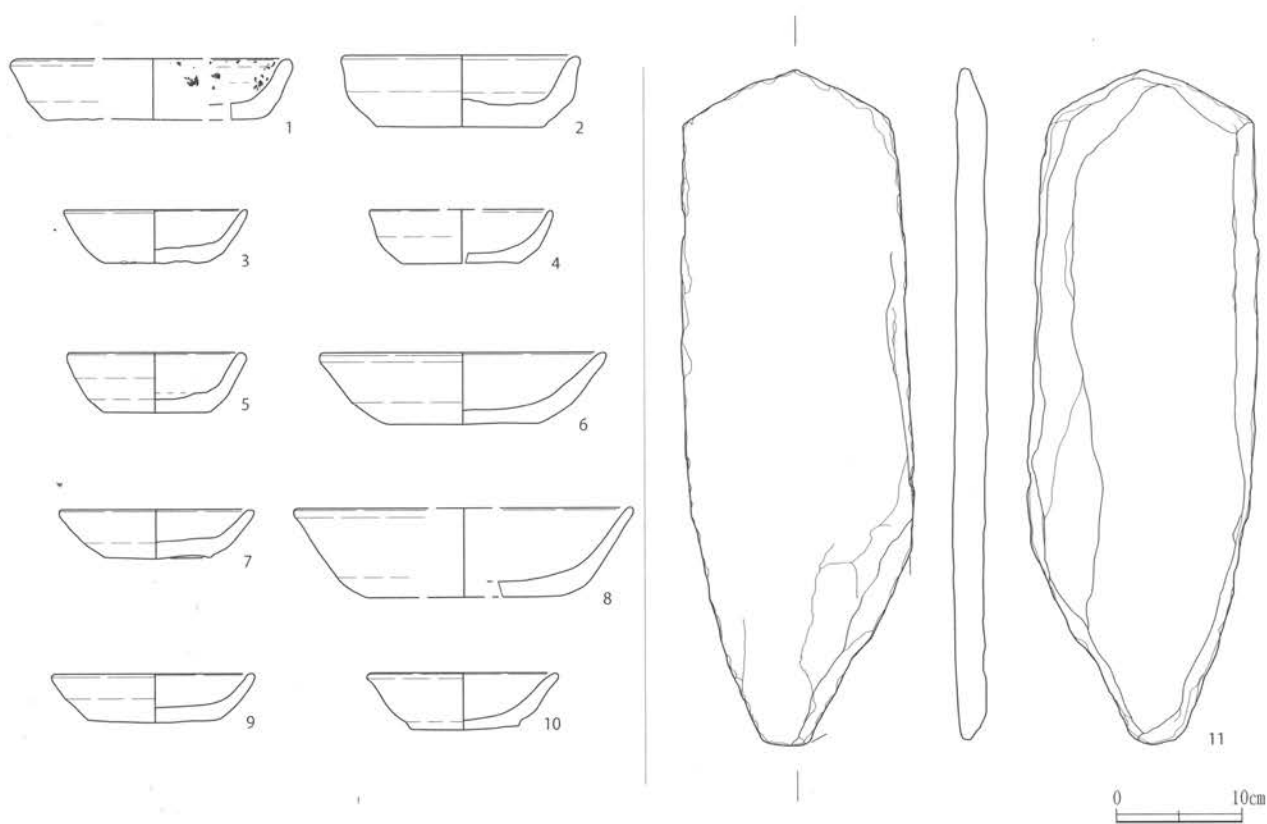
5号やぐらはやぐらのある丘陵の崖面が南向きから東向きに屈曲するコーナー部分に位置している。本来、南の方角に開口していたと考えられるやぐらであるが、玄室の東側と南側を大きく失っており、全体面積の3分の1程度が遺存している。現存する最大幅（玄室奥壁）360cm、高さ110cm、奥行き300cmを計測することができた。比較的大型のやぐらである。玄室の西側壁には2基の龕（納骨施設）が設けられている。4号やぐらと同様に石塔類の壁面彫刻はまったく施されていない。



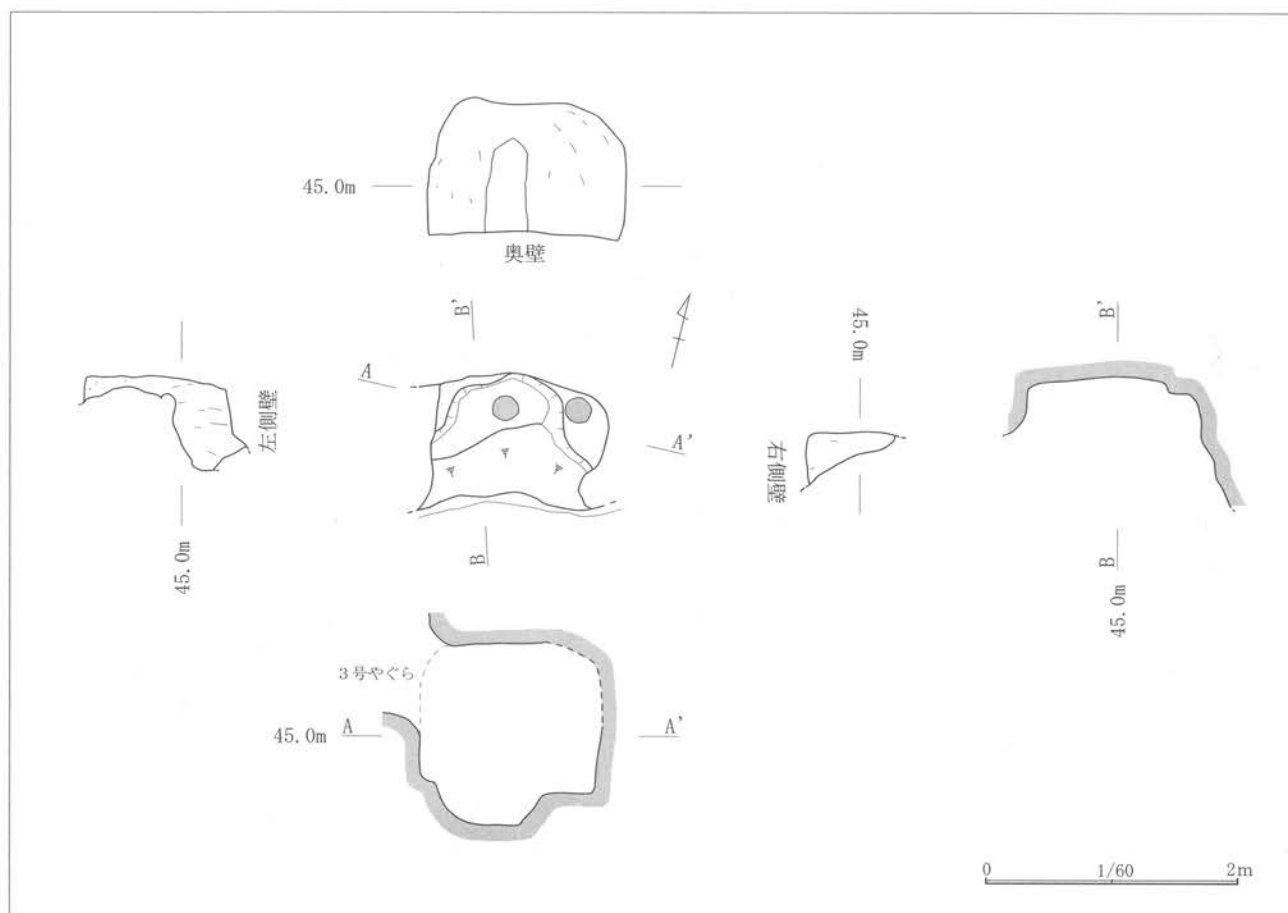
第5図 1～5号やぐら位置図 (S=1/100)



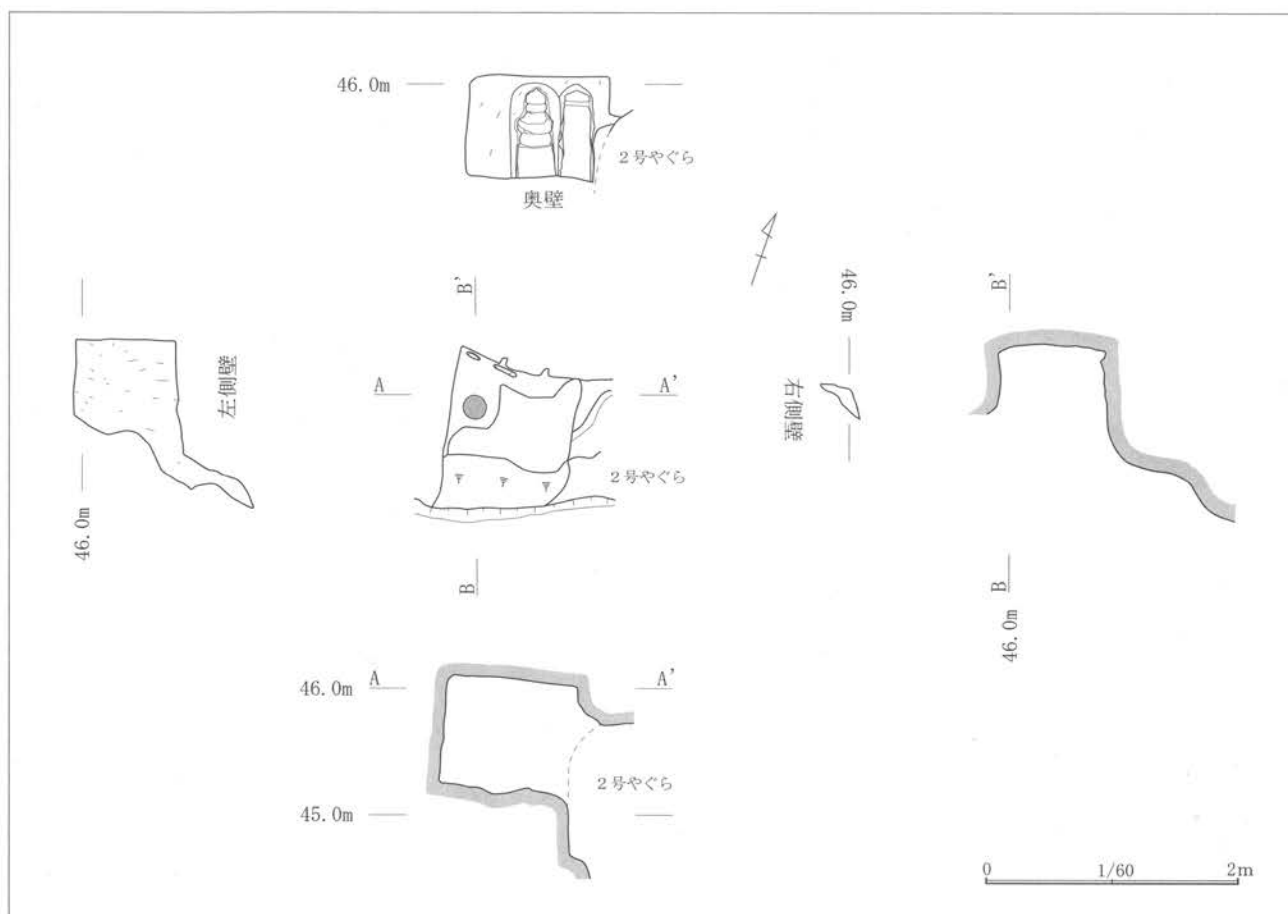
第7図 1号やぐら方形土坑 (S-1/30)



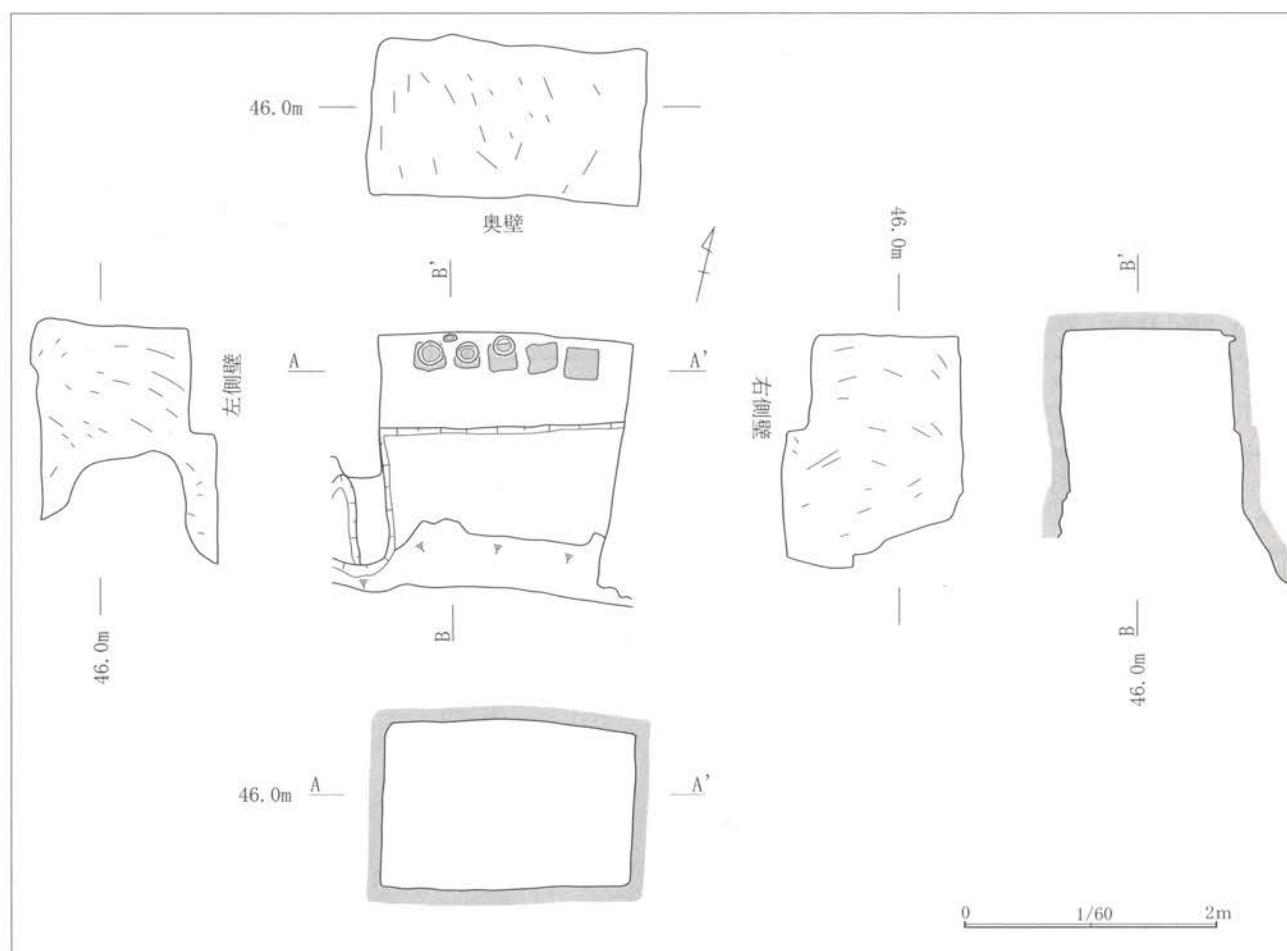
第8図 1号やぐら 方形土坑出土遺物 (S=1/3・1/6)



第9図 2号やぐら (S=1/60)



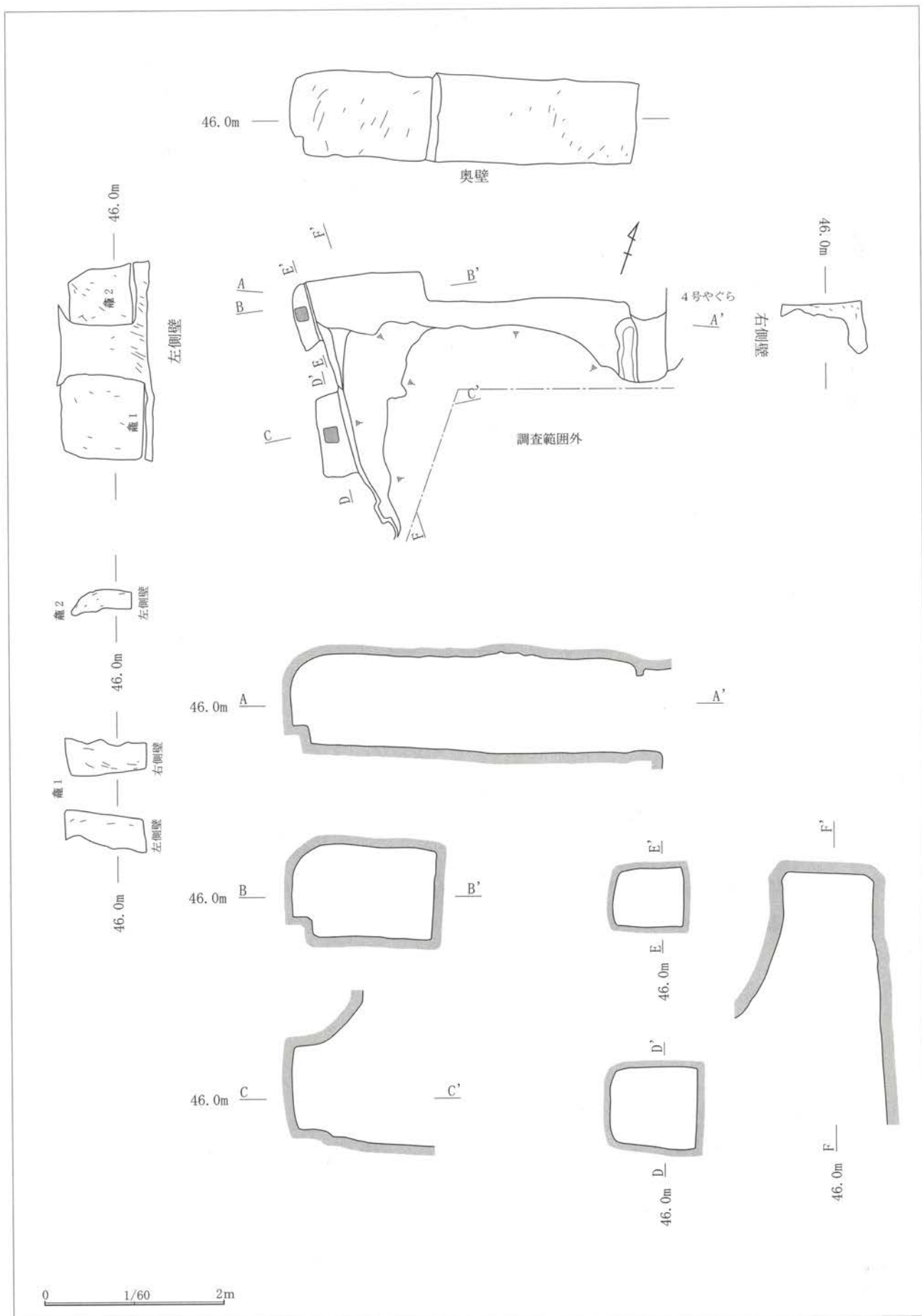
第10図 3号やぐら (S=1/60)



第11図 4号やぐら (S=1/60)

6 塚状遺構

やぐら群の西側、高位にあたる丘陵部の標高 56m から標高 58m にかけての位置に塚状の遺構が存在している。その規模は高さ約 2 m、短径約 12m、長径 18m である。塚状遺構が丘陵の先端部に位置しているため、丘陵の軸線方向にあたる東西方向に長径があり、真円形というよりはやや楕円形に近い形状を呈している。構築時期や性格については、何らの伝承等も存在しないことから現時点では不明である。



第12図 5号やぐら (S=1/60)

表1 平成17年度調査 出土遺物観察表

挿図番号	遺構	種別	口径・長径	底径・短径	器高・厚	a.成形 b.胎土 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			cm	cm	cm	
第8図 1	1号やぐら方形土坑	かわらけ	(10.9)	(8.9)	(2.9)	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂多め 白色針状物質 角閃石 雲母 c.明橙灰色 e.良好 f.内面にタール付着、非常に粗雑な作り
第8図 2	1号やぐら方形土坑	かわらけ	9.1	6.6	2.8	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂多量 白色針状物質 角閃石 雲母 c.淡橙灰色 e.良好 f.大胆大雑把な糸切
第8図 3	1号やぐら方形土坑	かわらけ	7.1	4.3	2.2	a.ロクロ、外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂微量 白色針状物質 雲母 c.明橙灰色 e.良好 f.丁寧な作り
第8図 4	1号やぐら方形土坑	かわらけ	7.0	4.8	2.1	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂多め 角閃石 雲母 c.淡橙灰色 e.良好
第8図 5	1号やぐら方形土坑	かわらけ	6.8	4.2	2.3	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂多め 白色針状物質 角閃石 雲母 c.暗橙灰色 e.良好 f.粗雑な作り
第8図 6	1号やぐら方形土坑	かわらけ	10.8	6.2	2.9	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂多め 白色針状物質 角閃石 雲母 c.暗橙灰色 e.良好
第8図 7	1号やぐら方形土坑	かわらけ	7.5	4.2	2.0	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂微量 角閃石 c.淡橙灰色 e.良好 f.丁寧な作り
第8図 8	1号やぐら方形土坑	かわらけ	(12.9)	(7.7)	(3.5)	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂多め 5mmφ粒子 角閃石 雲母 c.明橙灰色 e.良好
第8図 9	1号やぐら方形土坑	かわらけ	7.7	5.0	1.9	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂多め 白色針状物質 雲母 c.淡橙灰色 e.良好 f.粗雑な作り、硬質
第8図 10	1号やぐら方形土坑	かわらけ	7.1	4.4	2.3	a.ロクロ、外底回転糸切痕 b.微砂 白色針状物質 角閃石 雲母 c.淡橙灰色 e.良好
第8図 11	1号やぐら方形土坑	板碑	52.5	17.3	2.5	f.石材(緑泥片岩)

凡例:()を付した数値は復元による数値。その他の数値は現存し、計測された数値である。

第2節 平成24年度の調査（詳細分布調査）

平成24年度の詳細分布調査は、平成17年度に国有地部分を対象として実施した分布調査を範囲的に拡大するかたちで実施した。これは平成23年度に神奈川県教育委員会と実施した協議に基づき国有地の周辺部、すなわち瓜ヶ谷地区全体におけるやぐら及び関連遺構の分布状況を把握することを目的として計画したものである。

調査の実施にあたって、縮尺500分の1及び縮尺2500分の1の地形図を参考にしながら瓜ヶ谷地区の谷戸または丘陵を地形毎に次のとおり、A～Gの7地区に区分した調査エリアの設定を行った（第13図）。瓜ヶ谷地区のほぼ中央を南北に通る市道の東側（字東瓜ヶ谷地内）に存在する谷戸または丘陵を4地区に区分して各地区を北から順にA、B、C、Dと呼称することとし、また西側（字西瓜ヶ谷地内）に存在する谷戸または丘陵を3地区に区分して各地区を南から順にE、F、Gと呼称することとした。

調査では住宅の敷地内に立ち入り、住宅の裏などに存在する丘陵の崖面ややぐら状の横穴等について確認を行った。分布調査という性格上、原則として掘削は行わず目視により確認できた遺構について簡易的な測量、実測を行い写真を撮影した。

1 A地区（第14図、写真図版4～6）

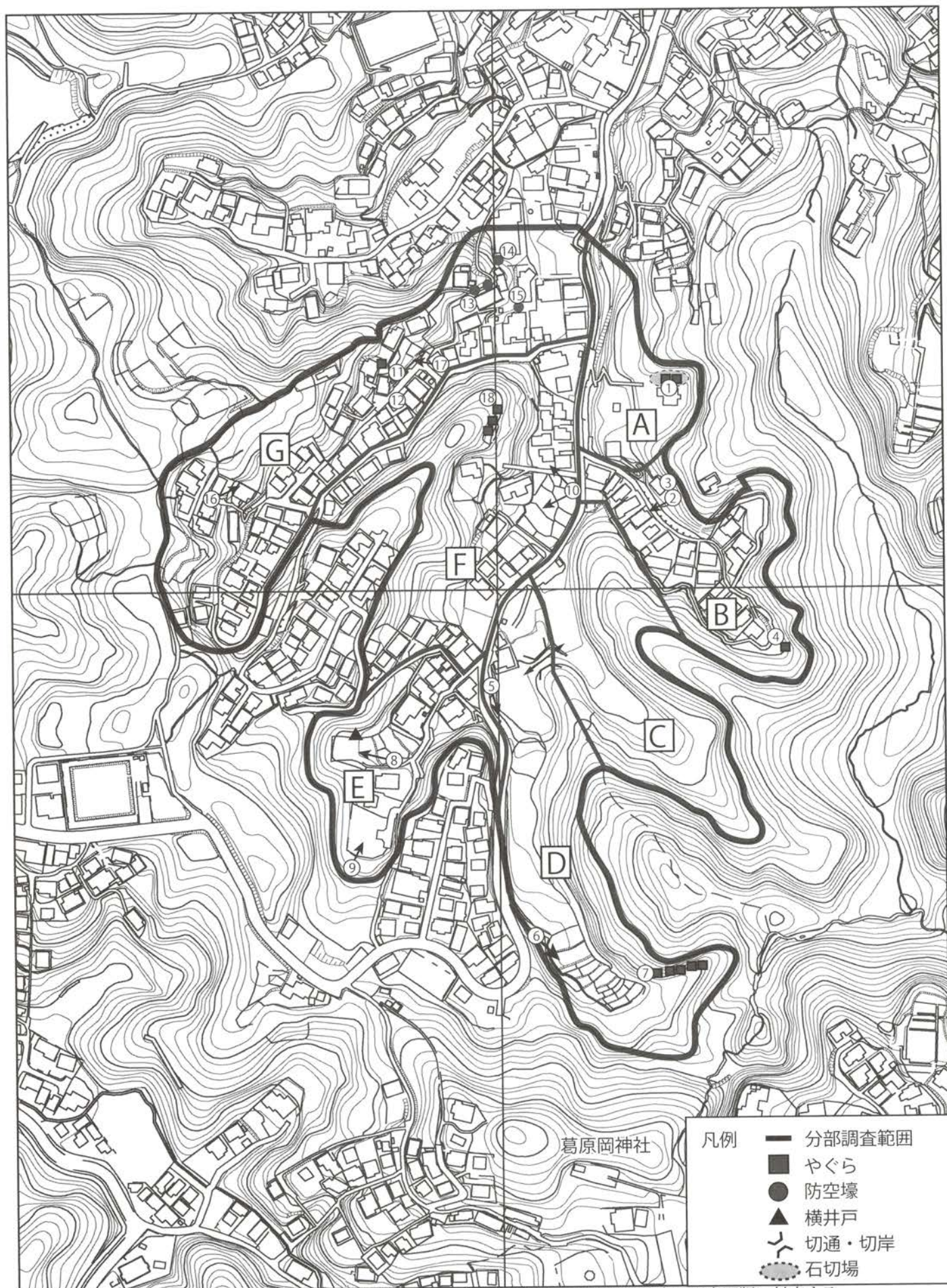
東瓜ヶ谷のうち最北に位置する谷戸である。正確には谷戸ではなく、瓜ヶ谷の中央道路に面した斜面を拡張造成し、人工的に作り上げられた雛壇状の平場である。平場は上段と下段の2段にわたって存在している。現状では道路から延びるつづら折りの私道を進み、最初に現れる下段の平場は面積の小さな平場で、道をさらに進み現れる上段の平場は面積の大きな平場である。下段平場の壁面は近代以降の開発による石垣が積まれ、壁面造成の様相を窺い知ることはできない。これに対し上段平場は壁面が垂直に立ち上がる様相を見せている。

また、上段の平場にはやぐらを確認することができた。結果として開口しているやぐら3基以外は確認することができなかった。やぐらは平場入り口となる西から順に1号から3号の名を付け、簡易的な調査を行なった。

詳細分布調査では石材採掘の痕跡を有する石切り場1箇所を確認している。石の採掘には掘削機（ドリル）が使用されていることから、採掘はやぐらの機能が失われた後の近世頃から開始され、近代以降まで続いたものと考えられる。その他、崩落により遺構の性格は不明であるが、壁面をドーム状に穿った横穴を確認している。

(1) 1号やぐら（第16図）

A地区所在やぐらのうち最西端に位置する。平面形は長方形を呈し、南側に向かって開口している。玄室、羨道、前庭を有する。玄室床面での標高は41.0mである。現状での玄室規模は幅6.5m、奥行4.3m、堆積土を有する床から天井までの高さは2.0mである。羨道は幅120cmを測る。羨道前面の広がりはおおよそ直角に曲がるかたちで広がっており、前庭部であることが予想される。よって上段平場に現存する切岸は前庭部を有する1号やぐら開削以後に調整し直されていると考えるべきであり、後世前庭部が半分ほど失われた後に現在の切岸が成立したと判断する。なお、後世の石切りは、やぐらを避けるかたちで行われ、やぐら開口部を挟む両側の切岸面にのみ削平が見られる。このことから見ても、前庭部の破壊は石切り時のものではない。一部風化や崩落の痕跡が残るものの、やぐらの残存状態は良好である。2号やぐらとの間の石切り作業が進む中、1号やぐら南東角が貫通し、人の通行が可能なほど大き



第13図 瓜ヶ谷地区やぐら等分布図 (S=1/7500) 丸囲みの数字は写真図版に対応する

な通路が形成されている。これは石切り時の造作であろう。また、この通路の西隣、地表近くに幅 10cm、高さ 20cm の穴が穿たれており、1 号やぐら内南東角付近へと通じている。開削年代、用途ともに不明である。

(2) 2 号やぐら (第 17 図)

A 地区上段平場の西壁に開口する最東端のやぐらである。平面形はおおよそ方形を呈し、南側に向かって開口しており、玄室、羨道を有する。玄室床面での標高は 40.5m である。現状での玄室規模は幅 5.9m、奥行 6.1m、堆積土を有する床から天井までの高さは 2.62m である。羨道は幅 2.2m、長さ 3.4m を測る。玄室内南壁開口部を除く面に沿って現状の床面から 20cm の段を設けている。羨道の開口部から 2.5m 位置で両側にホゾ穴を設けており、扉を設置したことが推測できる。開口部、羨道の欠失等はなく、1 号やぐらと同様、後世の石切りの影響は見られない。1 号やぐらとの間に残る石切り場の北東角から 2 号やぐら南西角に向かい、幅 0.8m、高さ 1.35m の開口部長方形の通路が開口する。長さは 2.5m である。石切りとの新旧関係は不明と言わざるを得ない。

(3) 3 号やぐら

A 地区上段平場の東壁に開口するやぐらである。1 号やぐら及び 2 号やぐらは玄室の床面が現況の地盤面とほぼ同じ高さにあるのに対し、3 号やぐらの玄室床面は現況の地盤面からかなり下位にあり、やぐらの大半が埋没している現状である。層位的に考えれば、3 号やぐらが一番古いと見るべきであろう。平面形はおおよそ長方形を呈し、西側に向かって開口している。玄室のみ残存する。現状での玄室規模は幅 2.4m、奥行 1.2m である。後世の削平を受けたと考えられる。

2 B 地区 (写真図版 7)

東瓜ヶ谷のうち北より 2 番目に位置する谷戸である。人口的に造成された A 地区を除けば、東瓜ヶ谷で最北の谷戸となる。谷戸内は現在、住宅地として開発されており、東瓜ヶ谷では唯一の住宅密集地となる。谷戸の奥は二股に分かれており、それぞれ北と東へ進む。東谷の最奥に所在する住宅背後の斜面にやぐらを 1 基確認することができたが、急峻な斜面のため測量などの調査を行うことはできなかった。このほか、谷戸入口の北側斜面上に位置する住宅背後の壁面に切岸が見えるなど、土地利用の痕跡を見ることはできたが、神奈川県による急傾斜地崩壊対策工事が B 地区の谷戸の広い範囲に施工されていることもあって、確認できたやぐらは 1 基に留まった。

3 C 地区 (写真図版 7)

東瓜ヶ谷のうち北から 3 番目の谷戸である。現在は道路面に近い部分が石材店の資材置き場として開発されている。谷戸の奥に向かうに従い、開発の痕跡は見当たらず、竹林とシダに覆われた谷戸である。D 地区より流れる清水の影響か C 地区の谷戸奥の水分なのかは明確ではないが、谷戸の奥に進むにつれ平地は湿地帯の様相を呈する。また最奥の崖面および斜面にやぐらや切岸などの人工的開削痕は認められなかった。このほか成果として C 地区と D 地区を分ける尾根の先端部分を切通し状に開削している状況を確認することができた。

4 D 地区 (第 15 図、写真図版 7～9)

東瓜ヶ谷のうち最南に位置する谷戸である。この地区は谷戸の入り口から見て手前側に一部住宅があるほかは田畑として利用されている。さらにそれ以外には竹林が広がり、谷戸の奥から流れる清水に

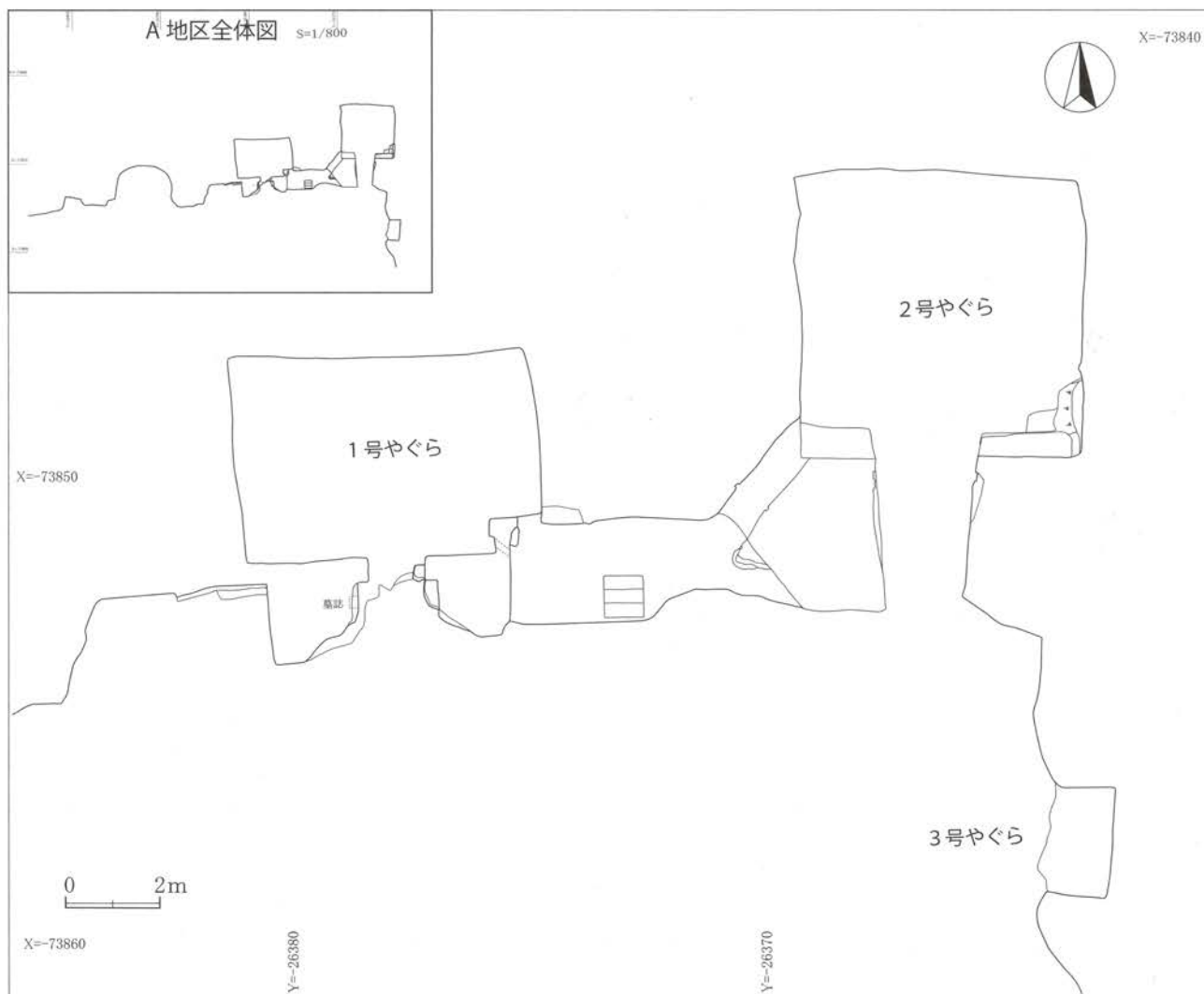
よって全体的にぬかるんだ土壌となる。そして谷戸の最奥には昭和 46 年に鎌倉市指定史跡に指定された「瓜ヶ谷やぐら群」が存在している。なお、瓜ヶ谷やぐら群の存在する山ノ内字東瓜ヶ谷 1195 番の土地は平成 19 年に国指定史跡仮粧坂の指定範囲拡大にともない、現在は国指定史跡仮粧坂の指定地となっている。

谷戸の手前側より最奥の瓜ヶ谷やぐら群へ至る道は田圃を迂回するように延びており、瓜ヶ谷やぐら群の前面を通り山頂部となる葛原岡神社まで続いている。

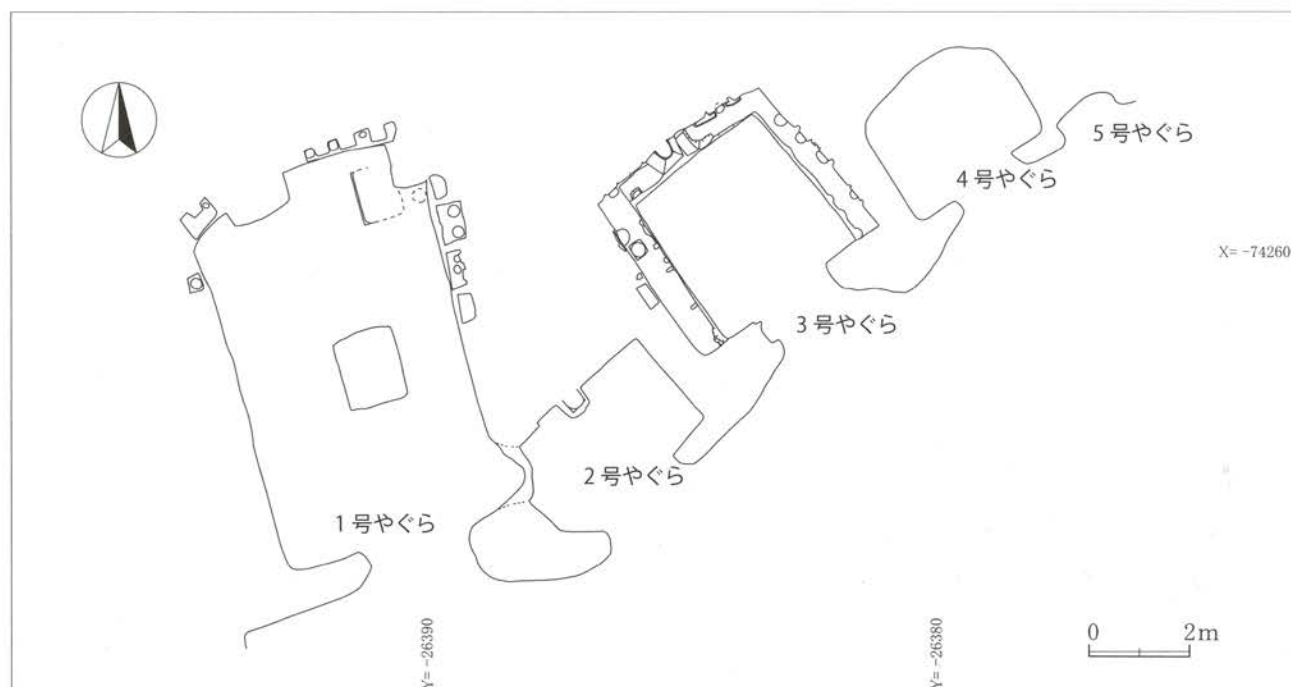
(1) 1 号やぐら（第 18 図）

D 地区所在やぐらのうち最西端に位置する。平面形は長方形を呈し、南側に向かって開口している。玄室、羨道を有する。現状での玄室規模は幅 4.5m、奥行 7.6m、床から天井までの高さは最大で 2.8m である。やぐらのおよそ中央部に台座を有する石仏が安置されるほか、奥壁中央よりやや左方向にずれた位置に石仏が一基彫り出される。このほか左側壁に 1 か所、奥壁に 2 か所、右側壁に 4 か所方形の掘り込みが見られ、内部に五輪塔を彫り出すとともに納骨を伴う龕が掘りこまれる。また東壁掘り込み上部には 4 躯の人物陽刻像が見られるなど、他に類を見ないやぐらと言える。天井は全体が西から東へ向かって 1.3m ほど高くなる。やぐら南東角に残存する天井の角度から見ると、本来は中央に向かって高くなる舟底型天井であったと見られ、この地の岩盤が西から東に向かって斜めに堆積していることを利用しての構造と推測されるが、同様に地層に起因した表層剥離によって天井が崩落し、現在の状況となったことが想定される。羨道部は崩落と風化が激しく本来の大きさを知ることはできないが、一部でホゾ穴を確認でき、現状で幅 2.0m、長さ 0.5m を測る。やぐら内部南東角に 2 号やぐらへと貫通する通路状の穴を確認できる。

左側壁の掘り込みは幅 32cm、高さ 70cm、奥行 28cm を測る。掘り込み内前面の床には納骨穴が掘られ直径 22cm、深さ 50cm を測る。奥壁は奥に向かい弧を描くように脹れて掘られ、やや左寄りに位置する石仏を境に左側壁寄りに 1 か所、右側壁寄りに 1 か所の壁面掘り込みが見られる。奥壁の左側壁寄りの掘り込みは幅 66cm、高さ 70cm、奥行 46cm を測り、中央に五輪塔が浮彫される。この五輪塔右隣の床面には納骨穴が掘られ直径 15cm、深さ 10cm を測る。右側壁寄りの掘り込みは幅 200cm、高さ 80cm、奥行 32cm を測り、五輪塔が 3 基浮彫される。それぞれの五輪塔の両隣の床面には計 3 穴の納骨穴が掘られている。左から幅 16cm 四方、深さ 10cm、幅 18cm 四方、深さ 20cm、直径 12cm、深さ 10cm を測る。この壁面掘り込みは、やぐら全体の北東角に当たる大型五輪塔（D1-1）よりも東壁に向かって掘り広げられており、もとは大型五輪塔（D1-1）までの規模であった掘り込みを拡張したと見られる。北東角に位置する大型五輪塔（D1-1）はやぐら床面から彫り出される例である。五輪塔前面となる床面に南北径 108cm、東西径 84cm の土坑を確認している。掘削はしていないが、表土に骨片が含まれることから、納骨穴であると見られる。東壁には 4 つの壁面掘り込みが確認でき、北から 1 番目の掘り込みはやぐら床面から 20cm の高さから彫りこまれ、幅 48cm、高さ 80cm、奥行 26cm を測る。この前面のやぐら床面に直径 30cm を測る納骨穴が掘られている。納骨穴の平面形は確認できたものの、掘削は行っていない。奥から 2 番目の掘り込みはやぐら床面から 20cm の高さから彫りこまれ、幅 76cm、高さ 80cm、奥行 48cm を測る。内部床面には納骨穴が 2 穴掘られ、それぞれ奥から直径 22cm、深さ 30cm、直径 22cm、深さ 30cm を測る。奥から 3 番目の掘り込みはやぐら床面から 22cm の高さから彫りこまれ、幅 72cm、高さ 70cm、奥行 32cm を測り、内部壁面に五輪塔が 2 基浮き彫りされている。奥壁五輪塔前面にあたる内部床面および中央部には龕が掘られ、それぞれ奥から直径 14cm、深さ 15cm、直径 16cm、深さ 20cm を測る。奥から 4 番目の掘り込みはやぐら床面から 20cm の高さから彫りこまれ、直径 58cm、高さ 70



第14図 A地区 1～3号やぐら位置図 (S=1/150)



第15図 D地区 1～5号やぐら位置図 (S=1/150)

cm、奥行 30cmを測る。また 4 軀確認できる人物陽刻像は、右壁面の掘り込み上に位置し、奥より 3 番目の掘り込みから 4 番目掘り込みまでの間に 3 軀が収まり、さらに手前に 1 軀が刻出される。このほか、やぐら内南東角の通路付近の右壁面に石仏と鳥居を設ける祭壇が彫り込まれている。石仏は地藏菩薩と思われるが、合掌相であることから近世期の造作、同様に鳥居も同時期の造作と判断したい。

やぐら内中央石仏

中央の石仏は肉彫りの座像で、台座から肩部までを一石で成形し、手部をはめ込み式とする。両手は現在失われ、ほぞ穴のみが残る状態である。また現存する頭部は、一石で成形された体部や台座と石材を異にし、ややシルト質の凝灰岩であることから、後補であろうと判断できる。また首部はほぞ穴が開いているわけではなく、頭部が失われた後、これを補う形で不安定ながらも置かれたと思われる。失われた手の先には右手に錫杖、左手に宝珠を有していたと推測され、ほか袈裟状の衣を着用し、結跏趺坐ではなく安座の形式を採ることなどから見て、像種は地藏菩薩であると判断できる。像の下部には蓮華座が彫り出され、さらに下部の台座はシンプルな台形状となり、岩座や反花座とはならない。衣の皺などがやや不自然で、全体のバランスから見て膝の厚みが無いなど、技術や知識の乏しい部分が散見される。年代の特定は困難であるものの、全体の様相から中世の造立であると言うことはできよう。なお、目視による観察調査であるため断定は避けるが、台座と壁面の岩室が同一と考えられることや、壁面の地層の傾斜具合が像に残る地層の痕跡と共通することなどから、中央に安置される石仏は岩盤より彫り出されたものと判断できる。

右側壁人物陽刻像

右側壁に浮彫された人物彫刻は 4 軀確認できる。道服を着用し、筆や軸を所持することから十王像を描いたものと思われる。十王像はその形態や所持品からそれぞれがどの王に当たるのかは判断できない。

やぐら内奥壁石仏

奥壁に浮彫された石仏は衣を纏い、頭部は螺髪が表現されず素髪である。肉髻があり、手は定印の形を取ることから如来像であることがわかる。他の地藏像、十王像と比較すると阿弥陀如来像とみるのが自然であろう。光背は頭光と身光とに分かれる二重円光相の形をとる。この光背は阿弥陀像に使用されても不自然ではない。

石塔

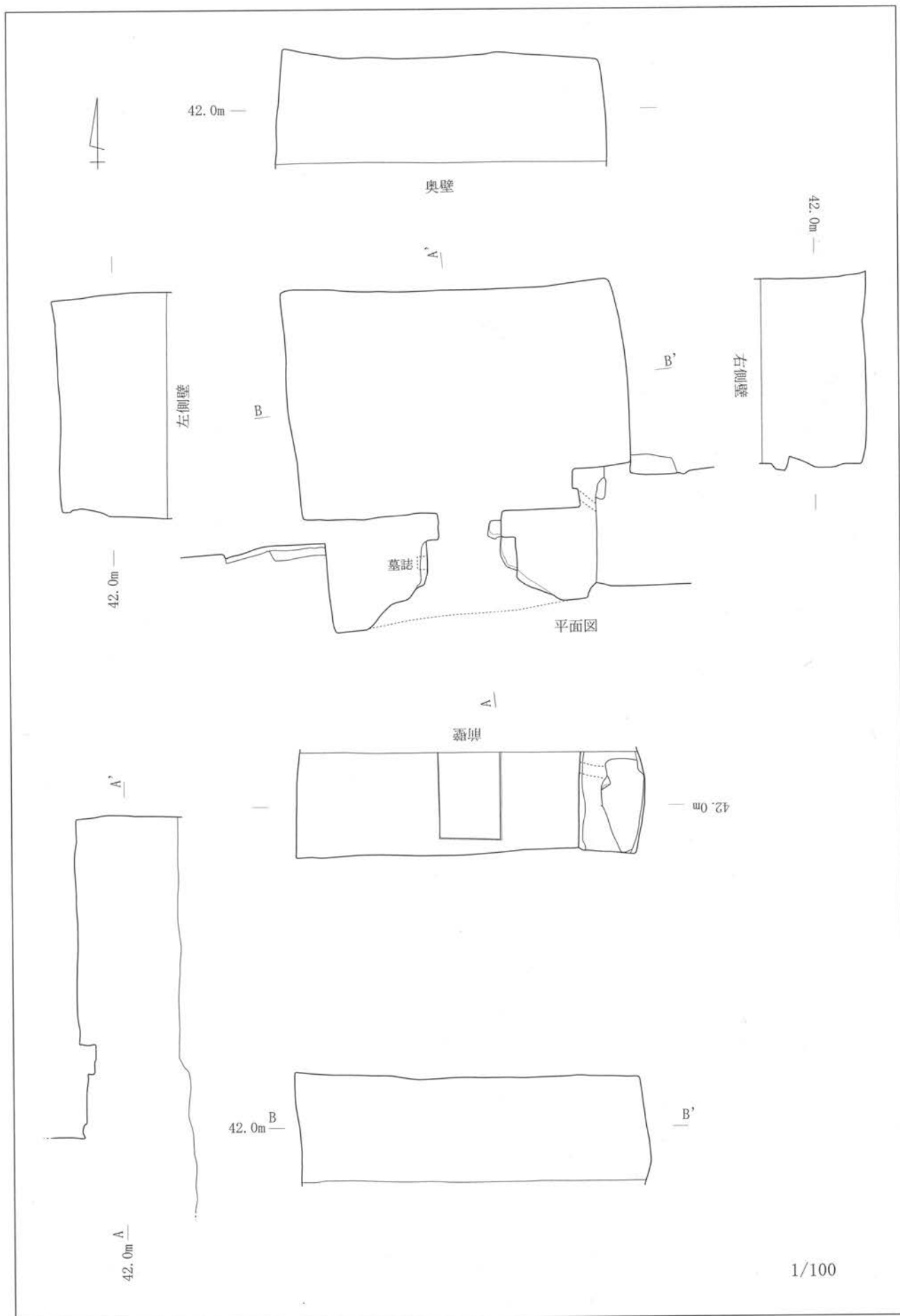
D 地区 1 号やぐらで確認できた浮彫り五輪塔は 7 基である。

五輪塔 1 (D1-1)

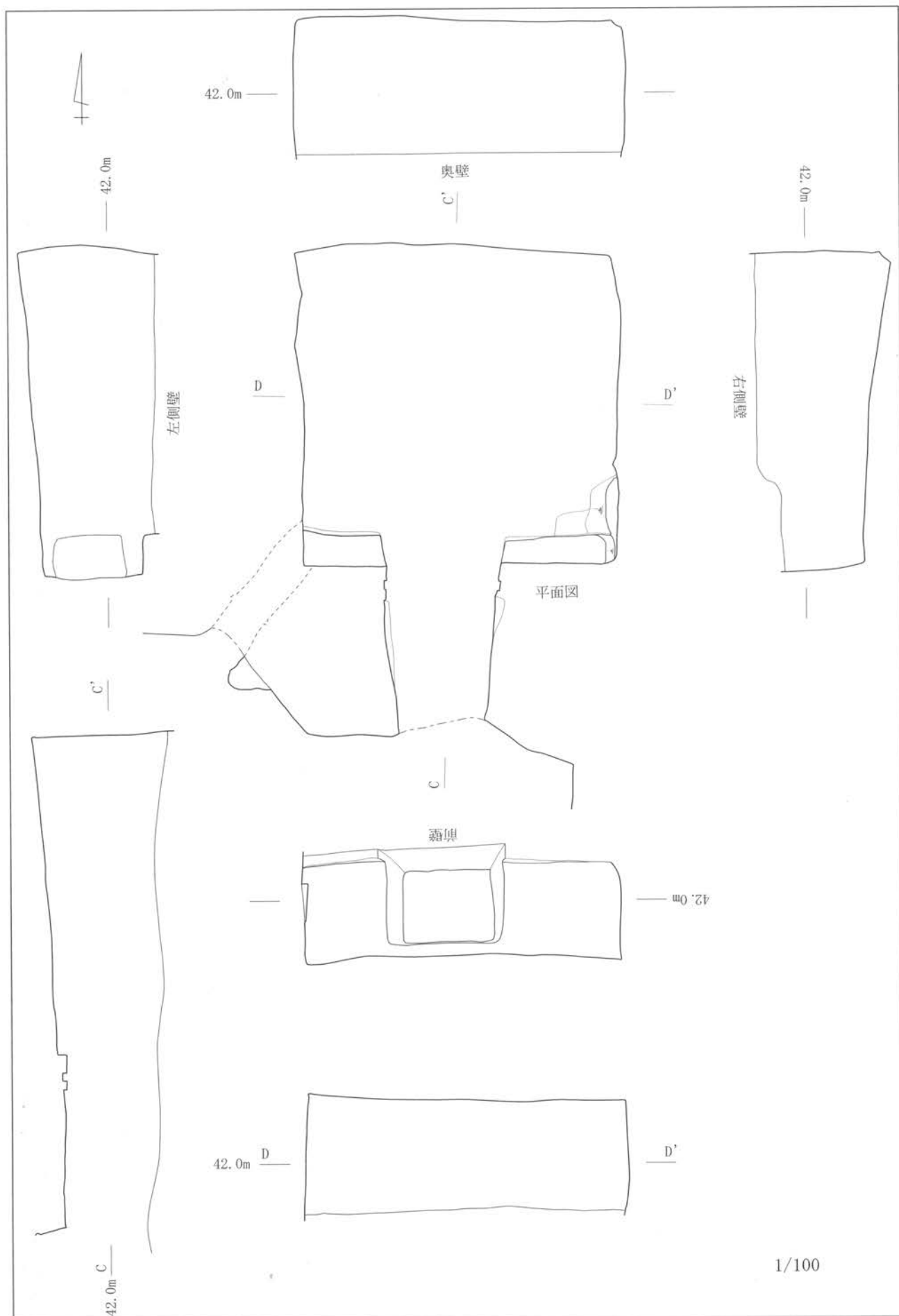
1 号やぐら右角に位置する五輪塔である。やぐら壁面から半肉彫りされ、空風輪、火輪、水輪、地輪を表現する。やぐら内五輪塔のうち最大の大きさを誇り、総高 179cmを測る。空風輪の形態、火輪の軒反りが表現されない点、地輪の高さなど石塔としての五輪塔の型式を逸脱しており、石造五輪塔の知識の無い者の造立か、図像からの造立が想定される。五輪塔形の造作は奥壁と左側壁のみであり、このうち左側壁面の方の造作が細かい。水輪は西面南面ともに最後まで成形されず、やぐら壁面に近いところで表現が止まる。2 面とも面としての成形が完全でないことから見れば、両面が接合する北東角がこの五輪塔の最も見せたい面となるのだろう。五輪塔のすぐ左側床面に確認された納骨穴には総供養塔としての意味合いがあると考えられる。

五輪塔 2 (D1-2)

1 号やぐら奥壁の左側に位置する掘り込み内の浮彫五輪塔である。火輪、水輪の一部が欠損しているものの残存状態は良い。総高 75cmを測る。同掘り込み内にある龕に対応する供養塔として考えてよい



第 16 図 A 地区 1 号やぐら (S=1/100)



1/100

第 17 図 A 地区 2 号やぐら (S=1/100)

だろう。

五輪塔 3 (D1-3)

1号やぐら奥壁の右側に位置する掘り込み内の浮彫五輪塔3基のうち、左に位置する五輪塔である。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良く、総高 69.8cm を測る。空風輪が先端部まで表現されておらず、掘り込みの天井に接するところで止まり完結していない特異な表現である。また火輪は丁寧に造られるものの、水輪、地輪がほぼ同幅で、一度に切り出したところから切り込みを入れることで成形するなど、造作方法にかなり簡略化の様子が見てとれる。

五輪塔 4 (D1-4)

1号やぐら奥壁の右側に位置する掘り込み内の浮彫五輪塔3基のうち、中央に位置する五輪塔である。空風輪は良く残るが、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良くない。総高 69.8cm を測る。地輪と水輪または火輪の境界など、成形にはそれほど簡略化が見られないが、天井で空風輪の表現が止まる点など五輪塔 3 (D1-3) との共通点は多い。彫が丁寧である分、古い様相が見られるが、空風輪の型式から見て、五輪塔 3 (D1-3) に比べ本塔の方が新しいと判断したい。

五輪塔 5 (D1-5)

1号やぐら奥壁の右側に位置する掘り込み内の浮彫五輪塔3基のうち、右に位置する五輪塔である。空風輪は綺麗に残るものの、火輪、水輪、地輪の残存状態はあまり良くない。総高 69.8cm を測る。空風輪は他の2基同様天井で表現が止まる。また水輪の右下部分の仕上がりが雑であるが、これは目の前に大型五輪塔 (D1-1) が存在していたことにより作業効率が悪かったことが想定される。したがって、大型五輪塔 (D1-1) が本塔に先行すると見たい。五輪塔 3 (D1-3)、五輪塔 4 (D1-4) 同様、龕の埋納骨に対する供養塔と見られる。

五輪塔 6 (D1-6)

1号やぐら右側壁の掘り込み内の五輪塔2基のうち奥に位置する浮彫五輪塔である。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は非常に悪く、おおよその外径を測量するに留まった。総高 69.8cm を測る。龕の埋納骨に対する供養塔と見られる。

五輪塔 7 (D1-7)

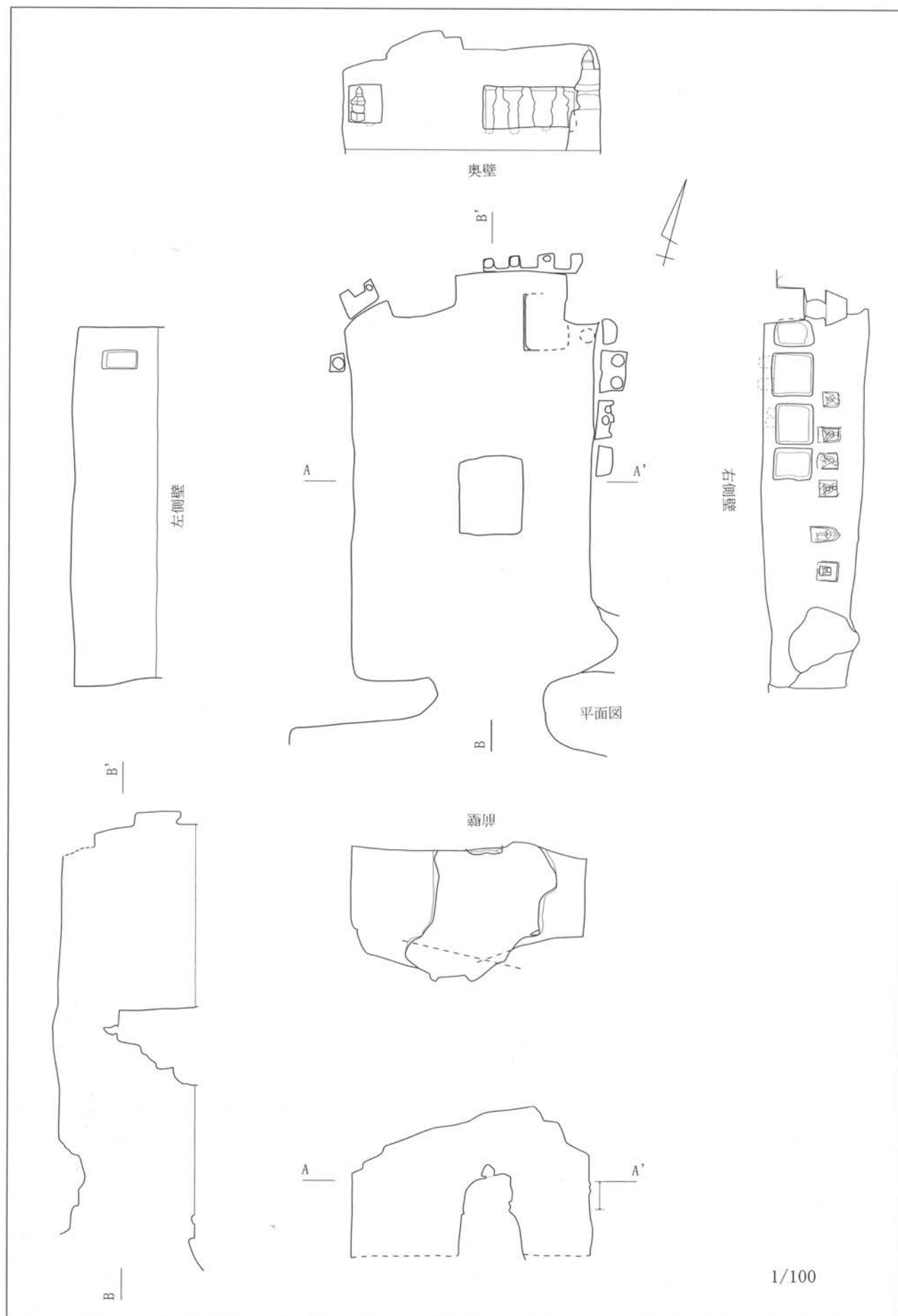
1号やぐら右側壁の掘り込み内の五輪塔2基のうち手前に位置する浮彫五輪塔である。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は非常に悪かったが、総高 69.8cm を測る。龕の埋納骨に対する供養塔と見られる。

(2) 2号やぐら (第19図)

D地区に並ぶやぐらのうち西側から2番目に位置する。平面形は長方形を呈し、玄室及び羨道を有し、南東方向に向かって開口している。現状での玄室規模は幅 3.45m、奥行 2.2m、床から天井までの高さは 1.55m である。現在天井は崩落しているが、一部残存する天井痕から本来は平坦な天井であったと判断される。また、前壁の西角付近も崩落しており、開口部西側の一部を残し、壁面は残っていない。

中央に五輪塔が1基浮彫に彫り出されるほかは、装飾は見られない。左側壁と奥壁の角が1号やぐらへと貫通しており、人の通り抜けができるほどのトンネルとなっている。1号やぐらが拡張される際にあいた穴を拡張させたと考えられるが、判断は難しい。玄室内部の掘削は行っていないものの、1号やぐらとのトンネルより確認できる2号やぐら堆積土層からは、幾度か火を使用した痕跡として炭化物層を確認することができる。

石塔



第18図 D地区 1号やぐら (S=1/100)

D地区2号やぐら五輪塔1 (D2-1)

2号やぐら奥壁中央に位置する五輪塔である。奥壁より半肉彫りに彫り出され、やぐら開口部から見える面を正面とし、両側面は完全には彫り出されていない。総高142cmを測り、正面にのみ種子が彫られる。空風輪、火輪、水輪、地輪が彫り出されていたのだろうが、風化により水輪の下半分と地輪は失われている。種子は空風輪と火輪で五大種子のキャ・カ・ラのみを確認できた。火輪の種子の右上に漢数字の「六」が掘り込まれるが、当初からのものかは判断できない。全体に漆喰が塗られていた痕跡が残る。

(3) 3号やぐら (第20図)

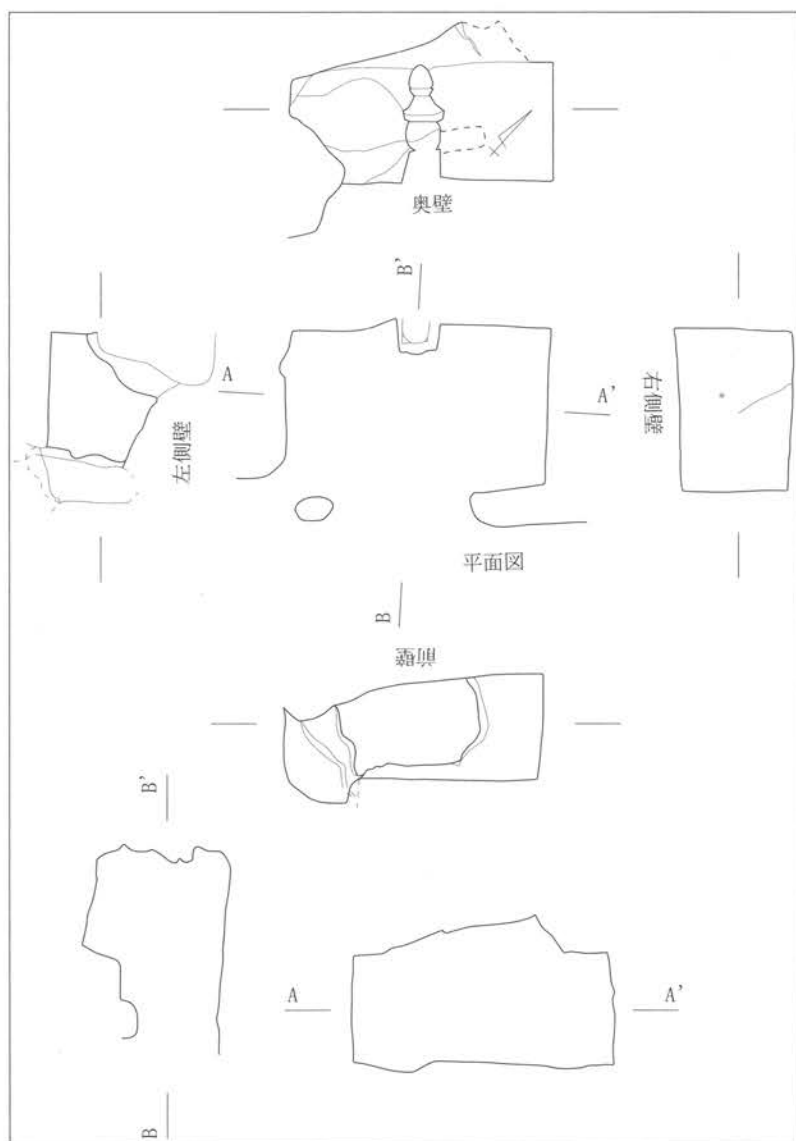
D地区に並ぶやぐらのうち西から3番目に位置する。平面形は方形を呈し、玄室及び羨道を有し、南東側に向かって開口している。現状での玄室規模は幅4.4m、奥行3.8m、床から天井までの高さは1.7mである。天井は平坦であり、残存状態は良好である。前壁以外の三面に、壁面から

奥行58cm、玄室床面から高さ40cmの段が巡る構造で、段上および段下に五輪塔が浮彫されるほか、壁面には方形の掘り込みや龕も確認できる。壁面や五輪塔の一部に漆喰の痕跡が見られることから、本来は漆喰によって全面装飾されていたことが予想される。

壁面にある方形の掘り込みは左側壁の2か所のみで確認されている。左側壁手前の掘り込みは幅50cm、高さ60cm、奥行20cmを測り、左側壁面奥の掘り込みは幅15cm、高さ48cm、奥行10cmを測る。どちらも装飾や土坑は見られない。掘り込みも浅く用途も不明である。近世期の可能性がある。

また、やぐらの奥壁ほぼ中央に大型の五輪塔が1基彫り出され、それを取り巻く形で段が巡る。段は中央の大型五輪塔の部分のみ存在せず、奥壁において中央塔より右側に30cm間を空けて段が始まる。逆に左側は段が始まるまで88cmの空間があり、両者にははっきりした違いが見られる。左側の段の無い空間には龕とは異なる小さな窪みがあり、縦10cm、横21cm、高さ15cmを測るが、用途は不明である。なおこの段の無い空間上に他の場所の段の高さに合わせ、五輪塔が浮彫されている。

浮彫された五輪塔は奥壁に3基、右東壁に3基、左側壁には1基が確認できる。奥壁の塔は中央の大型五輪を挟む形で、右側壁寄りに1基、左側壁寄りに2基が配置される。大型五輪塔以外は段上の壁面に造作され、右寄りの1基の地輪下に龕が掘り込まれる。地輪前の床面ではなく、地輪下となる



第19図 D地区 2号やぐら (S=1/100)

よう壁面を掘り込む形で龕が見られる。

右側壁の五輪塔は、手前角から 60cm に 1 基が彫り出され、およそ 1m 北側に 2 基が並んで彫られる。すべて段上からの造作であり、それぞれの五輪塔の前面となる床面に龕を確認している。南から長径 18cm、短径 10cm、長径 28cm、短径 12cm、長径 22cm、短径 20cm を測る。

西壁面の五輪塔は北角から 60cm 南に 1 基が彫り出される。塔の前面には納骨穴が確認でき、長径 32cm、短径 22cm を測る。またこの少し南に方形の土坑がある。長軸 30cm、短軸 26cm を測る。

このほかやぐら東壁の五輪塔 (D3-3) の北壁寄りに石塔を彫ろうとした痕跡が確認できる。線刻により隣の塔の空風輪と同じ高さに菱形を刻み、その下部にまでうっすらと線刻が延びる。空風輪および火輪を刻みだそうとした痕跡と推測される。未成品となるこの塔の床前面にも納骨穴が確認でき、長径 24cm、短径 20cm を測る。

また、北壁の中央大型五輪塔の西側、2 基の五輪塔 (D3-6、D3-7) の間に墨書のような痕跡が確認された。うっすらとではあるが、中央に「ア」字を記す四角形とその上に「バ」字を記す丸形、さらに上に台形のような形が残る。それぞれ地輪と水輪、火輪を描いたものと見られるが、両脇の五輪塔 D3-6 と D3-7 の地輪に対しかなり上方に描かれており、他の塔との統一性は見られない。

羨道部は残りが良く、幅 1.6m、長さ 60cm を測る。開口部北東角、北西角に 3 × 3cm ほどの凹みが表現される。扉を設置する際に必要なものであろうか。また南壁の開口部西側上方角に縦 10cm、横 20cm、奥行 4cm の凹みを確認したが、用途は不明である。

石塔

五輪塔 1 (D3-1)

3 号やぐら東壁に浮彫された五輪塔の内、もっとも南に位置する塔である。段上に地輪が接地するかたちで彫り込まれ、空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良い。総高 90.5cm を測る。正面に立体的な軒の厚さを表現しないシルエット型の五輪塔であるものの、各輪の境は明確に線引きされる。火輪の軒先は薄い。また縦中央に 1 本の線が刻まれているのが確認でき、塔の造形時の補助線と見られる。塔は明確に彫り出されているものの周囲の壁面を調整しておらず、掘り方が残る。表面には漆喰が残存している。

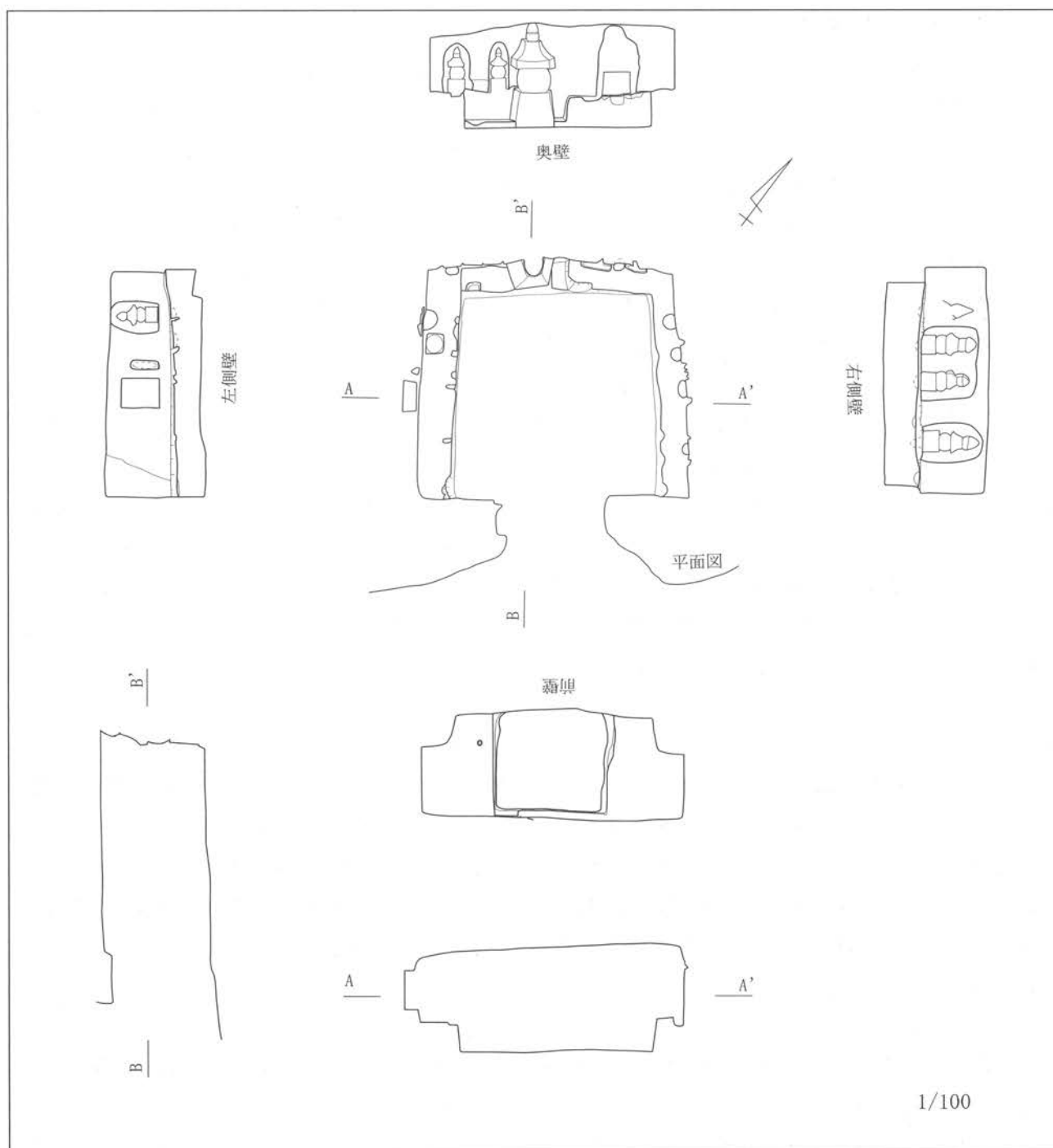
五輪塔 2 (D3-2)

3 号やぐら東壁に浮彫された五輪塔の内、南から 2 番目に位置する塔である。段上に地輪が接地するかたちで彫り込まれ、空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良い。総高 78cm を測る。正面に立体的な軒の厚さを表現しないシルエット型の五輪塔であるが、各輪の境を線によって分けた痕跡を確認できる。火輪の軒先には厚みを持たせている。また中央に縦線が 1 本引かれており、塔造作の際の補助線とみられる。塔は明確に彫り出されているものの周囲の壁面を調整しておらず、掘り方が残る。本来漆喰によって装飾されていたようだが、後世に火を受け、その多くが剥落している。

五輪塔 3 (D3-3)

3 号やぐら右壁に浮彫された五輪塔の内、手前から 3 番目に位置する塔である。段上に地輪が接地するかたちで彫り込まれ、空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良い。総高 87cm を測る。右側壁のほかの 2 基と同様、漆喰の装飾が施されるものの正面に立体的な軒の厚さを表現している点、種子を刻む点、中央の縦軸線が無い点で相違を見せるものの、周囲の壁面を調整せず、掘り方が残る点は共通している。掘り方の切合い関係から見て、本塔の方が五輪塔 2 (D3-2) に先行する塔と考えられる。

五輪塔 4 (D3-4)



第20図 D地区 3号やぐら (S=1/100)

3号やぐら奥壁に浮彫された五輪塔の内、右側に位置する塔である。段上に地輪が接地するかたちで彫り込まれ、空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良い。総高102cmを測る。正面に立体的な軒の厚さを表現しないシルエット型の五輪塔であるものの、各輪は独立した表現であり、水輪に「バ」地輪に「ア」など各輪に種子を刻んだ痕跡が見られる。全体のバランスが崩れており、空風輪や火輪に対し水輪がずれている。また水輪はほぼ円形で、地輪も水輪に対し大きすぎるなど造形は拙く、石塔の型式からも逸脱している。また当初は漆喰で装飾されていたと見られ、掘り方は荒い。

五輪塔5 (D3-5)

3号やぐら北壁に浮彫された五輪塔の内、中央に位置する塔である。他の塔とは違い地表に地輪が接地するかたちで彫り込まれ、岩盤より半肉彫りされる。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良く、

3号やぐら内において最大となる総高 168cmを測る。各輪個別の造りは丁寧であるものの、火輪や地輪が奥壁に向かって広がってしまう点、水輪の大きすぎる点に造形の拙さが散見される。やぐら天井に接する部分までで止まる空風輪の造形は、D地区1号やぐら五輪塔 D1-3、4、5に見える表現と同じである。ほか漆喰の痕跡、火輪に薬研掘りでの種子「ラ」が確認できる。

五輪塔 6 (D3-6)

3号やぐら奥壁に浮彫された五輪塔の内、左側に位置する塔の1基である。段の無い空間であるものの、他の段上の五輪塔と同様に地輪が接地する高さに彫り出される。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良く、総高 70.5cmを測る。正面に立体的な軒の厚さを表現しないシルエット型の五輪塔であるが、各輪は独立した表現を見せる。水輪が他の部位に対し大きく円形である点、火輪が小さい点など、石塔の形式には当てはまらない造形と言える。墨書で種子が記された痕跡が見られるが、漆喰の痕跡も確認できることから、墨書は後世の追記であると考えられる。周囲の壁面が未調整のままで、方形の掘り方が残る。

五輪塔 7 (D3-7)

3号やぐら奥壁に浮彫された五輪塔の内、もっとも左側に位置する塔である。段上に地輪が接地するかたちで彫り込まれる。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良く、総高 72.5cmを測る。全体はシルエット型の五輪塔であるものの、火輪正面に立体的な軒の厚さを表現する特異な型式を見せる。水輪は円形に近く、地輪が上の部材に対してずれているが気になるものの五輪塔 6 (D3-6)、五輪塔 4 (D3-4) に比べ石塔の型式に近い。漆喰の痕跡が確認できるほか、地輪、水輪に種子の跡が残る。周囲の壁面が未調整のままで、掘り方が残る。

五輪塔 8 (D3-8)

3号やぐら左側壁に浮彫された五輪塔である。段上に地輪が接地するかたちで彫り込まれる。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良く、総高 68cmを測る。正面に立体的な軒の厚さを表現しないシルエット型の五輪塔であるものの、各輪は線刻によって分けられる。また縦中央線が確認できる。塔の造形時の補助線であろう。地輪に種子「ア」が墨書される。また図示できなかったが、おそらく水輪にも墨書種子が施されている。周囲の壁面は未調整で、掘り方が残る方法を用いているほか、表面には漆喰が残存する。

(4) 4号やぐら

D地区所在やぐらのうち西から4番目に位置する。平面形は方形を呈し、南東側に向かって開口している。玄室、羨道を有するが、やぐら内の堆積土が多く、内部調査は簡易測量のみに留まった。現状での玄室規模は幅 3.1m、奥行 2.5mを測る。

(5) 5号やぐら

D地区所在やぐらのうち最東端に位置する。南東側に向かって開口しているものの、羨道部は見られず開口部と玄室の区分がなされていないなど、やぐらと呼んでよいのか疑問が残るが、本調査地点のやぐらに並んで存在しているため、今回はやぐらとして簡易測量を試みた。現状での玄室規模は幅 1.1m、奥行 0.3mを測る。

5 E地区 (写真図版 10)

西瓜ヶ谷の最南に位置する谷戸である。住宅地として開発されているが、谷戸の奥部は田畑として利用されている。田畑の奥となる斜面には横井戸が確認できるものの、やぐらなどは確認することができ

なかった。現在も使用される葛原岡神社から瓜ヶ谷へ抜ける細道は、梶原方向へと続く市道を挟み、E地区中心部の道へと繋がる。迅速図には広い市道が開削される以前よりこの道が記されており、この道が瓜ヶ谷の中心道路であったことがわかる。

6 F地区（写真図版10）

西瓜ヶ谷の中央に位置し、西から東にのびる丘陵である。やぐら群が所在する位置は丘陵尾根部の先端に近く、人工的な開削により作られた平場を有する場所である。このF地区に位置する丘陵は瓜ヶ谷地域の中で最大の規模を誇り、この丘陵の先端に西瓜ヶ谷やぐら群が存在する。丘陵の付け根にあたる一帯はすでに宅地化が進んでいる。

(1) 1号やぐら

F地区に並ぶやぐらのうち最下段で東端に位置する。平面形は長方形を呈し、南東側に向かって開口している。玄室と羨道を、玄室床面での標高は43.7mである。現状での玄室規模は幅410cm、奥行180cm、床から天井までの高さは260cmである。奥壁に五輪塔が10基、左側壁に4基が浮き彫りされている。

石塔

五輪塔1 (F1-1)

1号やぐら左側壁の五輪塔4基のうち最も手前に位置する五輪塔である。火輪、地輪の欠損が激しい。本やぐら中最小の五輪塔であり、総高55.5cmを測る。火輪の軒反りを欠失しているため判断は難しいが、壁面に彫り出された五輪塔であるものの、石塔の型式から逸脱していない。ただし火輪の軒下から水輪までの幅が大きい特徴がある。

五輪塔2 (F1-2)

1号やぐら左側壁の五輪塔4基のうち手前から2番目に位置する五輪塔である。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良好で、総高76cmを測る。壁面から半肉彫りで彫り出されているながらも、石塔の型式から逸脱していない。火輪の軒下から水輪までの幅が大きいという点でF1-1と共通する。

五輪塔3 (F1-3)

1号やぐら左側壁の五輪塔4基のうち手前から3番目に位置する五輪塔である。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良好で、総高79.3cmを測る。壁面から半肉彫りで彫り出されているながらも、石塔の型式から逸脱していない。火輪の軒は厚く、垂直に立ち上がる点が古手の様相を示すが、火輪の軒下から水輪までの幅が大きいことが、火輪を縦長にしてしまい、バランスを崩している。水輪の最大径が上部に位置する点は室町期の特徴である。

五輪塔4 (F1-4)

1号やぐら左側壁の五輪塔4基のうち手前から4番目に位置する五輪塔である。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良好で、総高86cmを測る。壁面から半肉彫りで彫り出されているながらも、石塔の型式から逸脱していない。火輪の軒下から水輪までの幅が大きい火輪軒の広がりがあるがバランスの崩れを防いでいる。水輪の型式はF1-3に先行する。

五輪塔5 (F1-5)

1号やぐら奥壁の五輪塔10基のうち最も左側に位置する五輪塔である。壁面から半肉彫りで彫り出される。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良好で、総高79.5cmを測る。水輪の高さが若干高いものの、石塔の型式に則した様相を呈する。火輪の軒下に厚みはなく、全体のバランスは良い。五輪塔8 (F1-8) と同系統の塔と言える。

五輪塔 6 (F1-6)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から2番目に位置する五輪塔である。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良好で、総高 79.5cmを測る。壁面から半肉彫りで彫り出され、石塔の形式に則した様相を呈する。五輪塔 7 (F1-7) に対し地輪が若干高くなるものの、火輪軒先の幅が地輪の幅を超える点や水輪の型式など、五輪塔 8 (F1-8) と同様の型式の五輪塔と言える。

五輪塔 7 (F1-7)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から3番目に位置する五輪塔である。空風輪、火輪の一部を欠損するが残存状態は良好で、総高 78.5cmを測る。壁面から半肉彫りで彫り出され、石塔の形式に則した様相を呈する。部材ごとの高さの割合や、火輪軒先の広がり、地輪下部の広がりまで五輪塔 8 (F1-8) と同様の型式の五輪塔と言える。

五輪塔 8 (F1-8)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から4番目に位置する五輪塔である。火輪および地輪の欠損が激しいが、1号やぐら中最大の規模を誇り、総高 129cmを測る。壁面から半肉彫りで彫り出され、石塔の形式に則した様相を呈する。火輪の軒下を水平に切り、水輪との境を丁寧に表現するほか、掘り出された正面および両隣の面に五大種子を刻む。種子の位置も原則に則し、向かって右に涅槃門、向かって左に修業門、正面に発心門を刻むなど、全体的に非常に丁寧な造りの塔である。火輪正面軒の表現が観察できないことは惜しまれるが、全体のバランスは 14 世紀前半の様相を呈する。1号やぐらの中央に位置していた五輪塔と推測される。

五輪塔 9 (F1-9)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から5番目に位置する五輪塔である。壁面から半肉彫りで彫り出され、空風輪、火輪、水輪、地輪とも欠損が見られる。総高 80cmを測り、石塔の形式に則した様相を呈する。水輪の地輪の高さ、水輪の型式、火輪の軒反りが外側へと伸びる点など、五輪塔 8 (F1-8) を良く踏襲した五輪塔と言える。

五輪塔 10 (F1-10)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から6番目に位置する五輪塔で、壁面から半肉彫りで彫り出される。火輪、水輪、地輪に欠損が見られるものの、石塔の形式に則した様相を呈し、総高 78.5cmを測る。地輪の高さ、水輪の型式、火輪の軒反りが外側へと伸びる点で、五輪塔 8 (F1-8) を良く踏襲した五輪塔と言える。

五輪塔 11 (F1-11)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から7番目に位置する五輪塔で、壁面から半肉彫りで彫り出される。火輪、水輪、地輪の欠損が著しく細部の観察は困難である。総高 73.8cmを測る。軒先が垂直に立ち上がる点は古手の型式であるが、火輪の軒下から水輪までの幅が大きく火輪全体が縦長となり、空風輪が縦長なことも相まって全体のバランスを崩している。五輪塔 8 (F1-8) とは異なる型式の五輪塔である。

五輪塔 12 (F1-12)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から8番目に位置する五輪塔で、壁面から半肉彫りで彫り出される。空風輪、火輪の欠損が著しい。総高 83cmを測る。石塔の型式から逸脱してはいないが、横幅が狭く、火輪と空風輪が縦長なことも相まって全体のバランスを崩している。五輪塔 8 (F1-8) とは異なる型式の塔である。

五輪塔 13 (F1-13)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から9番目に位置する五輪塔で、壁面から半肉彫りで彫り出される。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良好で、総高 88.5cmを測る。石塔の形式に則した様相を呈し、火輪の軒下を水平に切り、水輪との境を丁寧に表現しているものの、空風輪を大きく造る点、火輪の軒反りを垂直に立ち上げる点から、五輪塔の全体を縦長に表現したい意匠を読み取れる。五輪塔 8 (F1-8) の形式とは異なる五輪塔と見たい。

五輪塔 14 (F1-14)

1号やぐら奥壁の五輪塔 10基のうち左側から10番目に位置する五輪塔で、壁面から半肉彫りで彫り出される。空風輪、火輪、水輪、地輪とも残存状態は良好である。総高 123cmを測り、やぐら内2番目の高さを誇る。大きく豪華に造ろうとしたことが読み取れ、各部の特徴を強調しすぎたせいで逆に全体のバランスを崩している。石塔の形式から逸脱してはいないが、軒を垂直に立ち上げる特徴は全体を縦長に大きく表現する作意によるものだろう。五輪塔 8 (F1-8) とは異なる様相を呈する。

(2) 2号やぐら

F地区に並ぶやぐらのうち南東面に位置する。平面形は長方形を呈し、南側に向かって開口している。二つのやぐらが切合った状態であるが、新旧関係が不明であるため1つのやぐらとして番号を付けている。ともに玄室のみ存在する。玄室床面での標高は 44.5mである。現状での玄室規模は幅 125cm、奥行 40cm、床から天井までの高さは 100cmである。奥壁に板碑が浮き彫りされている。

石塔

板碑 (F2-1)

2号やぐら奥壁中央に位置する浮彫りの板碑である。全体が失われており、シルエットのみが残存し、頂部を山型とすること以外不明と言わざるを得ない。残存部も下部にかけて不明瞭となるため総高も不明であるが、確認できる部分までで高さ 91cm、最大幅 30cmを測る。

(3) 3号やぐら

F地区に並ぶやぐらのうち南面に位置し、2号やぐらと切合う。平面形は正方形を呈し、南側に向かって開口している。玄室のみ現存する。玄室床面での標高は 45.2mである。現状での玄室規模は幅 110cm、奥行 50cm、床から天井までの高さは 80cmである。奥壁に五輪塔と板碑が浮き彫りされている。

石塔

五輪塔 (F3-1)

3号やぐら奥壁に位置する浮彫の五輪塔である。火輪、水輪、地輪の一部を欠損するが、残存状態は良好である。総高 70cmを測る。火輪軒の反りや全体のバランスは良いが、水輪が極端に潰れており横にはみ出す表現が顕著であることから、F1-8塔周辺4基よりは時代が下ると見られる。地輪が長めに造形されている理由として、本来やぐら内に土が盛られていたことが考えられる。

板碑 (F3-2)

3号やぐら奥壁に位置する浮彫の板碑である。残存状態は良好で、総高 67cm、最大幅 22.5cmを測る。頂部を山型とし、上方に二条線を刻む。線刻の枠取りは無いが、中央に阿弥陀如来を表わす「キリーク」と思しき種子を配する。ほか本来土中に位置する柄の部分までが刻出されており、本やぐら内にはこの柄が隠れるくらいまで土が盛られていたことが考えられる。

(4) 4号やぐら

F地区に並ぶやぐらのうち最上段南面に位置する。平面形は台形を呈し、奥壁に向かって広がる形状

をとる。開口部は南側である。玄室のみが現存する。玄室床面での標高は 45m である。現状での玄室規模は幅 220cm、奥行 165cm、床から天井までの高さは 180cm である。玄室の奥壁寄りには 20cm の段差が存在している。

(5) 5 号やぐら

F 地区に並ぶやぐらのうち最上段最奥に位置する。平面形は長方形を呈し、東側に向かって開口している。玄室のみが現存する。玄室床面での標高は 45.5m である。現状での玄室規模は幅 360cm、奥行 300cm、床から天井までの高さは 110cm である。奥壁には掘り込みが 2 箇所穿たれている。

浮彫 (イ)

3 号やぐらと 4 号やぐらの間、丘陵の岩盤が張り出す位置に浮彫の五輪塔が 2 基、板碑が 1 基現存する。3 基とも接地面は共通すると見られ、西端の五輪塔 (Fイ-1) の西側に岩盤面から手前に貼り出す岩盤の痕跡が確認できることから、本来はやぐらであった可能性がある。中央五輪塔の空風輪が存在した部分に掘り込みが増設されており、本遺跡の存続期間中にこれらの浮彫が損傷を受け、石塔として認識されていなかったことが窺い知れる。

五輪塔 (Fイ-1)

岩盤に浮彫される 3 基のうち西側に位置する五輪塔である。空風輪、火輪の損傷が著しいため、型式から年代等を判断することは難しい。総高 51.3cm を測る。

五輪塔 (Fイ-2)

岩盤に浮彫される 3 基のうち中央に位置する五輪塔である。空風輪、火輪の大部分を欠損し、地輪の一部も失われている。このため総高は導き出すことはできないが、隣の Fイ-1 塔より総高が高かったものと見受けられる。型式等を判断することはできない。

板碑 (Fイ-3)

岩盤に浮彫される 3 基のうち東側に位置する板碑である。上端、下端をそれぞれ欠損しており、全体の様相を窺うことはできない。残存部での高さは 50cm ほどであり、最大幅は 15.5cm を測る。

浮彫 (ロ)

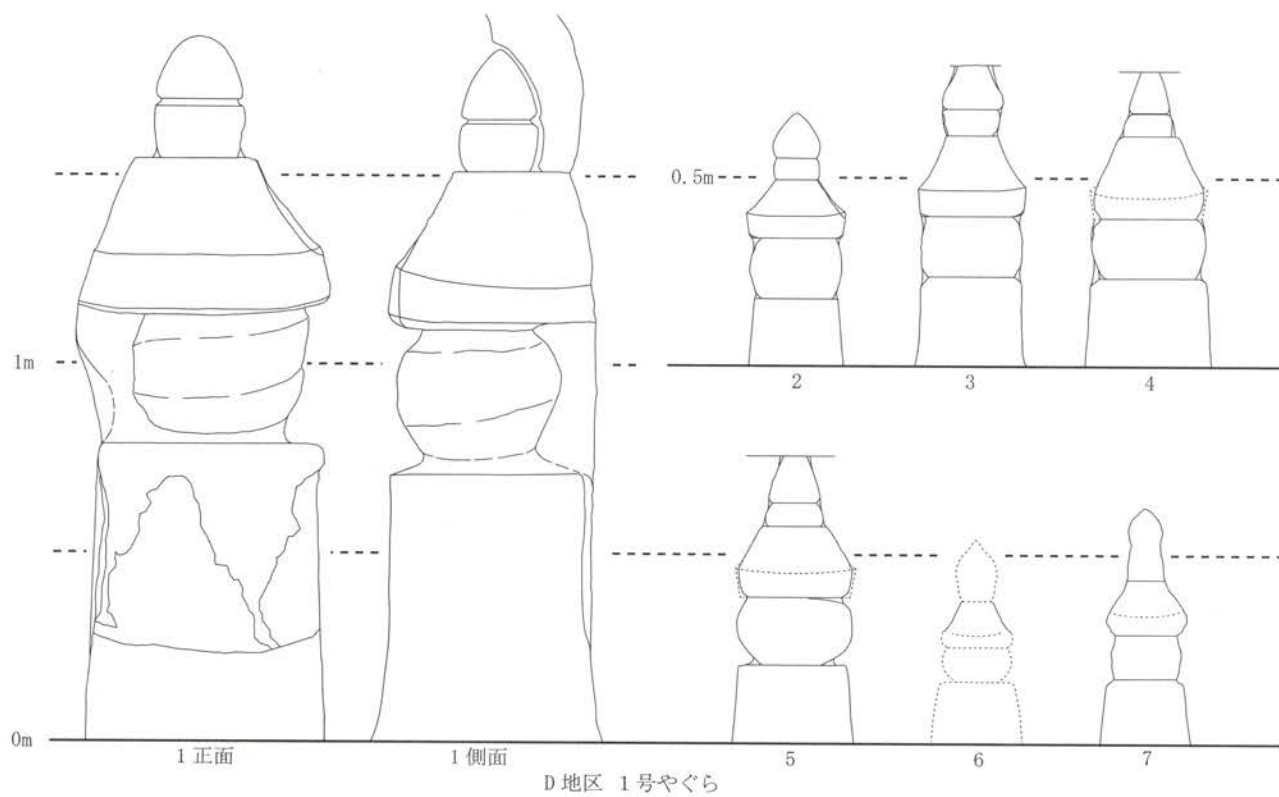
宝篋印塔 (Fロ-1)

1 号やぐらと 2 号やぐらの間、丘陵の岩盤が張り出す位置に浮彫された塔である。岩盤より半肉彫りに彫り出され、下部より反花座、基礎、塔身、笠、が確認できる。また相輪はほぼ失われ形状は不明であるものの、壁面にうっすらと痕跡が確認でき、それより求められる総高はおおよそ 150cm 前後と推定される。造形のほとんどを破損しているが、残存部より基礎上部の段数は 1 段、笠下部の段数は 2 段であることが確認できる。

7 G 地区

西瓜ヶ谷の最北に位置する谷戸である。谷戸の規模としては瓜ヶ谷のなかで最大であり、最奥まで宅地化が進んでいる。一部の住宅背後にあたる崖面には切岸が見え、人の手が加えられた状態の崖面が散見される。確認できた横穴は 3 基の防空壕であるが、このうち 2 基は元々やぐらであったものと判断できた。山ノ内字西瓜ヶ谷 1034 から同 1036 にかけて位置するやぐらは、F 地区と G 地区の間にある道路の北側の丘陵の尾根直下に位置している。このやぐらは、昭和 54 年 (1979) に行われた宅造にもなって発見されたもので、神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に鎌倉市 No.357 遺跡 西瓜ヶ谷やぐら群として記載されている遺跡である。発掘調査実施後に消滅しているが、調査報告書が刊行されていない

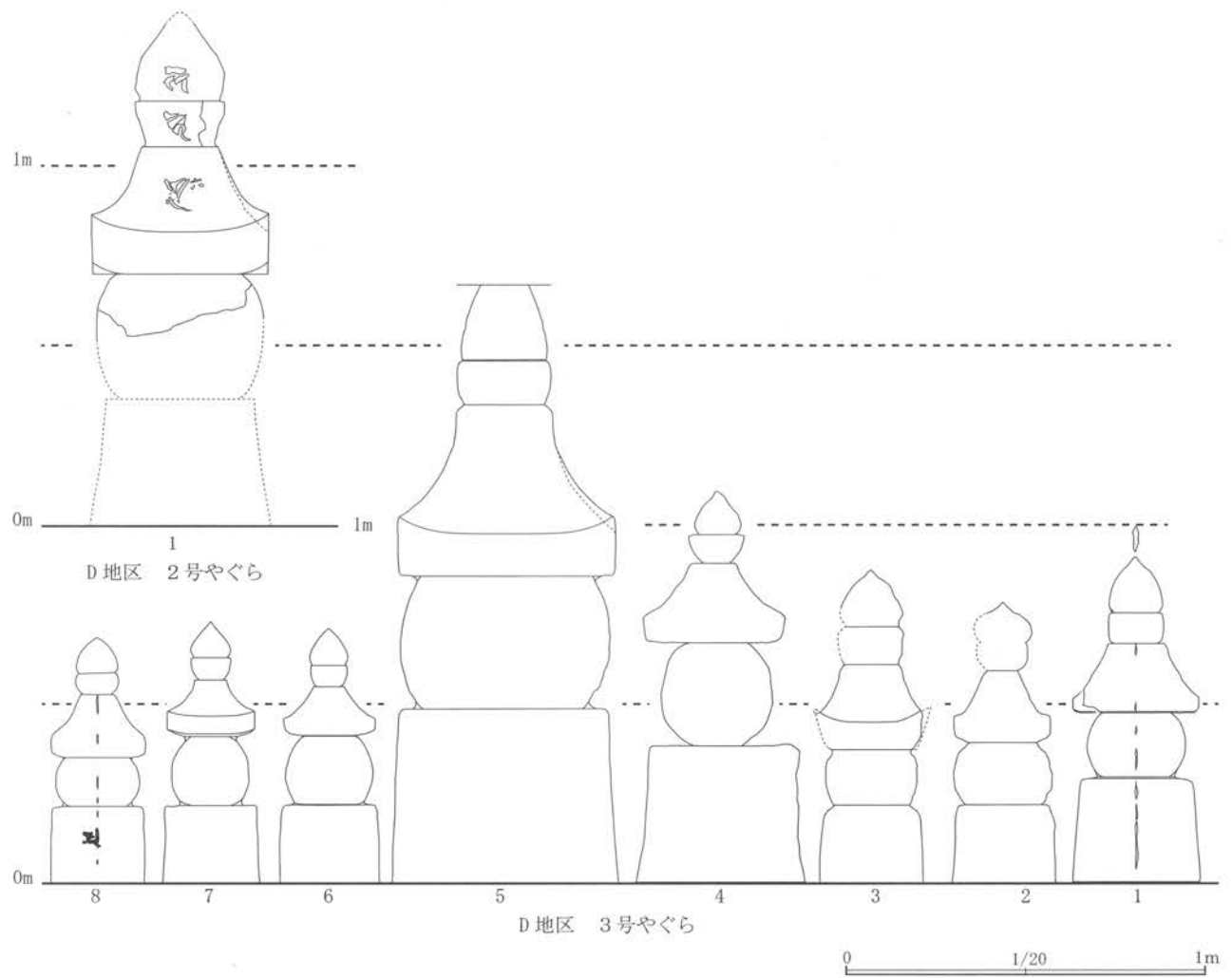
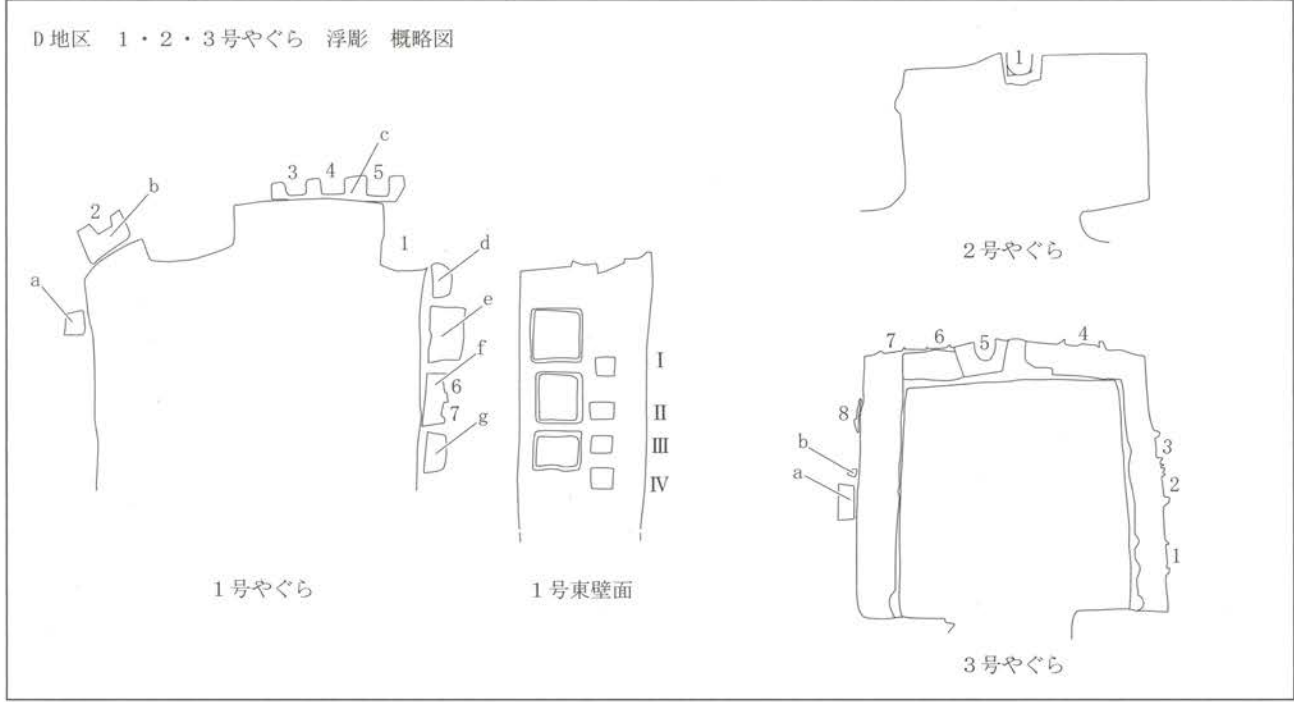
ため、本報告書に調査地の写真を掲載しておく（写真図版 11 参照）。



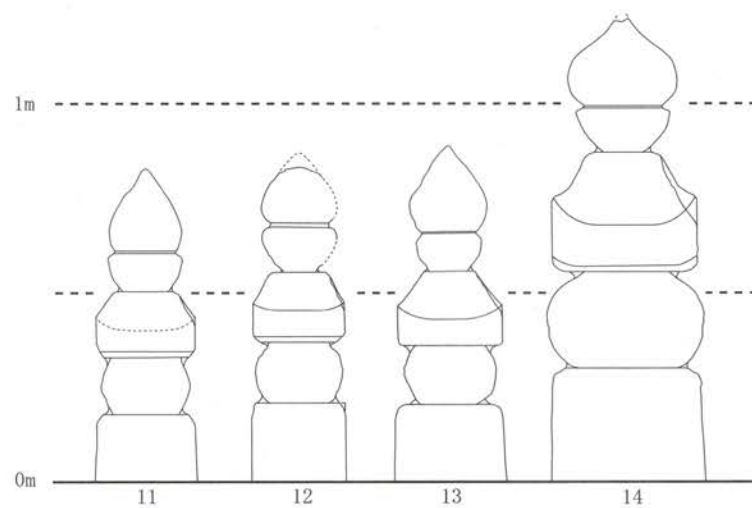
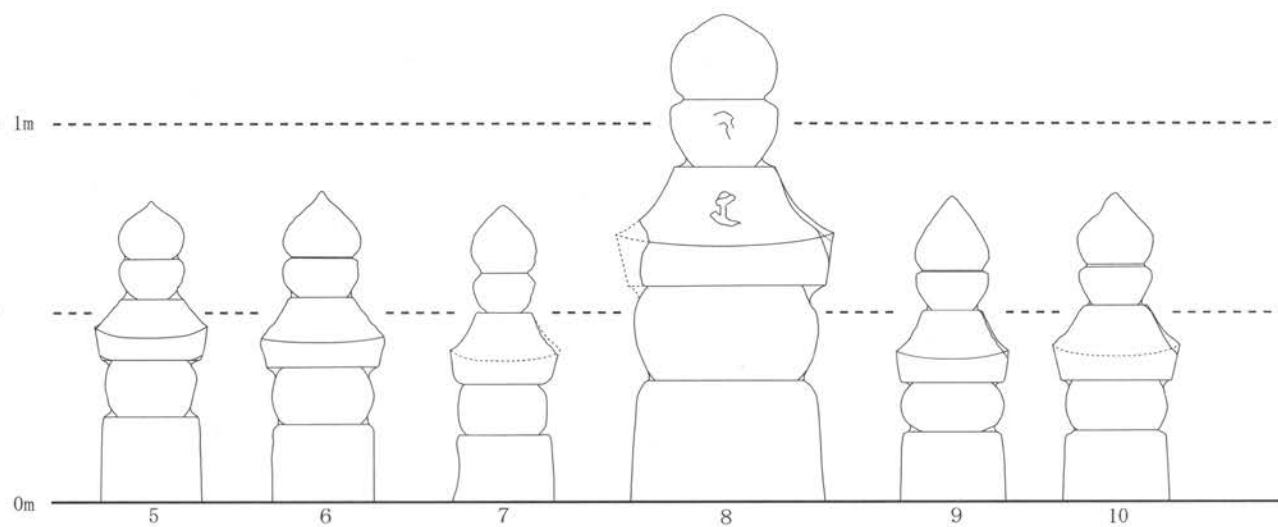
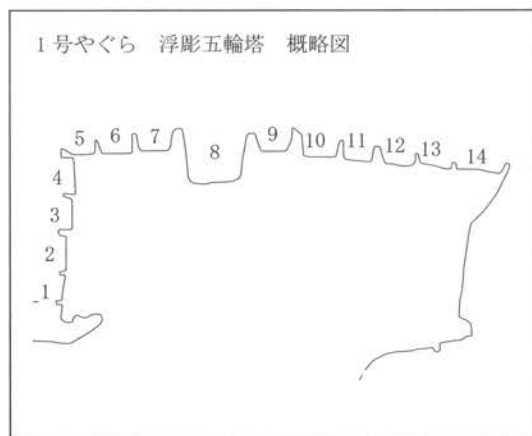
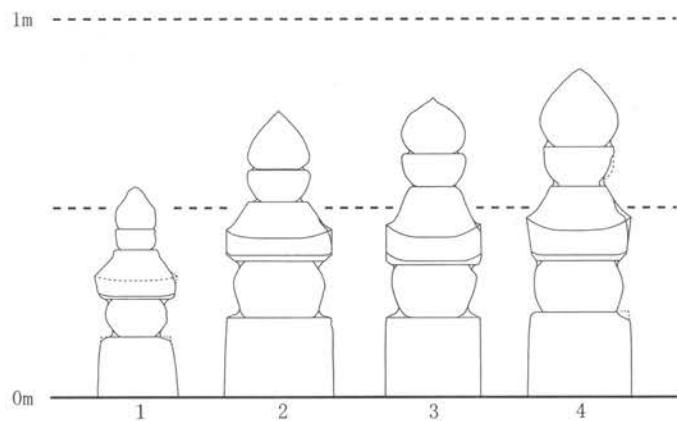
東壁面 人物彫刻

0 1/10 40cm

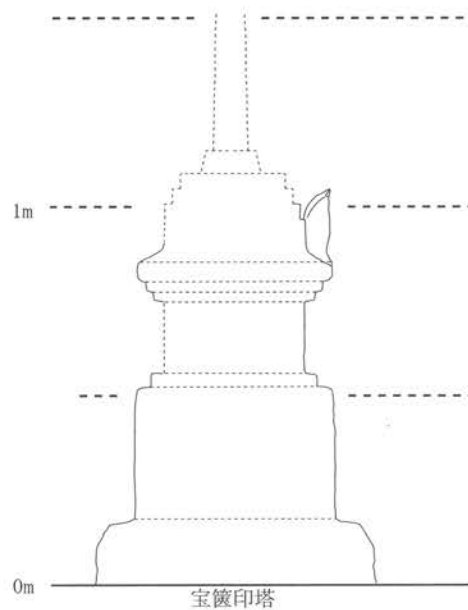
第21図 D地区浮彫石塔実測図・人物彫刻拓本



第 22 図 D地区やぐら群浮彫石塔実測図

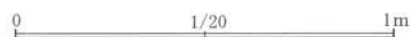


F地区やぐら群 1号やぐら

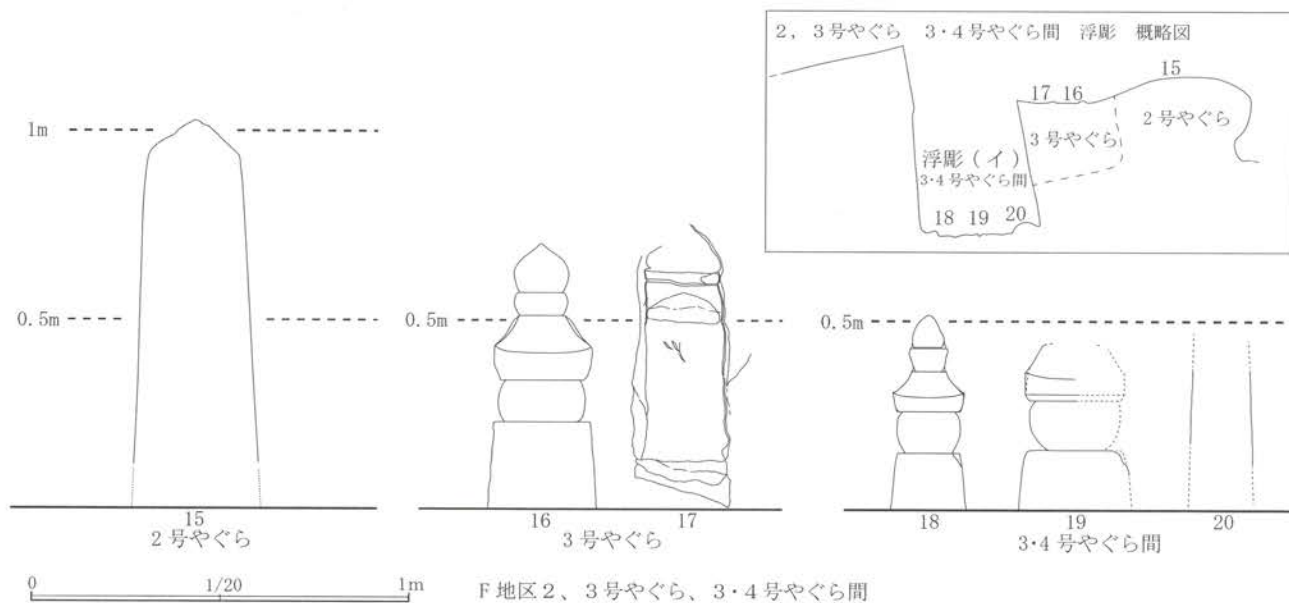


宝篋印塔

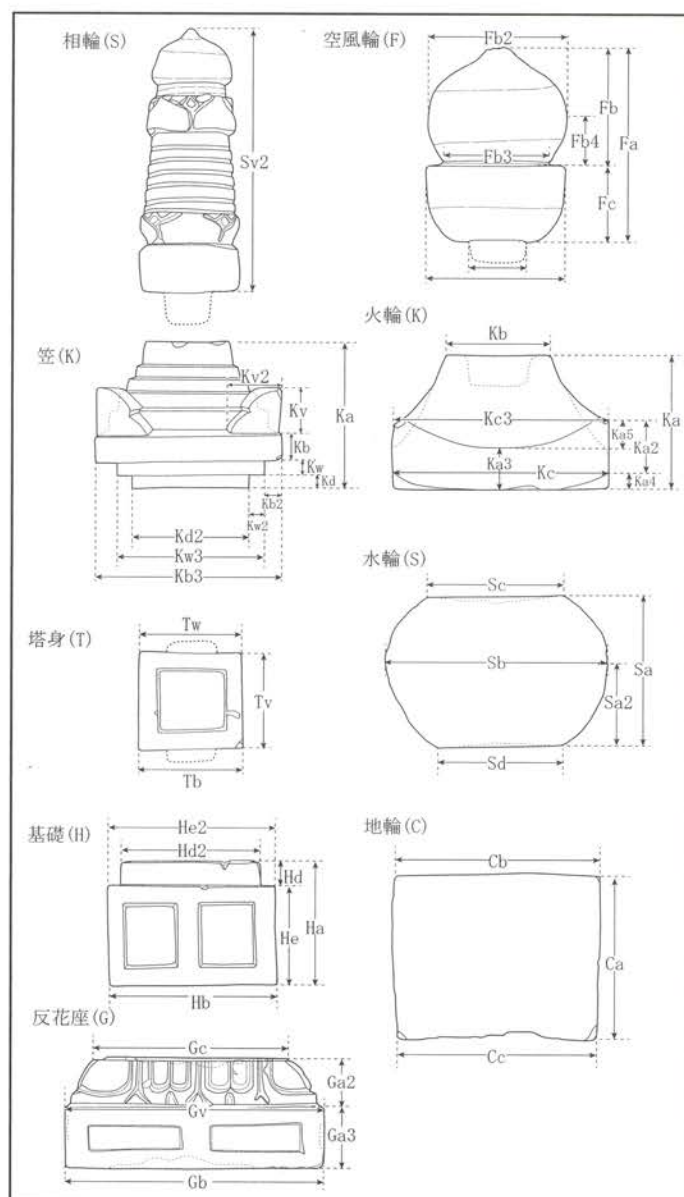
F地区やぐら群 浮彫宝篋印塔 浮彫(口)



第23図 F地区やぐら 浮彫石塔実測図



F地区 1～5号やぐら群 浮彫 全体概略図



第25図 五輪塔・宝篋印塔 計測部位

第24図 F地区浮彫 石塔実測図2

表2 西瓜ヶ谷やぐら群 石塔浮彫 計測表

D地区1号							
	1	2	3	4	5	6	7
Fa	22	17.7	18.3	16.9	17.8	15	12
Fb	18	12	11.5	11	12.5	-	12
Fb2	21	12.1	15.2	14.7	13.5	-	11
Fb3	20	11	15.8	13.1	12.3	-	7.5
Fb4	2.4	3.7	3.3	1.5	1.8	-	-
Fc	14	5.7	6.8	5.9	5.3	-	6.5
Fd	28	11.2	13.4	14	13.5	-	8
Fd2	25.5	12.4	14.8	14.9	14	-	11
Ka	40	15.5	-	19.7	19.3	19	14.5
Ka2	14	7.2	-	-	-	-	-
Ka3	14.5	6.5	7	5.8	7	-	5
Ka4	2.3	0.8	-	-	-	-	-
Ka5	1.7	2	3.6	-	-	-	-
Kb	35.8	11.8	14.5	15.5	15	-	10
Kc	64	22.5	26	-	-	24	23
Kc3	62	23	28	29.1	29	-	-
Sa	35.5	23.8	6.5	18	36.4	8	12.5
Sa2	22.8	8	8.5	9.7	22.8	-	7.5
Sb	47	13.4	27.3	31.6	31.7	19	21
Sc	38.2	20.7	23.3	25.5	27.2	-	16
Sd	34.4	19	23	25.8	23.5	-	16
Ca	81	18	24	22.5	21	-	16
Cb	57.5	22	26.5	31	29	-	23
Cc	64.5	24.3	29	33.5	30.5	25	25
総高	179	75	69.8	77.1	94.5	42	55

D地区2号	
	1
Fa	37.4
Fb	25
Fb2	24.9
Fb3	22.7
Fb4	5.8
Fc	12.4
Fd	20.4
Fd2	24.5
Ka	35.2
Ka2	13.2
Ka3	11
Ka4	3.1
Ka5	4.7
Kb	21
Kc	48.5
Kc3	48.8
Sa	34.8
Sa2	20
Sb	44
Sc	38.5
Sd	33.3
Ca	35
Cb	41
Cc	50
総高	142

D地区3号								
	1	2	3	4	5	6	7	8
Fa	22.4	18.5	26	20	33.5	16	16	15.5
Fb	13.7	11	15.5	12	21	10	9.5	9.5
Fb2	15	16	16.5	12	24.5	9.5	11	11
Fb3	12.5	12	14	10	23	6	7.5	9.5
Fb4	2.5	4	5	2.5	2	2.5	2.5	3
Fc	8.7	7.5	10.5	8	12.5	6	6.5	6
Fd	10.6	11	13	7.5	23	6.5	7	8
Fd2	15	14	17	16	26	9.5	12	11
Ka	19.2	19	23	22	48	12.5	15	17
Ka2	4	6.5	-	8	13	4	6	6
Ka3	-	-	7	-	12	-	-	-
Ka4	0	-	-	-	3.5	-	-	-
Ka5	-	-	-	-	4.5	-	-	-
Kb	16	11	16	15	23	10	9	10.5
Kc	9.5	25.5	29	38	55	25	25	25.5
Kc3	35	27	29	39	54	25	25	25.5
Sa	19	18.5	16	29	37	20	19.5	14
Sa2	9.5	9.5	8	15	21	10	10.5	8
Sb	26.5	28	25	30	58	25	22	22.5
Sc	19	20	22	18	50	13	13	17.5
Sd	17.5	20.5	21	15	48	15	13	16
Ca	28.5	22	22	38	49	22	22	21.5
Cb	31	26	29	42	57	25	26	25
Cc	35	29	29	45.5	63	27	27	26
総高	90.5	78	87	102	168	70.5	72.5	68

F地区1号														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Fa	16.5	24.5	23.8	30.5	26.5	28.6	28.5	40	29	38.5	22.3	27.5	33	35.5
Fb	11	15	14.5	19	16.5	18	18	24.5	19	27.5	10	16	22	25
Fb2	10	15.5	15.5	19.5	17	21	18	29	20	21	19	20	20.5	28
Fb3	8.5	12.5	12	16	14	16	13	21.8	16	16	15.5	14	14	23
Fb4	4.5	3	4.5	7	5	4.5	6	7	4.5	5.5	4.5	5	7	7
Fc	5.5	9.5	9.3	11.5	10	10.6	10.5	15.5	10	11	12.3	11.5	11	10.5
Fd	8.5	13	12	11	11	13	18	18.4	13	15.5	14	13	14	15
Fd2	10.5	17	18	18	16.5	19	12	29.3	20	19.5	19	20	19	26
Ka	12	14	19.5	18	16	18.5	18	31.5	19.5	8	17	17	19.5	30
Ka2	-	4	7	8	10	9	8	-	7	19.5	8	9	9	15
Ka3	-	4.5	6.5	6.5	6.5	9	8	11	6	7	-	7	6.5	10.5
Ka4	-	2	2.5	4.5	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2.5
Ka5	-	2.5	3	4	3	3.5	-	-	2.5	-	-	3.5	-	4.2
Kb	11	17	15.5	14	17.5	16.6	15	38.2	17	18.5	17	19	15.5	20
Kc	-	26	24.5	25	25	29.5	25	53.2	28	29	25.5	23.5	27	38
Kc3	18	25.5	24.5	26	25	30	29		28	29.5	25	23	25.5	38
Sa	11	16.5	15	15	14	15	14	25	13.5	13	16.5	17.5	15.5	27
Sa2	5.5	8.5	8	10.5	8	10	6	18	9	9	8	10	8	13
Sb	14	25	23	26	25	26	24	48	27	27.5	23	24	25	40.5
Sc	12	21	18	10	22	18.5	20	41	23	24	20	19	22	29
Sd	12	18	17	20	21	20	20	38.3	22	23	19	22	21	32
Ca	16	21	21	22.5	23	21	18	32	18	19	18	21	20.5	30
Cb	20	27.5	24.5	26	23.5	18.5	24	41	27	26	26	24	24	37
Cc	20	29	24.5	27	25	26.5	-	41	28	27.5	27	24	26	39
総高	55.5	76	79.3	86	79.5	83.1		129	80	78.5	73.8	83	88.5	123

F地区イ 宝篋印塔	
Sv	36
Ka	36
Kb	4.3
Kb2	1.5
Kb3	51
Kw	1.5
Kw2	2
Kw3	51
Kd	2
Kd2	44
Kv	21
Kv2	7.5
Tv	19
Tw	38
Tb	37.5
Ha	40
Hd	3.5
Hd2	44
He	35.5
He2	51
Hb	53
Gc	65
Ga2	5
Gv	77
Gb	77
Ga3	12
全長	139

第3節 平成25年度の調査（重要遺跡確認調査）

1 発掘調査の経過

平成25年度の調査は、やぐら前面の遺構確認と尾根上に存在する塚状遺構の下方に展開するひな段状地形の性格を明らかにすることを目的に、やぐら前面と尾根上の双方にトレンチを設定して実施した。以下に発掘調査の経過を記す。

平成25年8月9日	現地へ機材の搬入を行い、座標点の確認を行う。
平成25年8月10日	調査位置の確認、草刈及び現況の写真撮影を行う。あわせて測量原点の移動を行う。測量点は鎌倉市が設置した4級都市基準点補足点を使用した。
平成25年8月19日	現地にテントを設置。
平成25年8月20日	やぐら前面の現況写真撮影を行うとともに調査区を設定し、掘削を開始。
平成25年8月27日	尾根上にトレンチを設定し、掘削を開始。
平成25年9月17日	神奈川県教育委員会文化遺産課埋蔵文化財グループ及び世界遺産登録推進担当グループの職員が現地を視察。
平成25年9月30日	作業員による掘削作業を終了し、現場からテント及び掘削機材を撤収。
平成25年10月1日	文化財課分室にて図面等の整理作業に着手。
平成25年10月7日	図面の補足のため現地測量と土層断面図の補測および山稜の地形測量を行うため、現地作業を再開。
平成25年10月16日	台風によるトレンチ壁の崩落やトレンチ内に残した樹木が傾いたため、必要な復旧作業を実施。
平成25年10月21日	地形図及び五輪塔浮彫の図面を作成。
平成25年10月22日	地形図の作成を完了し、現地作業を終了。
平成25年10月22日	図面整理作業を再開し、図版作成・報告書原稿の執筆を開始。
平成26年1月14日	平成24年度に詳細分布調査を行ったA地区のやぐら位置図を作成するため、測量点の確認を行う。
平成26年1月24日	やぐら群の位置図作成のための測量を行う。
平成26年3月10日	トレンチの埋戻し作業を開始。
平成26年3月14日	埋戻しならびに復旧作業を終了。
平成26年3月25日	瓜ヶ谷やぐら群の補足測量を行う。
平成26年3月31日	報告書原稿を確認し、平成25年度の発掘調査・整理作業を終了。

2 トレンチ調査

(1) 尾根上のトレンチ（トレンチ1、2）

塚状遺構が存在する上段平場との境の段に石製の反花坐が存在して石塔を伴う遺構の存在が想定されたため、塚状遺構の北東に伸びる尾根上に2本のトレンチを設定して遺構確認を行った。トレンチは塚状遺構の存在する緩斜面とその一段下の尾根上平坦面に設置し、下段をトレンチ1、上段をトレンチ2とした。

トレンチ1では地表から20cm程で岩盤を削平した平坦面を確認した。東側は岩盤の不整合面が垂直方向に入っていたせいか、樹木の根が深く入っており、上面が荒れて風化が進んでいた。北側では尾根

中軸線付近は平坦であるが、崖際から 1.8m のところから岩盤面が丸みを帯びて緩やかに谷側に落ちている状況を確認した。トレンチ北側の岩盤面上にはノミで突いたような直径 5 mm 程の小さな浅い穴が多数みられ、削平面であることが確認された。トレンチ 2 との境の段には一辺 60cm 程の切石様の石が 2 個石垣状に並んでいたが、これは岩塊が根によって割れてずり落ちたものであると観察された。また切石様の石の北側では円形の落ち込み様の亀裂を確認したが、詳細を確認したところ、岩盤の石目であることが確認された。

トレンチ 1 の発掘調査で出土した遺物は宝篋印塔の反花座 1 点のみである。第 30 図 1 に図示した反花座は、安山岩製で全体にややいびつ感があるが、蓮弁の彫りはやや粗いもののデザインはしっかりしている。台座の大きさは約 30cm 四方で、高さ（厚さ）は 8.3cm である。台座が出土していることから、もともとはトレンチ 1 の周辺のどこかに宝篋印塔が置かれていたものと考えられるが、置かれた場所がやぐらの内部なのか、それ以外の場所なのか不明である。台座以外の部材を発見することはできなかった。



第 26 図 平成 25 年度調査地点全体図 (S=1/800)

トレンチ2では、2段の平場を確認した。上段平場は確認された幅が2.4m、長さが5.6mを測る。北東に緩やかに下っているが、上面はほぼ平坦である。尾根の北西側に垂直の段があり、最大1m、段の間では80cm程を測る。下段平場は確認された最大幅が1mである。この段は尾根先端方向に回り込んでいる。覆土の厚さは上段平場が約20cm、下段平場が約1.2mである。

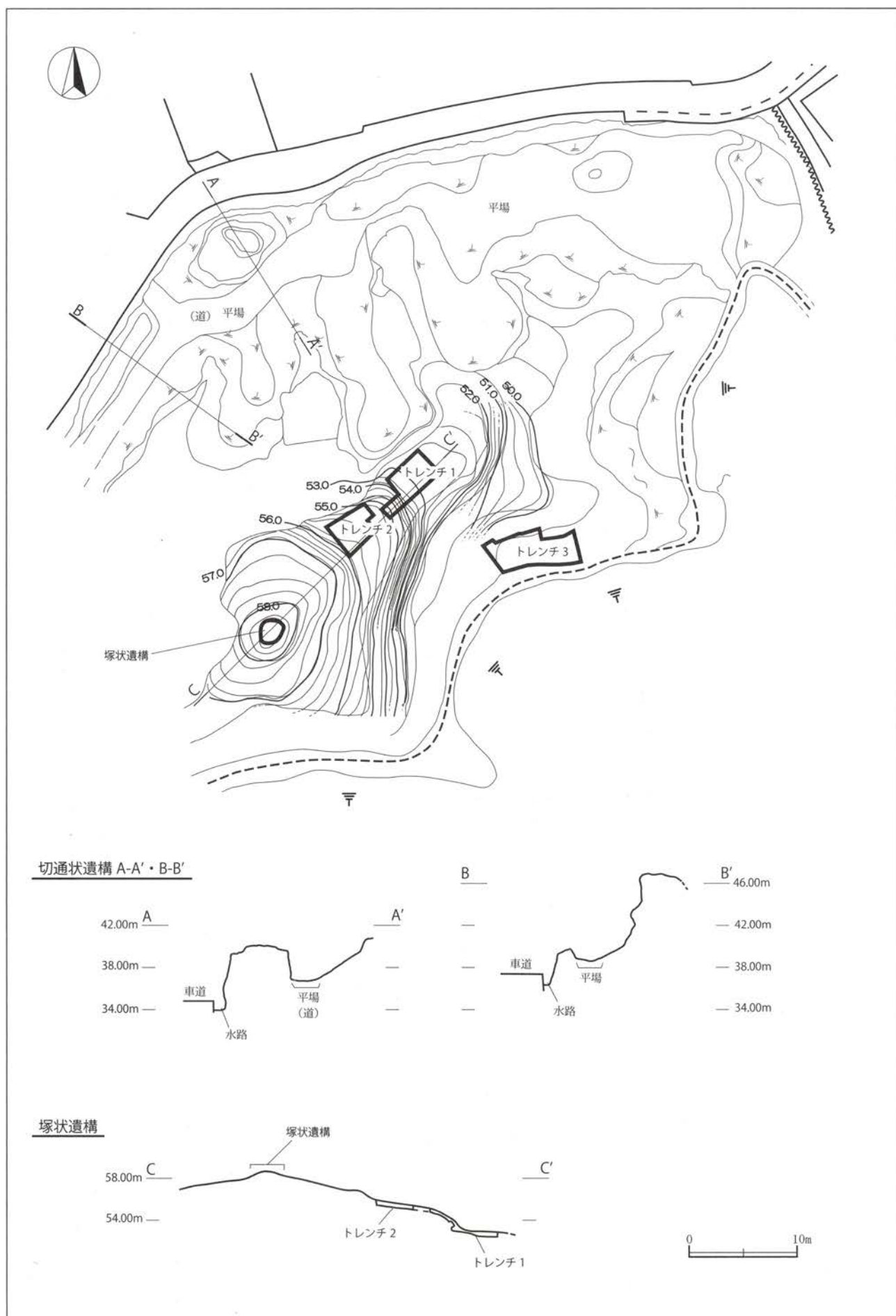
段を覆っている覆土は6～10cmの腐植土層である黒灰色の表土の下に非常に締りが良く均質な暗褐色土・黄褐色砂質土が岩盤を覆っている。これは遺跡地には他に見られない土で、岩盤の風化土とは異なり、自然層というよりも精製された砂質土である。遺跡の南西の尾根上から客土されたものかもしれない。塚状遺構あるいは尾根上に土塁状のものがみられるため、その崩落土かと考えられる。覆土中からは指先ほどの大きさのかわらけ細片が若干出土している。

トレンチ2の発掘調査で出土した遺物は1点のみである。第30図2は常滑の片口鉢の破片で、底部から胴下半にかけての部位に相当する。

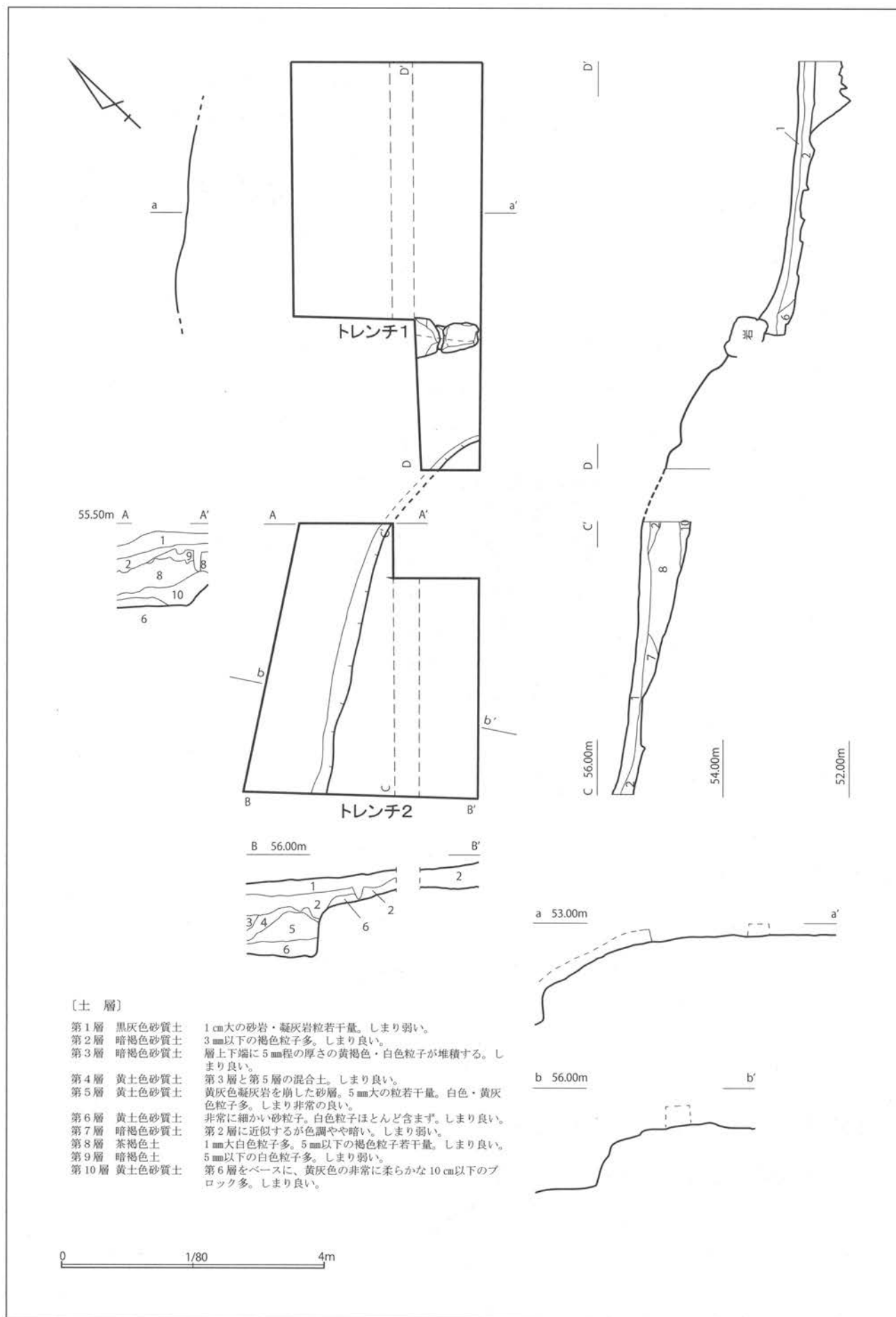
(2) やぐら群前面のトレンチ (トレンチ3)

やぐら前面の遺構確認のため2号やぐらから5号やぐらの前面に当たるやぐら群南側の平場に設定したトレンチで、やぐらに参拝するために設置されていた参道の石垣を残すため、6区画に分割し、西からトレンチ3-aからトレンチ3-fと名付けた。各小トレンチからは東に下がる岩盤のスロープを確認した。検出された岩盤上面は平滑で、ノミ跡は検出されなかった。岩盤面ではトレンチ3-aから3-cまでの上部では5号やぐら北西隅に向かって連なる一辺2m程の隅丸方形の浅い掘り込みが連続して確認できた。それ以东にはほぼ南北方向の浅い溝状の落ち込みがみられた。これは水が流れた痕と考えられ、不連続であるため人為的なものではないと考えられる。2号やぐらから4号やぐらとの境は2回以上掘削されたと考えられる小さな段が存在する。この西側先端がトレンチ3-aから3-cに存在する隅丸方形の掘り込みとなるが、その西端は5号やぐらの床面を削っている。このことから、このスロープはやぐら群の機能とは関係なく造られたものと考えられる。岩盤面直上からは近代以降の磁器片が確認されており、現状参道が造られる以前にはこのスロープが参道として利用されていたことが推測される。スロープの幅は1.6m以上存在する。

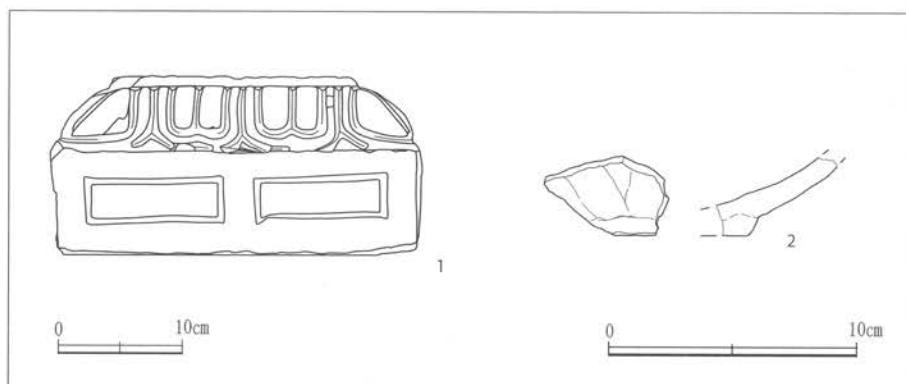
トレンチ3の発掘調査で出土した遺物は非常に少なく、第33図に図示した5点のみである。1～3はかわらけ、4、5は肥前産の磁器である。1は口縁部の破片で直線的に外反している。2・3は底部の破片で、直線的に立ち上がっているのが特徴である。2については、底部の直径が5.2cmであったことを復元できる。1～3の年代はいずれも15世紀に比定される。4は碗の胴下半部の破片で呉須で網目文様が描かれている。5は重の身で外面に丸囲みの中に格子目文を描いているが、2つの文様はそれぞれ異なる文様である。



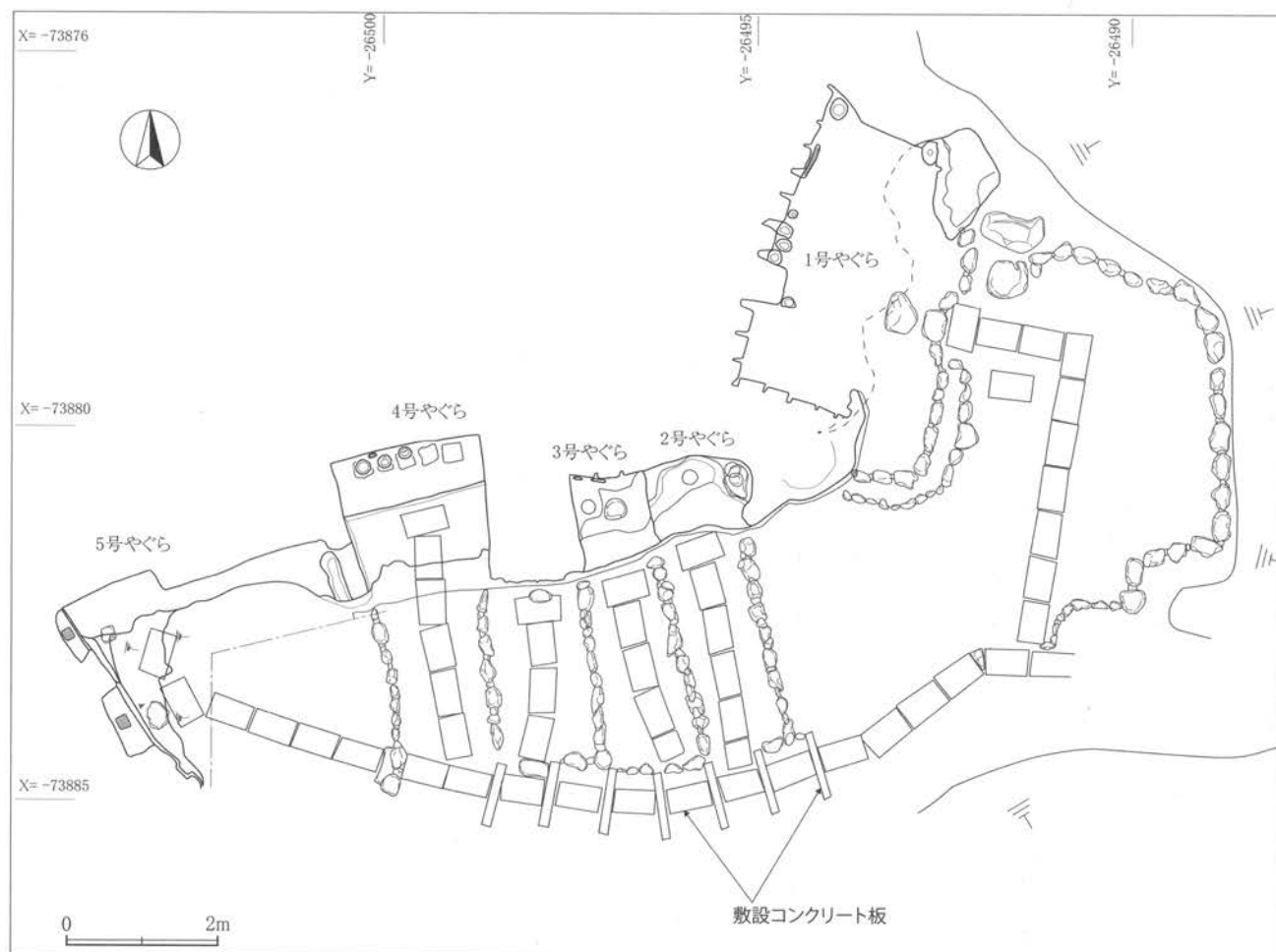
第 27 図 平成 25 年度調査地点地形測量図 (S=1/500)



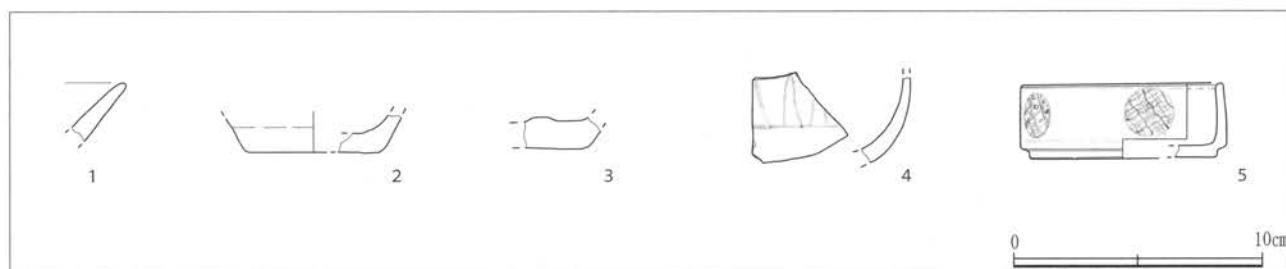
第28図 トレンチ1・2



第 29 図 トレンチ 1・2 出土遺物



第 30 図 トレンチ 3 調査前状況 (S=1/100)



第 32 図 トレンチ 3 出土遺物 (S=1/3)

3 地形測量調査

本年度の調査においては遺跡の存在する尾根先端部分について、トレンチ調査の実施後、地形測量を行った。測量は調査地の山稜に存在するやぐら、塚状遺構、ひな段状の地形、石切り跡と考えられる崖面、道跡の位置確認と相互の関係性を把握するために実施した。測量は発掘調査を実施した尾根上は 25cm の等高線、尾根先端部全体は地形の変換線を、トータルステーションを用いて実施した。縮尺は地形の変化が細かいため、1/40 とした。測量調査で得られた所見は以下のとおりである。

(1) 塚状遺構

北東に伸びる尾根の最高地点にあり、標高 58m 付近を起点に高さ 60cm 程の高さを持つなだらかな円錐形の高まりである。平面形は北東にややとがる卵形で、短径 5m、長径 6.5m を測る。周囲及び高まりの表面に特段区画などは観察されなかった。

(2) ひな段状遺構

塚状遺構から北東に伸びる尾根には、人為的に造成された複数の平場が段状に存在している。尾根上に連続して存在する 3 つの平場の他にも、本来はやぐら群の前庭部に該当する平場、丘陵の中腹（2 箇所）及び裾部に存在する平場の合計 7 つの平場があり、これら全体をひな段状遺構と総称する。

1 段目の平場は、塚状遺構のある平場から約 1m 低い位置に存在する。上方の幅約 10m、下方の幅約 5m、長さ 6m を測り、緩やかに北東に傾斜している。1 段目の平場はトレンチ 2 を設定して発掘調査を実施した場所である。

2 段目の平場は、1 段目の平場より約 1m 低い場所に存在する平場で、幅約 5m、長さ約 12m の規模で北東の端が北側に曲がっている。この平場にはトレンチ 1 を設定して発掘調査を実施した。

3 段目の平場は、1 段目及び 2 段目の平場の南東側に腰曲輪状に形成された平場である。2 段目の平場の途中で傾斜が変わる部分があるため、東と西の二つの平場に分かれる可能性がある。1 段目及び 2 段目の平場と接する部分の平場の幅は約 2m、長さは約 15m を測る。また 2 段目の平場との境は岩盤を垂直に掘り切って段が造られている。2 段目の平場が北に曲がる辺りでは底辺約 10m、高さ約 6m のやぐら上面の緩やかな傾斜を持つ平場に移行している。

尾根上に存在する 3 段目の平場の東側及び南側にある平場は、本来、1 号やぐら及び 2～5 号やぐらの前庭部に当たる場所であるが、幅約 4～5m に平場が形成されている。

丘陵の中腹には五角形を呈する平場が存在する。平場の大きさは東西約 4m 南北約 5.5m で、岩盤が露出している。

丘陵の中腹から裾部にかけての平場は、幅・長さとも約 4m で、北端が北西にやや曲がっている。東、西、北とも岩盤を切り落としている状況が確認できる。

丘陵の裾部北側には、川に沿って平場が存在する。川との比高は 2m 程あり、尾根を削平して平場が造られていることが分かる。東西に細長く伸びる平場で、東側は約 7m 以上の幅を有するが、西側は全

表3 平成25年度調査 出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	種別	口径・長径	底径・短径	器高・厚	a.成形 b.胎土 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			cm	cm	cm	
第29図 1	トレンチ1	宝篋印塔 反花座	28.8	29.8	14.3	f.石材(安山岩)
第29図 2	トレンチ2	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	(3.3)	a.輪積み、へら削り b.微砂多め 白色針状物質 c.暗褐色 e.良好 f.内面擦り痕顕著
第32図 1	トレンチ3	かわらけ	-	-	0.8	b.微砂 赤色粒 黒色粒 土丹粒 海面骨針 c.赤褐色 e.良好
第32図 2	トレンチ3	かわらけ	-	(5.2)	0.6	a.ロクロ成形・底部糸切痕 b.微砂 土丹粒 赤色粒 c.黄褐色 e.良好 f.備考
第32図 3	トレンチ3	かわらけ	-	-	1.1	a.ロクロ成形・底部糸切痕 b.微砂 土丹粒 赤色粒 c.黄褐色 e.良好
第32図 4	トレンチ3	肥前陶磁	-	-	3.5	a.ロクロ成形 b.良質な磁土 c.白色 d.透明な青白色 e.良好 f.呉須はやや黒味がある
第32図 5	トレンチ3	肥前陶磁	8.0	7.4	2.9	a.ロクロ成形 b.良質な磁土 c.白色 d.透明度高い e.良好 f.呉須も青味の高いもの。

凡例:()を付した数値は復元による数値。その他の数値は現存し、計測された数値である。

体に狭く、その幅は1m程度にすぎない。三方とも岩盤を切り落として崖にしていることが確認できる。

(3) 切岸状遺構

尾根の北側と北東端に石切り跡と考えられる人工的な崖面が形成されている。崖面露頭部分は風化しているため切石個々の大きさを把握することが難しかったが、測量にあたり岩盤表面を観察した限りではノミ跡が多数観察され、長方形に切り取られた跡が所々に存在することから石切り跡であることは間違いない。今回は発掘調査の対象としていなかったため切石の大きさ、規模は不明である。

尾根の北側では南北方向に尾根を残した状態で谷部分を切り掘り、小支谷を形成している。第一切岸は塚北側に位置し、支谷状でその西端に当たる。幅約7.5m、長さ約15m、比高約8mを測る。谷口は北面し、南に向かって約8m掘り込まれ、さらに南西方向に約7m掘り込まれている。第二切岸も支谷状で、第1切岸の東、尾根上二段目の平場の北側に位置する。ほぼ南北方向の支谷で、長さ約21m、幅約8mを測るが、奥から約7mの所を境に前後に区画が分かれている。第3切岸も尾根上二段目の平場の先端に位置する南北方向の支谷形状を呈する。支谷の東西で尾根の長さが異なるため、南北方向の長さが異なり西側は約16m、東側は約8m、幅約7～9mを測る。第4切岸は尾根の北側斜面を掘り切ったもので、一部に明確な切石の掘削痕が残存している。長さ約19mを測る。第5切岸は尾根の北東端に位置し、当初やぐらではないかと推測したが、測量調査の結果切石の掘削痕であることが判明した。幅約4mを測る。

やぐら群が存在する尾根南面は崖面を切岸状に掘削し、やぐら群や石塔のレリーフを掘っている。その北側に当たる尾根の東面にも切岸状の崖が存在し、一部で壁状の岩盤が観察される。この部分の崖面は風化が激しく、尾根北側及び東側の切岸状遺構とは形状が異なる。

(4) 切通状遺構

塚の北西には尾根の側面を掘り切って切通道が残存している。ほぼ南西方向に山裾に沿って道が登っているが、南側の崖面が崩れて道を埋めている。道幅は現状で約2mを測り、総延長は50m程である。現状では27m程が切通状に道の左右に岩盤を切った道となり、その先が埋没しており、宅地になっている。宅地の先は現在も舗装された道路になっており、仮粧坂上に連なる東西方向の尾根上にある道に繋がっている。道が埋没したため現状道路に付け替えられたと考えられる。道は緩やかに北の谷側に傾斜しながら下りていると考えられ、遺跡の北側に接する川の南岸側壁に道の位置に掘り込みがみられる(入り口1)。また、これとは別に本来の入り口の西約12mの所に新たに北側壁を掘り切って出入り口

を付けた場所がある。道幅は約 2m で、道に対しほぼ直角につけられている（入り口 2）。道の南東側切通壁は尾根斜面を切り落としてあり、高さ約 8m を測るが、北西側切通壁上は平らに削られており、幅約 1.5m の平坦な平場となっている。入り口 2 の東側に位置する北西側切通壁は高さ約 3m で、ほぼ垂直である。上面は 2 段の平坦面になっており、比高差は 0.3 ～ 0.5 m で、平面形は下段が長径約 8m、短径約 5m の隅丸の不正七角形、上段は長径約 3.5m、短径約 2m の隅丸の菱形を呈する。

切通状遺構に相当する公道（いわゆる赤道）は公図上に表記はなく、直径 1m 程の杉の根株が幾つか存在するため、近代以前の切通道であることは確実である。大規模な崩落により埋没しており、埋没の原因が地震による切通壁面の崩落であるならば、「円覚寺境内絵図」にある「瓜谷路」の延長が元禄地震によって埋没したのかもしれない。



第4章 考察とまとめ

第1節 瓜ヶ谷やぐら群所在の石塔の年代推定

1 はじめに

本報告において「瓜ヶ谷やぐら群」と総称する遺跡は、山ノ内字西瓜ヶ谷及び字東瓜ヶ谷に所在する西瓜ヶ谷やぐら群・東瓜ヶ谷やぐら群によって構成され、やぐら内には多くの浮き彫り彫刻が残存することから、鎌倉市内に多く存在するやぐらの中でも特に貴重な例として知られてきた。

平成17年度に行った発掘調査を伴う確認調査、平成24年度の詳細分布調査、平成25年度の重要遺跡確認調査の計3回にわたる調査で瓜ヶ谷地区において現状、開口しているやぐらをすべて確認することができたと考えている。

しかしながら、発掘調査で出土した遺物は非常に少なく、一部のやぐらならまだしも、瓜ヶ谷地区全体のやぐら群の年代を特定するには資料不足と言わざるを得ない。そこで本稿では、やぐらの年代推定に有用な資料として、本やぐら群で確認された浮き彫り彫刻の石塔に注目する。元来、五輪塔や宝篋印塔などの石塔は、切石などから掘り出された単立個体であり、銘文が存在せずとも全国に残存する貴重な資料をもとに導き出された編年から、ある程度の年代を推定することが可能となっている。しかし、本やぐら群に限らず遺構壁面に浮彫りされた石塔は、石塔造立の原則を知らない者の手によって図像をもとに刻出されることも多く、石塔編年が適用できない事例があることには注意が必要である。このことをふまえ、本稿の年代推定は石塔編年の型式に則した作例に限定した。この結果が瓜ヶ谷やぐら群の年代を決定付けるものとはならないだろうが、全体を考察する上での一助とはなり得るだろう。なお、各やぐらの所在地区名は平成24年度に詳細分布調査を実施した際に付した地区名であることを付記しておく（第14図参照）。

2 検討対象資料

瓜ヶ谷地区に所在するA～Gの谷戸及び丘陵のうち、浮き彫り彫刻を有するやぐらが存在する谷戸はD地区、F地区及びG地区である。このうちG地区のやぐらは、昭和54年（1979）に行われた宅造に伴い発見されたもので、神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に鎌倉市No.213遺跡 西瓜ヶ谷やぐら群として記載されている遺跡である。発掘調査実施後に消滅しているが、調査報告書が刊行されていないため、本報告書に調査時の写真を掲載しておく（写真図版11）。

D地区のやぐら群は、谷戸の最奥に位置する市指定史跡の「瓜ヶ谷やぐら群」（国指定史跡仮粧坂の指定地）であり、当該地区では計5穴のやぐらが確認されている。浮き彫りされた石塔は1号やぐらとなる通称「地蔵やぐら」に7基、2号やぐらに1基、3号やぐらに8基が確認できる。すべて五輪塔であり、やぐら内部の壁面に浮き彫りが施されている。

F地区のやぐら群は、G地区より延びる丘陵の先端に位置し、計5穴のやぐらが確認されている。浮き彫りされた石塔は最大となる1号やぐらに五輪塔が14基、1号やぐら南壁の外側に宝篋印塔1基、2号やぐらに板碑1基、3号やぐらに五輪塔と板碑がそれぞれ1基、3号やぐらと4号やぐらの間となる壁に五輪塔2基、板碑1基が確認できる。

以上、D地区16基、F地区21基、計37基を検討対象資料とする。

（1）D地区の石塔

D地区1号やぐらには7基の浮き彫り五輪塔が確認されている。このうち最大の塔となるD1-1は北東角に彫り出された五輪塔であるが、火輪の軒に反りが見られないことに石塔の系譜から逸脱した様相が表れている。また同じくやぐら内北東に並んで彫られたD1-3、D1-4、D1-5は、D1-1に比べれば石塔の造形を理解していると見えるものの、3基の示す空風輪が龕の天井部で止まる造形は、一般的な石塔には見られない表現である。空風輪に表れている技術から判断すればD1-3がまず造られ、これを真似るかたちでD1-4→D1-5の順に彫られたと判断したい。この3基は全体的に造作方法の簡略化が見られ、空風輪がいわゆる砲弾型とよばれる形へと移行し、空風輪の「空輪」と「風輪」の部分がそれぞれ独立して作成されるのではなく、一度火輪上部に最大径を置く三角形を彫り出したところから境目となる溝を入れるだけの型式となっている。またD1-6、D1-7は風化が激しく型式を判断できないことを見ても、本やぐら中最も石塔の系譜に則した造形の塔はD1-2である。型式から見れば14世紀代としてもよい造形であるが、塔の立地から見ればD1-1の方が古いように見え、疑問は残る。なお、石塔の型式のみで造立順を考えれば、D1-2→(D1-1)→D1-3→D1-4→D1-5→(D1-6、D1-7)となろうか。D1-2を除いた年代は早くとも15世紀後半でおそらくは16世紀までを視野に入れて見る必要がある。

2号やぐらの石塔は浮き彫り五輪塔1基のみで、やぐら羨道部から見て中央奥壁に位置する。やぐらの規模を見ても、1号やぐらとつながるトンネル以外は特に後世の拡張を受けていないと推測される。五輪塔は地輪と水輪下部が欠損しているものの、残存部は14世紀前半と言ってよい型式を見せる。メリハリのある各部材や薬研掘りの種子は、石塔を理解する者の手による造作と判断できる。また軒の厚さや反りの形は極楽寺忍性塔に代表される西大寺様式五輪塔を想起させ、鎌倉に安山岩の加工技術が導入され、これが凝灰岩の石塔型式にまで組み込まれる最盛期の造立であったとも考えられる。

3号やぐらには8基の五輪塔が浮き彫りされている。やぐら中央奥に位置する最大の塔(D3-5)は奥壁から半肉彫りの状態で丁寧に彫り出されているが、造形はいびつで火輪や地輪の奥壁に向かう面が正面に対し平面直角で表現されない点などから見れば、石塔の系譜とは言い難い。またD3-1、D3-2、D3-4、D3-6、D3-8などは火輪の軒正面を立体的に表わさない、いわゆるシルエット型五輪塔であり、年代の特定は困難である。なかでもD3-4は石塔の型式を完全に無視した形態で、三角と丸と四角であれば良いとさえ思える造形である。本やぐら内ではD3-3、D3-5、D3-7が最も型式に沿った造形であるが、それでも一般的な鎌倉の中世石塔に比べ造形は拙い。年代の推定は難しいが、一際大型で丁寧な造形であることから、D3-5が最も早い時期に作成されたと判断される。なお、空風輪がやぐら天井で止まり先端が表現されない点はD地区1号やぐらD1-3、4、5と共通する。これは4基が近い時期か同じ者の手によって造立されたと考えられ、型式差から見てD3-5の方が早いと思われる。年代は15世紀後半ごろ～16世紀代と考えられ、本やぐらの浮き彫り五輪塔はすべてそれ以降の所産と判断される。近世初頭まで造塔行為が行われた可能性も否定できない。

(2) F地区の石塔

1号やぐらの浮き彫りはすべて五輪塔で14基が確認できる。中央奥壁やや南寄りに最大の塔(F1-8)があり、型式から鎌倉末から南北朝時代となる14世紀の年代が充てられる。半肉彫りの三面には種子が彫り込まれ、全体を漆喰で装飾していた様相が看取できるなど造りは丁寧である。全体のバランスも良く、風化によって火輪の軒を観察しづらいが、多少外側に開き気味に立ち上がる反りから年代は幅を持たせて判断した。中央塔の周囲に並ぶ五輪塔は両隣のF1-7、F1-9を最小に総高が徐々に高くなる様相を見せる。石塔が並んで配置される場合、中央に最大の塔が造られ、中央の両隣から順に作成されていく方式が用いられる例が多い。大抵は、西大寺の五輪塔に代表されるように始祖となる中央塔に配慮

し、以後の塔はそれより若干小さく造るものだが、本やぐらに見られる様相はこれとは正反対である点は珍しい。中央塔 F1-8 の周囲 4 基となる F1-6、F1-7、F1-9、F1-10 は中央塔に準ずる年代を示し、14 世紀代～15 世紀前半ごろの造立と見たいが、さらに周囲の F1-1、2、3、4、F1-11、12、14 の塔は空風輪の大きさや火輪の下端部が長いなどの表現が見られ、造形を崩している。早くても 15 世紀後半～16 世紀ごろと見たい。

本やぐら内の極端な大きさ以外の塔は、およそ水輪上端部か地輪上端部を基準として隣の塔が作成されていったようであり、基準を変えずに塔を高くする方法として、空風輪を大きくすることや火輪の下端部に厚みを持たせることが用いられたと推測される。本来こうした高さの差を出すには石塔全体のサイズを増減させるものだが、スペースの限られたやぐら内で数を増やすためには横幅を節約する必要があり、結果として空風輪や火輪といった部材のみの高さを変化させる方法が採られたのであろう。

以上のように、本やぐら内の石塔は (F1-8 → F1-7、9 → F1-6、10) という流れが一区切りとなり、(F1-5) が作成され、のちに (F1-11 → F1-12 → F1-13) が作成される。これと同時期に (F1-2 → F1-3 → F1-4 → F1-1) の作成があり、F1-14 を最後に本やぐらの造塔行為が行われなくなったと見るべきだろう。F1-14 に至っては近世と見てもいいかもしれない。

1 号やぐらと 2 号やぐらの間となる壁面には宝篋印塔 1 基 (F0-1) が浮彫されている。造形のほとんどが破損しており、反花座や隅飾り、相輪など年代判定の材料が乏しく深く検討することはできないが、基礎上部の段数は 1 段、笠下部の段数は 2 段であることが確認できる。鎌倉時代後期に畿内より流入した石造宝篋印塔は、鎌倉における初期 (14 世紀初頭前後) の例として基礎上部を 3 段、笠下部を 3 段に造形している例がいくつか散見されるが、定着以後 (14 世紀前半) の型式は基礎上部 2 段、笠下部 2 段であり、いずれも本作例の型式とは異なる。また残存部より復元した本塔のシルエットは塔身の幅が広く、鎌倉に現存する中世石造宝篋印塔のシルエットとは合致しない。以上のことから判断すれば、本塔は石造宝篋印塔とは系譜を別にする、図像などをもとに作成された浮き彫り彫刻と見るべきであろう。なお、鎌倉市内に現存する浮彫宝篋印塔は覚園寺裏山やぐらに 1 基と東泉水やぐらに 1 基が確認できるのみであり、それらはやぐら内に彫られる例であることを鑑みれば、本作例はやぐら外に現存する唯一の浮き彫り宝篋印塔として貴重である。

2 号やぐらには板碑が 1 基浮彫されている。全体が破損しシルエットをわずかに確認できるのみで、二条線や表面の装飾も確認できず年代判定は難しい。

3 号やぐらには五輪塔と板碑の浮き彫りが確認できる。五輪塔は火輪の軒反りや全体のバランスは比較的良いものの、水輪が潰れる表現が顕著であり、鎌倉最盛期の造形から時代が下る様相が看取される。早く見積もっても 15 世紀代と見るべきだろう。隣に並ぶ板碑は二条線が確認できるほか表面の種子の一部が見られるなど、残存状態は良い。種子はおそらくキリクで阿弥陀如来を表わす。年代の判定は難しい。

3 号やぐらと 4 号やぐらの間の岩壁には五輪塔 2 基と板碑 1 基の浮き彫りが確認できる。それぞれ損傷が激しく細部を読み取りづらく判断は難しい。

2 号やぐら、3 号やぐらもそうだが、やぐら内に板碑を安置する例は非常に少ない。代表的な例として胡桃ヶ谷やぐら、銭洗弁財天やぐらがあり、五輪塔とともに 14 世紀前半の緑泥片岩製板碑が確認されている。このほか赤星直忠によれば覚園寺付近の平子やぐらにはやぐら奥壁に溝が巡らされており、板碑を差し込むための溝と解釈されている。また本遺跡と同じように浮き彫りされた板碑は鎌倉市内では瑞泉寺裏山やぐらの 1 基が確認されるのみである。

14 世紀前半以降のやぐらで板碑が共伴する例は管見の限り見当たらず、これまで五輪塔に板碑を伴わせる葬法は 14 世紀前半代で終了する鎌倉石造物初期の文化と捉えていたが、15 世代にかけてもこのような葬法が確認できる例として本遺跡は貴重である。

3 小結

以上、西瓜ヶ谷やぐら群に現存する浮き彫り石造物を概観した。総括すれば、この地域で最も古い石造物は D 地区 2 号やぐらの五輪塔であり、少なくとも 14 世紀前半代には D 地区でやぐら造営が行われ始めていたことを示す。そして同時代またはそれより少し下って F 地区 1 号やぐら中央塔が造立されたと見られる。

D 地区は 2 号やぐら D2-1 塔以降、石塔造立に開きがあり、15 世紀後半ごろから造営が活発化する様相を見せる。この流れは 16 世紀あるいは近世まで続けられたと見られる。これに対し F 地区は 1 号やぐら F1-8 塔造立後間隔を置かずに造塔が行われており、15 世紀前半代までで周囲の 4 基 (F1-7、6、9、10) が納められ、15 世紀後半以降となる残りの 9 基が順次造塔されていくのに先立ち、3 号やぐら F3-1 などの造塔も見られるようになる。また、損壊のため型式判断できない 3 号・4 号やぐらの間の五輪塔や板碑は、立地から見れば 3 号やぐらより古い可能性があるなど、F 地区のやぐらの造営や造塔行為は絶えることなく 16 世紀代、もしくは近世まで継続していたものと考えられる。

第 2 節 瓜谷路について

やぐらは鎌倉地方に特徴的に存在する岩窟形式の中世の埋葬・供養施設である。西瓜ヶ谷やぐら群には、五輪塔・板碑・宝篋印塔といった中世に特徴的に墓塔・供養塔として用いられた石塔の彫刻が存在する。五輪塔の彫刻は国指定史跡仮粧坂に存在する瓜ヶ谷やぐら群にも確認されており、それと同質である。瓜ヶ谷やぐら群と比べて石塔の規模はやや小さいが、編年的な経過が覗われ、継続して五輪塔が彫刻されて供養が行われたところに特徴がある。やぐら内の五輪塔の彫刻は鎌倉市内でもその数は極めて少ない。また今回確認された宝篋印塔の彫刻は本遺跡の物を含め、鎌倉市内で僅かに 3 例しか存在しておらず、例が極めて少ない。屋外のレリーフとしては唯一の遺例である。宝篋印塔は本来舍利塔である。その造立位置が五輪塔の彫刻を有する 1 号やぐらと 2 号やぐらの角にあり、宝篋印塔に納骨施設を持たないことから、やぐら群に埋葬された総ての被葬者を対象とした総供養塔として造立された可能性がある。総供養塔としての宝篋印塔は鎌倉では由比ヶ浜の中世埋葬地の北端の高地、国指定重要文化財 (石造建造物)「鶴岡八幡宮 一の鳥居」の脇に存在する鎌倉市指定有形文化財 石造宝篋印塔「伝畠山重保墓」(塔高 333cm)がある。また鎌倉十刹の一つ大慶寺の旧境内地と推測されるやぐら群中に建立されたと考えられる鎌倉市指定有形文化財 石造宝篋印塔「泣き塔」(203cm)がある。当遺跡の型式は関東型と考えられるが、基礎上端部が一段しかなく、塔身の幅が広く全体のバランスを崩している点、彫像に写すに当たりデフォルメが行われた可能性もあるが、こうした塔が崖面に彫り込まれて造立された事例は本件のみであり、風化が進んでいるものの貴重である。

当遺跡は鎌倉北条氏の所領でありその直接支配下にあった山ノ内荘の中心部に近接し、「重要文化財円覚寺境内絵図」にある「瓜ヶ谷路」の図面に描かれた外側ではあるが、そのルート上にあると推定される。切通を伴う大規模な道は他に存在しないことから、瓜ヶ谷道は現状の道路からは本遺跡の北側を通り、本遺跡が存在する尾根の北麓から尾根上に至り、江戸時代末には廃道となっていた切通道を通っ

て南側の尾根道に至り、東に折れて葛原ヶ岡に至ると推測される。このことから、やぐら群は山ノ内から仮粧坂に至る交通路の入り口に造られたやぐら群であり、国指定史跡仮粧坂・大仏切通・朝夷奈切通のやぐら群の在り方と類似する。

山ノ内のうち、円覚寺前西方の十王堂橋以东は鎌倉の内であるとの意見があり、これに従えば当遺跡は中世鎌倉の内であり、当遺跡は十王堂橋から瓜ヶ谷道・仮粧坂を経由して佐助方面に抜けるルート上にある。石塔の彫刻を持つやぐらは、山ノ内地区に一つの中心があり、その代表は国指定史跡仮粧坂の指定地内に存在する瓜ヶ谷やぐら群である。その造営開始は鎌倉時代後期から末期に当たる14世紀前半頃の造営であり、当該地が北条氏の直接支配した山ノ内荘の中心部に近接することから、北条氏の信仰と関わる可能性も指摘されよう。

尾根上の遺構は今回の調査では性格は知りえなかったが、鎌倉の周囲を圍繞する山稜と同様に人為的な平場造成の痕が確認された。塚西側には、尾根の頂部上面を削平し、その両谷側に細長い平場を形成していることから、尾根上に土塁と削平された平場からなる遺構群が存在することが推測された。このことは尾根北側に切通道が存在することと関連し、切通の防御的性格と関わる施設となるかもしれない。

遺跡の主に北側に展開する切石の切出し遺構は今回、発掘調査を行っていないため年代が明らかではないが、北側に隣接する宅地の立会工事の際、やぐら群を壊して石切が行われ、一部に宝永の火山灰層が堆積している状況を確認していることを考慮すると、石切の時期は中世に遡っても15・16世紀までではないかと推測できる。

第3節 まとめ

詳細分布調査の実施により、西瓜ヶ谷やぐら群を中心とする山ノ内の瓜ヶ谷地区全体におけるやぐらの分布状況を把握することができた。その結果、壁面に石塔の彫刻を有するやぐらは瓜ヶ谷地区の全体に均質に分布するのではなく、詳細分布調査を実施したD地区とF地区に集中して存在することが明らかになった。

鎌倉市内には現在でも多数のやぐらが存在しているが、そうしたやぐらでは具体的に五輪塔や宝篋印塔といった石塔を玄室内に安置することが広く一般的に行われている。にもかかわらず、西瓜ヶ谷やぐら群では石塔類を玄室内に安置するのではなく、直接、玄室内の壁面に石塔を浮き彫りするという手法でやぐらを造営している。このことはやぐらにおける墓制のありかた、そして信仰のありかたを考えるうえでの重要な状況である。

瓜ヶ谷地区のやぐらはいずれも14世紀の前半に構築され、その後玄室の拡張や土壌の掘削といった改変が行われたものもあり、引き続き15世紀以降にもやぐらにおける石塔の浮き彫りが行われた。本章第1節で考察を述べたとおり、やぐらに石塔の浮き彫りを行う行為は、近世まで継続されていた可能性が予想されるところとなった。西瓜ヶ谷やぐら群の調査で明らかになったやぐらの存続期間は、これまであまり研究が行われていないやぐらの造営や利用の終焉に関する問題に重要な手がかりを提供することになると考えられる。

前節で述べたとおり、やぐら群の所在する丘陵部の山裾に切通状遺構や切岸状遺構が確認され、この場所を通過する道の存在が明らかになった。さらにこの道が円覚寺境内絵図に描かれた「瓜谷路」に連なるものと推定できることから、鎌倉を取り巻く山稜部におけるやぐら（＝宗教遺跡）と交通路に深い関係が認められると考えることができる。本遺跡は中世墓としてのやぐらという性格だけでなく、鎌倉

の中世交通路に関係する遺構として重要と考えられる。今後もさらに当該遺跡の性格を明らかにするため、調査を継続していく必要がある。

引用・参考文献

- 秋山哲雄 2009「都市の地主—敷地絵図にみる鎌倉の寺院—」
高橋慎一郎／千葉敏之編『中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ—』東京大学出版会
- 伊丹まどか 2000「円覚寺門前遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 第2分冊、
鎌倉市教育委員会
- 井上哲朗 1997「房総半島における「やぐら」—線刻・浮彫五輪塔を中心として—」
『史館』29号、史館同人
- 井上哲朗 2004「房総の「やぐら」—線刻・浮彫五輪塔の再検討—」
『中世東国の世界2 南関東』高志書院
- 太田博太郎 1971『中世の建築』彰国社
- 神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・財団法人かながわ考古学財団 2001
『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査』
- 鎌倉国宝館 1966『鎌倉の古絵図(1)』(『鎌倉国宝館図録』第15集)
- 鎌倉市教育委員会 1963『かまくら子ども風土記』
- 鎌倉市教育委員会 1972「瑞泉寺裏山やぐら群」『鎌倉の文化財』第2集
- 鎌倉市教育委員会 1974「瓜ヶ谷やぐら群」『鎌倉の文化財』第6集
- 鎌倉市教育委員会 1996『仮粧坂周辺詳細分布調査報告書』
- 鎌倉市教育委員会 2005『西瓜ヶ谷やぐら群2分布調査概要報告書』
- 鎌倉市教育委員会 2007『史跡覚園寺境内保存管理計画書』
- 鎌倉市教育委員会 2007『史跡瑞泉寺境内・名勝瑞泉寺庭園保存管理計画書』
- 鎌倉市教育委員会 2008『史跡朝比奈切通他保存管理計画書』第1分冊、第2分冊
- 鎌倉市教育委員会 2010『史跡円覚寺境内・名勝円覚寺庭園保存管理計画書』
- 古田土俊一 2012「中世前期鎌倉における五輪塔の様相」『考古論叢神奈河』第20集、
神奈川県考古学会
- 小林康幸 2013「壁面に彫刻を有する「やぐら」」『考古学論究』第15号、立正大学考古学会
- 佐藤道雄 1998「相模国円覚寺境内絵図の作成過程に関する一考察」『國學院雑誌』99号
- 高原豊明 1997「相模の清明伝説—鎌倉を中心に—」『山岳修験』19号
- 戸田さゆり 2010「「円覚寺境内絵図」の文字記載に関する一考察」『文化財学雑誌』6号
- 福島金治 2004「災害より見た中世鎌倉の町」『国立歴史民俗博物館研究報告』118号
- 松尾剛次 1993『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館
- 馬淵和雄 2006「西瓜ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 第1分冊、
鎌倉市教育委員会
- 山田健二 1993「西瓜ヶ谷遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』35、神奈川県教育委員会
- 湯山学 1999『南関東中世史論集 5 鎌倉北条氏と鎌倉山ノ内—得宗領相模国山内庄の様相—』私家版
- 湯山学 2011『相模武士—全系譜とその史蹟—〈4〉横山党曾我氏・山内首藤氏・毛利氏』
戎光祥出版

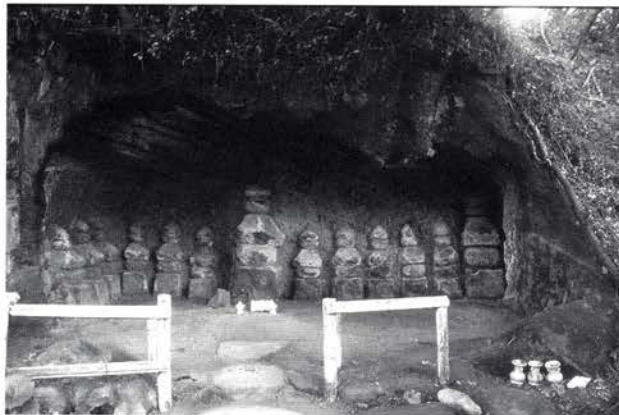
表4 鎌倉市内におけるやぐら壁面の石塔彫刻集成表

彫刻種類	遺 跡 名	遺構名	位 置	基数、技法等の特徴
五 輪 塔	西瓜ヶ谷やぐら群	1号	奥壁	10基、半肉彫
			左側壁	4基、半肉彫
		3号	奥壁	1基
		3・4号中間	外壁	2基
	東瓜ヶ谷やぐら群 (瓜ヶ谷やぐら群) ※史跡仮粧坂	1号	奥壁	半肉彫、奥壁右隅に大型1基、 その他半肉彫4基
		2号	奥壁	半肉彫、大型の1基
		3号	奥壁	半肉彫3基
			右側壁	扁平(板状)3基
	百八やぐら群	8号	奥壁	3基
		19号	奥壁	線刻、種子あり
		23号	奥壁及び右側壁	11基、表面に白色の化粧
		24号	奥壁右側	扁平(板状)
		32号	奥壁	4基、扁平(板状)、通称「五輪窟」
		41号	奥壁	5基、地輪の丈が高い高足塔婆状、 種子の代わりに妙法蓮華経を刻む
			右側壁	4基
			左側壁	2基
		46号	奥壁及び両側壁	巨大な五輪塔を刻む
		48号	奥壁	1基、3mの五輪塔
			右側壁	1基
			左側壁	1基
		53号	奥壁	1基
		60号	奥壁	3基、扁平(板状)
		78号	右側壁	2基、地輪のみ
		85号	奥壁	3基
		86号	奥壁及び両側壁	9基(各面3基)
		92号	奥壁	2基
		100号	奥壁	風化
		127号	奥壁及び両側壁	6基(各面2基)
		128号	奥壁	3基
		134号	奥壁	2基
		138号	奥壁	2基
	瑞泉寺裏山やぐら群	39号	奥壁左方	まわりをへこませた浮彫
		60号	左右の両側壁	左4基、右2基。扁平(板状)
	東泉水やぐら群	13号	奥壁	3基
			左側壁	1基
	光触寺裏谷奥やぐら		左側壁	1基
	極楽寺前やぐら		奥壁	3基
宝篋印塔	西瓜ヶ谷やぐら群	1・2号中間	外壁	1基
	百八やぐら群	78号	奥壁中央	風化が著しい
	東泉水やぐら群	13号	奥壁中央	左右両側に五輪塔の彫刻あり
板 碑	西瓜ヶ谷やぐら群	2号	奥壁	風化が著しく、輪郭線のみ確認
		3号	奥壁	浮彫、明瞭な二条線あり
		3・4号中間	外壁	輪郭線の一部のみ
	瑞泉寺裏山やぐら群	39号	右側壁の中央	バン(大日如来)、キリーク(阿弥陀如来)
宝 塔	瑞泉寺裏山やぐら群	65号	義道外の左壁	蓮座上に安置された宝塔
多 層 塔	東泉水やぐら群	13号	右側壁	



写真図版

写真図版 1 平成 17 年度調査



1号やぐら全景 調査前状況（東から）



南壁 浮彫五輪塔（北から）



奥壁 浮彫五輪塔（東から）



奥壁および北壁 浮彫五輪塔（南東から）



1号やぐら床面土坑検出状況（東から）



土坑内出土遺物近景 南側（東から）



土坑内出土遺物近景 北側（東から）



土坑内出土遺物近景 北端（東から）

写真図版 2 平成 17 年度調査



1号やぐら全景 床面出土状況（東から）



土坑内 五輪塔・板碑出土状況（東から）



土坑内 かわらけ出土状況（西から）



土坑内 土層堆積状況（南から）



土坑出土状況（北から）



1号やぐら北壁出土竈（南から）



2号やぐら 3号やぐら（南から）



3号やぐら（南から）

写真図版 3 平成 17 年度調査



2号やぐら (南から)



3号・4号やぐら間壁面 浮彫石塔 (南から)



4号やぐら (南から)



4号やぐら石塔除去後状況 (南から)



5号やぐら (南東から)



5号やぐら近景 (南東から)



5号やぐら内掘り込み (東から)



5号やぐら内掘り込み (東から)

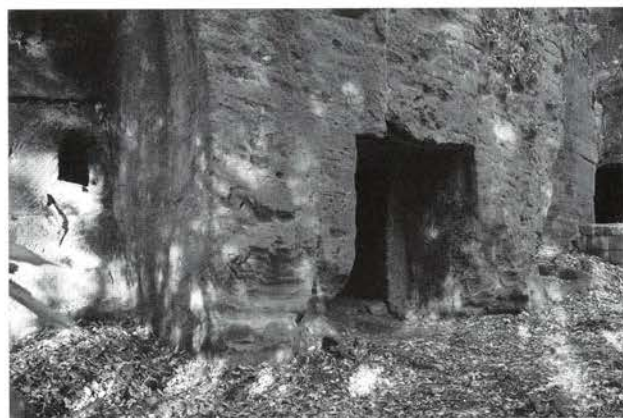
写真図版 4 平成 24 年度調査 A 地区やぐら 分布図番号①



1 号やぐら前庭部および開口部 (南から)



ドーム状掘削遺構 (南から)



1 号やぐら開口部 (南西から)



2 号やぐらおよび石切り遺構遠景 (南から)



平場北壁切岸遠景 (南西から)



平場北壁切岸遠景 (西から)



3 号やぐら開口部 (西から)



1 号やぐらおよび北壁切岸 (東から)

写真図版 5 平成 24 年度調査 A 地区やぐら ①



1 号やぐら奥壁（南から）



1 号やぐら西壁（東から）



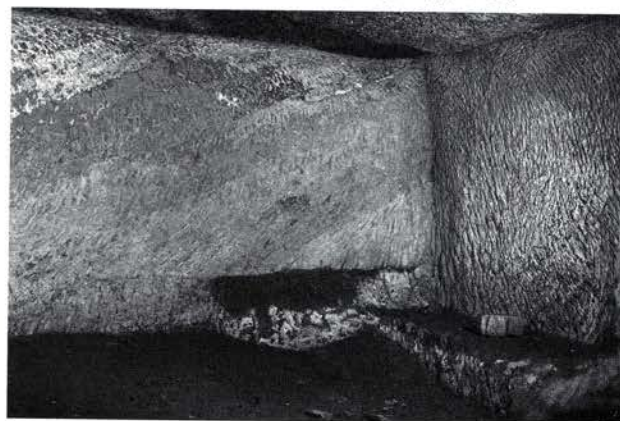
1 号やぐら東壁（西から）



1 号やぐら南壁 開口部（北から）



1 号やぐら南東角 出入口（北西から）



2 号やぐら南東角（北西から）



2 号やぐら奥壁（南から）



2 号やぐら西壁（東から）

写真図版 6 平成 24 年度調査 A 地区やぐら ①



2 号やぐら北西角 (南東から)



2 号やぐら南西角 (北東から)



2 号やぐら南壁 開口部 (北東から)



2 号やぐら南壁 開口部 (北から)



2 号やぐら南西角 通路 (北東から)



② B 地区 上部の平場から F 地区を望む



③ B 地区 上部平場所在の切岸



④ B 地区 谷戸最奥にあるやぐら

写真図版 7 平成 24 年度調査 B・C・D 地区



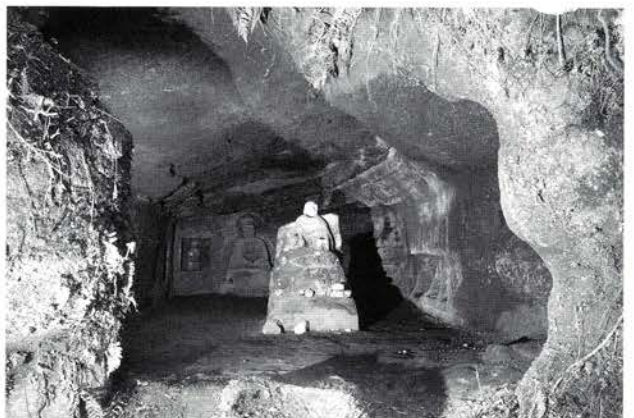
⑤ D 地区 葛原岡道標 道標立地



⑥ D 地区 谷戸遠景（北から）



⑦ 瓜ヶ谷やぐら群遠景（南西から）



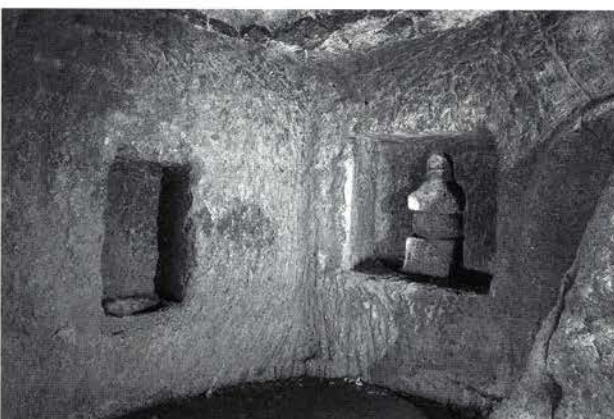
D 地区 1 号やぐら（南から）



D 地区 1 号やぐら 奥壁（南から）



D 地区 1 号やぐら 東壁（北西から）



D 地区 1 号やぐら 北西角（南東から）



D 地区 1 号やぐら 掘り込み C（南から）

写真図版 8 平成 24 年度調査 D 地区やぐら ⑦



D 地区 1 号やぐら掘り込み d・e・f (西から)



D 地区 1 号やぐら 石仏



D 地区 1 号やぐら 東壁人物陽刻像



D 地区 1 号やぐら 東壁彫刻



D 地区 1 号やぐら南壁 開口部 (北から)



D 地区 1 号やぐら西壁 (東から)

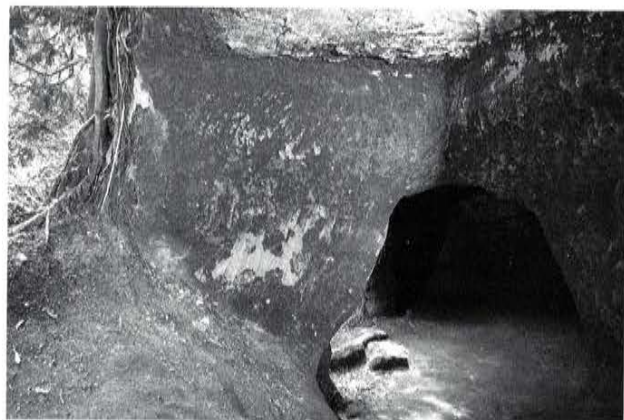


D 地区 1 号やぐら北東角 土坑掘り込み (南西から)

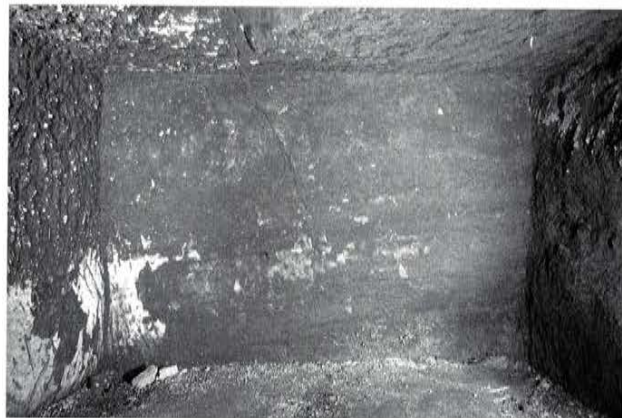


D 地区 2 号やぐら (南から)

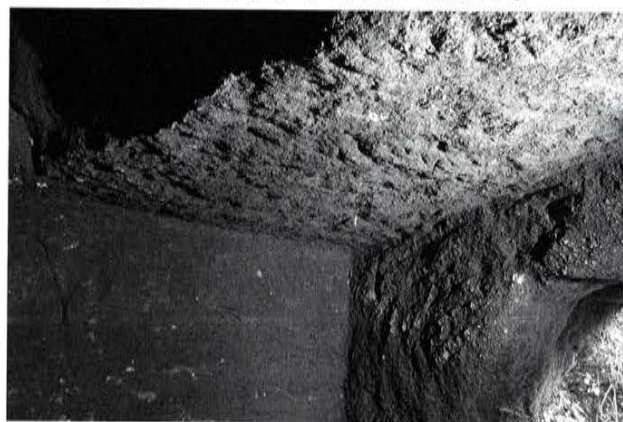
写真図版 9 平成 24 年度調査 D 地区やぐら



D 地区 2 号やぐら 西壁 (東から)



D 地区 2 号やぐら 東壁 (西から)



D 地区 2 号やぐら南東角 天井構造 (北西から)



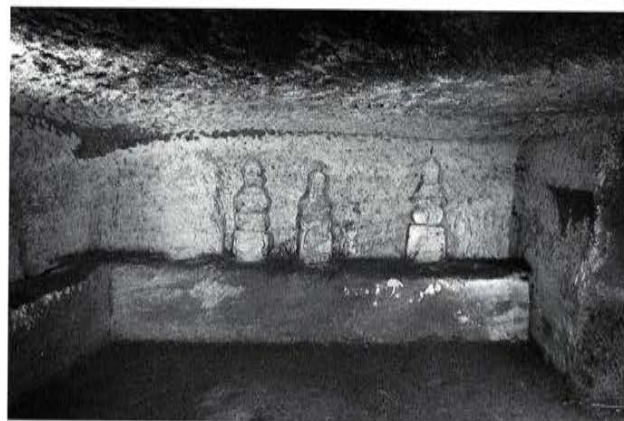
D 地区 3 号やぐら (南から)



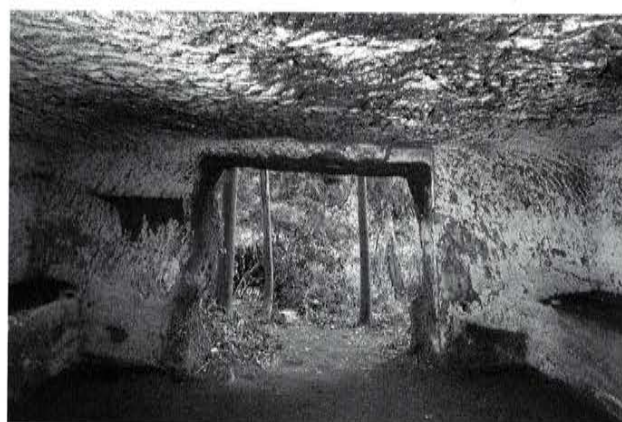
D 地区 3 号やぐら 奥壁 (南から)



D 地区 3 号やぐら 西壁 (東から)



D 地区 3 号やぐら 東壁 (西から)



D 地区 3 号やぐら 南壁 (北から)

写真図版 10 平成 24 年度調査 E・F・G 地区



⑧ E 地区 谷戸奥 (北から)



⑨ E 地区 谷戸奥の高台より (南から)



⑩ F 地区 尾根を望む (北東から)



⑩ F 地区 尾根を望む (南東から)



⑪ G 地区 住宅敷地内所在のやぐら



⑫ G 地区 尾根露出する岩盤



⑬ G 地区 尾根東壁面の切岸 1



⑬ G 地区 尾根北東壁面切岸所在の防空壕 1

写真図版 11 平成 24 年度調査 G 地区



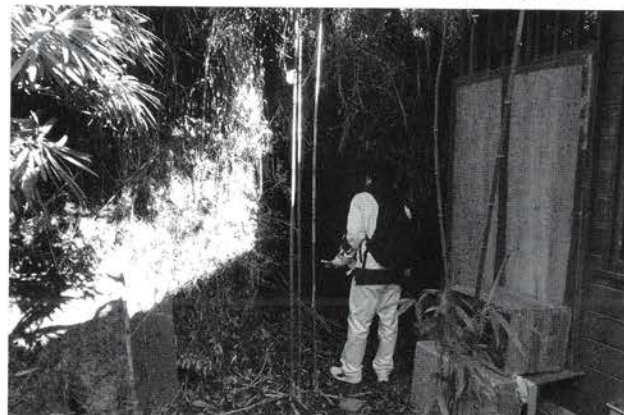
⑬ G 地区 尾根北東壁面切岸所在の防空壕 2



⑭ G 地区 尾根先端部住宅裏所在の防空壕



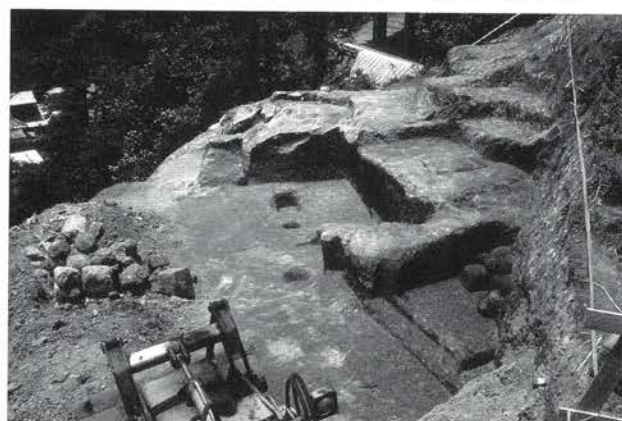
⑮ G 地区 尾根東壁面にある切岸 2



⑮ G 地区 尾根東壁面切岸 2 所在の防空壕



⑯ G 地区 尾根上から F 地区を望む



⑰ G 地区 昭和 54 年宅地造成時 遺構出土状況



G 地区 昭和 54 年出土浮彫五輪塔



G 地区 昭和 54 年 宅地造成状況



トレンチ 3 調査前現況 (2 号やぐら)



トレンチ 3 調査前現況 (1 号やぐら)



トレンチ 3 調査前現況 (5 号やぐら)



トレンチ 3 調査前現況 (3・4 号やぐら)



トレンチ 3 調査状況 (4・5 号やぐら)



トレンチ 3 調査状況 (2・3・4 号やぐら)



トレンチ 3 調査状況 (4 号やぐら)



トレンチ 3 作業状況

写真図版 13 平成 25 年度調査



トレンチ 2 全景（南西から）



トレンチ 2 全景（北東から）



トレンチ 1 岩盤削平面（北東から）



トレンチ 1 全景



切通状遺構（西から）



切通状遺構（東から）



切通状遺構（東から）



やぐら群北側の平場（西から）

写真図版 14 石塔



D1-1



D1-2



D1-3・D1-4・D1-5



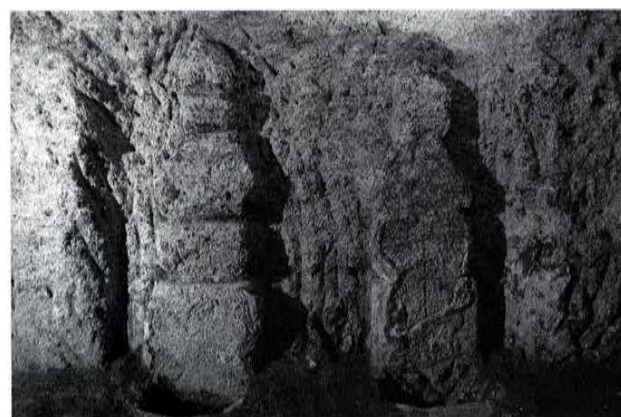
D1-6・D1-7



D2-1



D3-1



D3-2・D3-3



D3-4



D3-5



D3-6・D3-7 および墨書



D3-8



線刻残痕

写真図版 15 石塔



F1-1



F1-2



F1-3



F1-4



F1-5



F1-6



F1-7



F1-8



F1-9



F1-10



F1-11



F1-12



F1-13



F1-14



F1-15



F2-1

写真図版 16 石塔・遺物写真



F3-1



F3-2



F4-1・F4-2・F4-3

写真図版 17 遺物写真



第29図1



第29図2



第32図1



第32図2



第32図3



第32図4



第32図5

報告書抄録

ふりがな	にしうりがやつやぐらぐんちょうさほうこくしよ							
書名	西瓜ヶ谷やぐら群調査報告書							
副書名	平成24年度 詳細分布調査／平成25年度 重要遺跡確認調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	玉林美男・小林康幸・古田土俊一・小脇拓行							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
にしうりがやつやぐらぐん 西瓜ヶ谷やぐら群	神奈川県鎌倉市 山ノ内字西瓜ヶ谷 1100番外	14204	319	35° 20' 6"	139° 32' 32"	20130901 ～ 20140331	44.00	重要遺跡 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
にしうりがやつやぐらぐん 西瓜ヶ谷やぐら群	やぐら	中世 (14・15世紀代)	やぐら、切通状遺構	かわらけ、陶磁器、五輪 塔、板碑、宝篋印塔	